
綾

葛城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

綾

【Nコード】

N9840F

【作者名】

葛城

【あらすじ】

どこにでもいる少女、高田綾。彼女は出来の良い姉と比べられ、周囲から蔑視され、愛情を受けることなく生きていた。クラスメイトから酷い虐めを受け続けた中、綾の中で不思議な力が湧き上がり、虐めていた人達を返り討ちにする。そのことに強いショックを覚えた綾は1人全てから逃げる。とある公園で休んでいた綾の元に、喜一と名乗る青年が声を掛ける。初対面にもかかわらず、喜一は優しく綾を気遣い、無償で家に泊めてくれる。不信任を覚えながらも、綾は彼の家に転がり込んだ。綾は始めて人の優しさに触れ、甘えた。

だが、ある日喜一は謎の男に殺されてしまう。その日、綾の復讐の旅が始まった。＊ジャンルをその他に変更しました＊

第一話：プロローグ（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカニバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださるようお願いします。

ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています。

第一話：プロローグ

ソレは、歓喜の産声を上げた。

赤い生命の中で、ソレは喜びの歌を歌った。

（ああ……ついに、ついにこの日がやってきたのね……）

ソレは自らの母体になる、赤ん坊の中で、願い続けた儚い希望が叶うことを、心の底から喜んだ。

（そういえば、周りの状況は？）

今まで通り、母体の目を通して辺りの状況を確認する。

だが、それが出来ないことに、ソレはすぐに気づいた。

まだ母体は生まれたばかりの赤ん坊なのだ。まだ眼球を使うことなど、もちろんできないのだ。

無理をすれば、出来ないことではないが、それでは母体を傷つけてしまう。

ソレにとって、そんなことは出来るわけがなかった。

（ああ……私ったら、お馬鹿さんね……）

ソレは、自分の軽率な行動を恥じた。

長い、気の遠くなるような長い時間を生きたソレは、そんな当たり前なことを失念していたことを、深く反省した。

しかたないので、母体の皮膚の一部を変質させ、耳を作り出す。

もちろん、見た目には全く見分けが付かないようにして、だ。

そうすることによって、ソレは不完全ながら、外部の情報を知ることができた。

『あ、高田様、もう大丈夫ですよ、安心してください』

ソレは声の音程から、今しがた喋った人物を男だと判断した。年齢は30代後半から、50代前半まで。ソレの記憶から判断すると、人物は医者だとも判断した。

『ありがとうございます、先生。恵子、よく頑張ったな』

ソレは声の音程から、今しがた喋った人物を男だと判断した。年

齡は20代後半から、30台後半まで。ソレの記憶と、言葉の内容から考えると、声の人物を母体の父親だと判断した。

『奥さんでしたら、今は眠っています。出産で疲れたのでしょうか』

『そうですか……それで、恵子の容態は？』

『詳しい検査をしてみなくては分かりませんが、ただ疲れているだけでしょうね。二度目の出産でしたし、精神的な疲労も軽いでしょう』

『本当に、何から何までありがとうございます。ところで、この子は男の子でしょうか、女の子でしょうか？』

（女の子よ）

聞こえないと分かっているが、ソレは答えた。

母体が人間の形になり始めた時点で、ソレは母体が女の子であることが分かっていた。

誰よりも早く母体のことを知っていたということを、不思議と誰かに自慢したい気持ちだった。

『可愛い女の子ですよ。将来は美人になりそうな顔立ちをしています』

（美人に決まっているじゃない）

ソレは医者言葉を補足した。

『ところで、この子の名前は決めていますか？』

『はい、決めています。女の子なので、綾、という名前にしようかと…』

『綾……良い名前じゃないですか』

アヤ……綾……か。

ソレは母体の名前を、何度も胸の中で反芻した。何の変哲も無い名前だが、愛しいものの名前になると、どうしてか特別な名前に思えてしまう。

（よろしくね……綾）

別れの言葉を母体に、綾に掛ける。

赤ん坊の女の子、綾は、答えることはなく、スヤスヤと寝入って

いた。

こうして、綾は元気な女の子として生まれた。

同時に、綾は運がなかった。

もし、綾の今後の境遇を知る人ができたなら、きっとその人はこう話すだろう。

せめて、別の家の子供として生まれて来れば、と。

綾には3歳程、年の離れた姉がいた。

そして、この姉は神に愛された子供だった。逆に、綾は神から見放された子供だった。

幼いときから、姉は天性の才能の片鱗を見せていた。

同年代の誰よりも早く文字を覚え、同年代の誰よりも頭が良かった。

運動神経も抜群で、駆けっこをすれば男子よりもよっぽど速く走れたりした。身体も丈夫で、風邪が流行った時期にも、平気で外を駆けずり回ったりしていた。

反面、綾は発育の遅い子供であった。

同年代の誰よりも文字を覚えるのが遅く、同年代の誰よりも頭の回転が悪かった。

運動神経も悪く、駆けっこをすれば必ずビリになった。身体も虚弱で、季節の変わり目には必ず風邪を引いた。

だが、これぐらいは子供の内にはよくあること。個人差が出て当たり前なのだ。

けれども、綾の両親はそうは思わなかった。

初めて出来た子供、つまり姉の出来があまりにも良すぎて、それが普通だと思ってしまったのだ。

不幸にも、周りの人達も姉と綾を比べてしまうことが多かった。

なので、ことあるごとに姉と綾を比べ、姉が出来たことが出来なかったら、両親は綾を叱りつけた。

もちろん、出来なくてもなんら変なところはない。実際、綾はそこまで言うほど出来が悪いわけではなかった。

ただ、比較する相手が悪すぎたのだ。

二人が年を重ねるに連れ、綾に対する態度と、姉に対する態度に差が生じ始め、いつしか両親は綾のことを見向きもしなくなった。

小学校に入学するときは、お下りのランドセル。中学校に入学するときは、お下りの鞆。

服も全てお下がりで、決して綾に服が買い与えられることはなく、いつも洗濯のし過ぎでボロボロになった服を着ていた。

いつしか綾の誕生日は忘れ去られ、姉の誕生日が綾の誕生日になっていた。なぜならば、姉が飽きてしまったものが、唯一の誕生日プレゼントだから。

外に出かけるときも、必ず綾は留守番。一人寂しくカップラーメンを啜ることも、少なくなかった。

孤独を味わい続けた綾は、いつしか他人の前で本当の自分を見せることがなくなった。

いつも口を噤み、辛いことがあれば唇をかみ締め、楽しいことがあれば、誰にも見付からない場所で、こっそり笑った。

それは小学生になっても、中学生になっても、変わらなかった。

第二話：予感（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカニバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださるようお願いします。

ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています

第二話：予感

「ただいま、お母さん」

学校から帰宅した高田綾は玄関を抜けてリビングに入ると挨拶をした。

「ああ、綾？　これからお母さん達、ご飯食べに行くから」

ソファーに座っている女性がいた。亜麻色のシャツに膝下まであるスカートを身にまとった高田綾の母、聡子は、家に帰ってきた娘の声に立ち上がった。次いでテーブルに置いてある時計に目をやり、綾に顔を向けた。

「帰りは遅くなるから、綾は一人でご飯済ませておきなさい」

綾の目を一度も見ることなく、聡子は綾の隣を通って玄関に向かった。

「あ、そうそう、お金はテーブルの上に置いてあるから」

聡子は振り返ることなく、玄関前に座り込み、靴を履いていく。

「お母さん、お姉ちゃんは？」

綾は、自分の姉達のことを聞いた。親が出かけるのであれば、姉達と一緒に夕飯を決めなくてはいけない。綾は姉妹の仲では一番下の末っ子なので、おいそれと決めるわけにはいかないからだ。

しかし聡子は、娘の言葉に思わず、といった様子で笑みを見せ、振り向いた。ファンデーションと化粧によって皺が見えにくくなった彼女の目尻に、皺ができた。

「聞いてなかったの？　私は一人で済ませなさいと言ったのよ。お姉ちゃん達も一緒に食べに行くの、あなたは留守番」

聡子は玄関のドアを開け、パンプスを鳴らして出て行った。ドアが閉まった。綾にとって、そのドアはまるで自分と自分を隔てる扉を連想させた。一度も目を合わせることなかった母の後姿を思い出した。

「っ！」

綾は力いっぱい右手で真横の壁を殴った。少し黒ずんでいる壁に小さな亀裂が入り、メキッと、壁が鈍い悲鳴を上げた。

綾は俯いて大きく深呼吸すると、僅かに痛みを訴えてくる右手を、そつと左手で擦った。右手を眼前まで持ち上げた。出血はしてなかったが赤くなっていた。

しかし、すぐさま踵をひるがえして無言のままに自室へと向かった。その肩は小さく震えていた。

綾の部屋は、いわゆる今時の子供の部屋といってもいいものだった。入って真正面に窓があり、窓のしたに小さい本棚が置かれていた。その左奥にベッドと手前にクローゼット、右奥に学習机と手前にテレビ。一見すると男の子の部屋にも見られるが、ベッドの枕元にはいくつかのヌイグルミが鎮座されていて、それがこの部屋の主が女性であることを告げていた。

綾は自室に入ると、学校指定の鞆を机の上のノートパソコンの横に置いた。

このノートパソコンも、姉からのお下がりだ。捨てるのが勿体ないという、ただそれだけの理由で、与えられたものだ。

それに加え、このパソコンにはウイルスが入ってしまっている。まともに起動することもできない。はつきり言って、置いていても意味がないものだ。

けれども、綾には捨てることができなかった。このパソコンと、今の自分がどこか似ていたような気がしたからだ。

綾はゆっくりと大きくため息を吐くと、ぼすん、と音を立ててベッドにうつ伏せに倒れこんだ。反動で肩甲骨の辺りまで伸びた綾の髪が放射状に広がった。

枕に顔を埋めたまま数分、その間、枕元に置いてある時計の秒針が刻む音が静まり返った部屋に反響していった。

「……いつものこと、気にしてもしかたがないわ」

ベッドに体を預けていた綾は、のそりと動き出した。ゆっくりと体を起こして立ち上がると、またのそのそと着替え始めた。

「あゝ、疲れた。今日も一日がんばりました……っと」

学校指定のリボンを解き、引っ張る。リボンをおざなりにまとめると机の上に置いた。制服とスカートも脱ぎ捨て、皺が無いかを確認した後、ハンガーに掛けてクローゼットに入れる。

一通り着替え終えて、最後に大きく背伸びをして深呼吸した。

綾は鞆から教科書とノートを取り出すと、ノートパソコンを床に置いてから、机の上に広げた。長年愛用している椅子に座ると、キィっと、音を立てた。ジャマに感じた鞆を椅子の横に下ろし、学校から持ち帰った宿題を始めた。

この日渡された宿題は英語のテキストの写し。英語の担当である竹田先生は、必ず現在やっている次のページをノートに書かせるのだ。

先生いわく、教科書を読んだくらいではまず英単語は覚えられない。事前に英単語を覚えた上で、教科書を読む。これで初めて英単語を覚えられるとのこと。

二回に一回はこの台詞が口から出るせいで、気がついたら綾は、テキストの写しを面倒くさいと思いながらもしっかりやるようになっていた。

「……あれ？」

いつも通りシャーペンを取り出し、いざ始めようと構えた瞬間、綾は違和感を覚えた。握ったシャーペンの異様な感触に思わず、手を止めたのだ。

それだけじゃない。感触だけでなく、その瞬間に乾いた音が鳴ったのも要因の一つだ。不思議に感じた綾は、教科書から視線を手元に向け、目を見開いた。

右手の指で押さえたシャーペンが不自然な方向に曲がっていた。いや、よく見ると、曲がったのではなく、中心から二つに折れ曲がっていた。

「な、なによ、これ？」

シャーペンをまだ何も書き込んでいない真っ白なノートの上に置いた。まじまじと観察を続けていると、あることに気づいた。

「握ったとき凄く柔らかかった……わよね……亀裂でも入っていたのかしら？」

それにしても不に落ちない部分があるのを、綾は感じていた。

いくら亀裂が入っていたとしても、自分の力でシャーペンを折ることができないのは分かっているからだ。

それにあの感触、何か細い棒を折ってしまったような感覚。

あまりの手応えのなさに違和感を覚えたくらい、あっさり折れてしまったのが、綾を納得させなかった。

「うわ、気持ち悪い、今日は止めよう」

シャーペンをゴミ箱に投げ捨てると、教科書とノートを鞆に直した。そして、鞆の中から緑色の冊子を取り出すと、机の上に放り投げた。

緑色の冊子、『風蘭中学校：秋の修学旅行のしおり』を広げ、目次を開いた。

「明日は8時にグラウンドに集合か。持っていく物を用意しないと」
集合時刻と、当日の必要なものを確認する。椅子から立ち上がり、大きなリュックを探すため自室を出て行った。その左手にはしおりが握られていた。

なんて楽しい夢だろう。私は心の底から思った。

どうしてそれが夢だと気づいたのか分からない。ただ、唐突に夢だと思っただけなのだ。

夢の中の私は何よりも速かった。

何もない荒野を、雪景色を、森を、町を、二本の足を交互に動かし、走る、走る。

シアターのように世界がぐるぐる移り変わり、瞬く間に景色が色を変えていく。

夢の中の私は何よりも強かった。

出てくる人、人、人。私は蟻を踏み潰すかのように、彼らを蹴散らしていった。

拳を振れば屈強な男は唸り声を上げて倒れ、蹴りを放てば服従の悲鳴を上げ、声を出せば誰もが私に道を譲った。

ぐう。

突如鳴ったお腹に足を止めた。

お腹を擦り、気を落ち着ける。なんだかとても、お腹がすいた。そう考えると、さらにお腹が食料を催促してくる。空腹感が少しずつ強くなってきている。

顔を上げると、いつの間にか景色は町中に変わり、私は屈強な男達に囲まれていた。

全員が鎧兜を身にまとい、私に向かって剣を突きつけ、弓を構えていた。

「観念しろ、化け物！」

男の一人が私に向かって怒声を浴びせる。普通なら恐怖に怯えてしまうところだけど、私には怖くなかった。

「成敗！」

別の男が弓を引き締め、矢を放つ。

放たれた矢は風を切り裂き、トン、と拍子抜けた音と共に、私の心臓を貫いた。

胸が熱い。痛みは感じなかったが、矢が刺さった部分が熱かった。「皆の衆、今だ、矢を放て！」

矢を放った男の号令に従い、一人、また一人、私へ矢を放つ。それらは寸分の狂いも無く、私の身体を貫いた。

反対の胸を、また心臓を、腕を、腹を、足を、太ももを、腕を、頭を、口を、胸を、足を、目を、腹を、私を貫いていく無数の矢。

眼球を引き裂き、筋肉を巻き込み、血液を連れて、私の身体を破

壊していく。

大量の血液が傷口から噴出す。すぐに、赤く染まった地面の上に、膝をついた。

「おお！ やった、化け物を退治したぞ！」

兜に包まれた顔が、誇らしげに綻ぶ。それは他の男達も同様で、全員息をつき、構えていた弓を、剣を下ろした。

その瞬間、私は最初に矢を放った男に飛び掛った。

剣を構えるよりも、弓を構えるよりも、男が身構えるよりも早く、鎧兜を引きちぎって、無理やり顎を持ち上げる。

健康的で生命力溢れる首筋が、私の眼前に晒された。

ああ、とても美味しそうだわ。

恐怖に引きつった目の前の男も、横で腰を抜かした男も、今はどうでもよかった。

ゆっくりと男の首筋に顔を寄せる。

口を大きく開けて、味わうようにゆっくりと首筋に噛み付いた。

朝から変な夢を見た。正直な意見はそれだった。

疲れているのだろうか。そうも、考えた。

もしかしてそういう願望があるのだろうか。はっきり違う。

いくらなんでも、カニバリズム願望は無い。綾は憂鬱な気分になりながらも、台所に顔を出した。

既に家族は会社なり、学校なりに出払っていて、台所で聡子が洗い物をしていた。綾はパジャマのまま台所のテーブルの椅子に腰を下ろした。

「お母さん、ご飯ってある？」

「……」

綾は母に尋ねた。しかし聡子は明らかに聞こえているのに綾を無視した。

毎度のことながら、今日も傷ついた。

「ねえ、お母さん。ご飯ってまだ残っている？」

先ほどよりも大きな声で、もう一度綾は母に尋ねた。

「はいはい、そんなに言わなくても聞こえているわよ。ご飯だったらそこに置いてあるパンでも食べなさい」

テーブルに目を落とすと、アンパンが置かれていた。

ふと、聡子が洗っている洗い物を見る。既に洗われた茶碗や食器。たった今洗われている茶碗と食器。

綾はアンパンを引っ掴むと、冷蔵庫から500mlのりんごジュースを取り出し、踵を翻した。

その背中に、聡子の言葉が掛けられる。

「ほんと、何であんたみたいないな子供が生まれたのだろっかね？ お姉ちゃんはあるなに出来が良いのに……まったく、生まれてこなきゃよかったのに」

無視して、部屋に戻った。

今まで何度も言われた言葉であつたから。特に傷つくこともなかったが、それでも辛い気持ちはあつた。

朝食を済ませたら、次は着替えだ。

熊のデフォルトキャラクターがプリントされたお気に入りのパジャマを脱いだ後、皺にならないように畳む。

次に、当日着ていく服として指定された、学校指定の青色のジャージを手早く着る。ジャージのズボンを穿いたところで、時計を見る。

学校到着予定時間は8時50分、現在時刻は7時55分。いつもより15分早く起きたので、余裕を持って準備できた。

ふと、まだ寝癖を直していないことを思い出した。

「あ、髪型は何にしよう、あんまり目立つとまた何か言われるかな？」

まだ台所で洗い物をしている聡子を視界の端に入れながら、洗面所に急ぐ。

洗面所には誰も居なかった。棚からブラシを取り出し、髪をブラッシングする。

鏡にはちよつとたれ目気味で、愛らしい顔立ちをした少女が綾と同じ動きをしていた。

普段から日常的に虐めを受けている綾にとって、おいそれと髪型を変えるわけにはいかない。変えたら変えたで、虐める人々はそれを引き合いに出して、また綾を虐める材料にするだろうから。

それが分かっていた綾は髪型を帰ることはできなくても、せめて手入れくらいは、と髪にはことさら気をつけていた。

この日は寝癖が残っていないか確認した後、軽く頭皮マッサージをした。効果があるのかどうかは分からない。

とりあえずしておこうという程度の気休めを済ませると、ギッシリと中身の詰まったりリュックを担いで玄関に向かった。

「行つてきます」

特に誰かに聞かせたいわけでもなかった。扉を開け放ち、境界線を踏み越える。雲ひとつ無い、とはいかなくても十分快晴といえる青空。

そこから降り注ぐ太陽の光。

「ああ、いい天気……これなら明日も晴れるかな？」

己の体を照らす太陽の輝かしさに、綾は目を細めて右手で光を遮った。

都会ともいえるし、田舎ともいえる町。綾が住んでいる町だ。

きつと場所によって見える空は違うのだろうか？

ふと、そんなことを考えた……と、背後に気配を感じた。

「あー！」

声を上げる時間も無かった。今しがた出た玄関のドアが勢いよく閉められ、次いで鍵が掛けられた。

けれども、振り向くことはしなかった。

誰が閉めたのかは、考えるまでもなかったから。

綾の心に悲しいと思う気持ちと、諦めにも似た不思議な感情が胸の奥底を駆け巡った。

「あゝあ、ほんと、嫌になっちゃうな」

両手で眉間を押さえる。どこまでも暗く落ち込んでいく自分の心顔を上げて、落ち込まないよう努める。

「私がお姉ちゃんと違って、出来が悪いのは分かっているけどさ……ここまで露骨にすることないじゃない。そりゃゝさ、勉強だって出来ないし、運動オンチだし、顔だって良くないけど、お姉ちゃんよりは性格良いと思うよ、私は」

そう考えると、苦しみが薄れてくるのが不思議。でも、それは気休めにしかならないことも分かっていた。

眉間から両手を下ろし、大きくため息を吐いた。

いつまでもここにいても仕方ない。早く学校に向かわなければ遅刻してしまう。

集合時間に遅れないためにも、綾は気持ちを切り替えて一步を踏み出した。

それに気づいたのは、家を出発してから少し後のこと。

(……………あや……………)

気づいたのは偶然に近かった。

「……………え？」

一瞬、誰かに呼ばれたような気がした。

右に、左に首を振る。通行人どころか、人の気配すらなかった。空耳かしら？ 綾は首を傾げる。けれども、空耳ではなかった。

(……………あや……………あや……………あや……………あや……………)

学校へ向かおうとした綾の動きは止まった。一度ではなく何度も、何度も、

自分の名が呼ばれたからだ。

振り返っても誰も居ない。

強く、心臓の鼓動が耳に届いた。

「え……え……ちよつと、誰？ 誰なのよ!？」

背筋にゾクゾクと悪寒が走る。何度も何度も辺りを見渡すが、誰一人いない。近所で見かける野良猫すらもない。

それでも聞こえた。まるですぐ近くから話しかけられているみたいに。

「準備は出来た……後は……受け入れるだけ……あや……もうすぐ

……もうすぐ……もうすぐ……」

「い……や、嫌……嫌……嫌……なに、何なのよ!？ 誰よ、誰!」

綾は恐怖を感じた。

拡声器を使っているとは到底思えなかった。それほど自然な声だったのだ。その声は自分を知っているらしいことも綾の恐怖心を駆り立てた。

いても立つてもいられず、綾は走った。どこに向かおうとか考えなかったし、考える余裕もなかった。ただ、この声から逃げなければ! 綾の心はただそれだけだった。

対して運動が得意でもないのに、すぐに息が切れる。それでも走ることを止めようとは思わない。

（あや……可愛い……あや……もうすぐ……絶対……）

声はどんどん大きくなっていく。まるで綾の横にぴったりと張り付き、耳元で叫んでいるくらいにうるさく感じる程に。

車を通ったら助けを呼ぼう。そんな考えが浮かんだが、すぐに却下した。車を呼び止めている間に、声に追いつかれそうな気がしたからだ。

「はあ、はあはあはあはあつ、……っ! はあはあはあ はあはあ
あ」

綾は走った。自分がどこを走っているのかも分からない。闇雲に足を動かし、少しでも声から遠ざかろうとした。しかし、声はどこまでも付いてきた。

歩いている通行人に助けを呼ぼうかとも考えたが、すぐに却下した。立ち止まってしまえば、あの声に捕まってしまうと思ったからだ。

すれ違う人は誰も綾に気を払うことはなかった。誰もその声に疑問を持っていないかのうちに……。

視界が涙で滲む。体中から汗が噴出す。心臓が破けそうなくらいに鼓動を打つ。どれだけの酸素を取り込んでもそれ以上に体が酸素を求める。

（もうすぐ貴女は自由になる……何者にも縛られない…世界でただ一人）

「はあはあ、くつ、はあはあはあ……何なのよ　っあ！」

手で庇うことができたのは幸運だった。

疲労と酸欠で朦朧とした意識の中、足を絡ませてしまい、派手に前のめりに転倒してしまった。

綾は息つく暇もなく立ち上がるうとした。けれども、立ち上がれなかった。

両足に力が入らない。擦り剥いた腕と足から、鈍い痛みが伝わってきた。

砂の付いてない手の甲で目を擦り、周りを見回す。

いつのまにか住宅街から遠ざかり、綾は小さな公園に辿り着いていた。周りを遮る物もなく、ある程度遠くまで見渡せることが出来た。

「はあはあはあはあ……た、助かったの……私？」

アスファルトに舗装されていない公園の砂の感触が不思議と安心感を覚えた。

あれほどうるさかった声も、気づいたら聞こえなくなっていた。呼吸も落ち着いてくると、色々な疑問が浮かび上がってきた。

「何だったの、あれ？ 幻聴？ 空耳？ 幽霊？ なんなのよ、もう！」

震える足腰に気合を入れて立ち上がって、改めて綾は自分の体を見下ろした。

転んだせいで体中に砂が付いていた。体中についた砂を払うと、近くのベンチで少し休憩しようと顔を上げた。

「あ、れ」

ふらつと綾の足から力が抜ける。崩れ落ちるように静かに倒れた。一瞬にして綾の意識は暗闇に包まれ、意識を失った。

（貴女は私を恨むかもしれない……でも私は貴女を失いたくない……
……忘れないで……忘れないで……）

意識を失い、倒れた綾に声は語り続けた。

（幸せになれないかもしれない……ずっと孤独を味わうかもしれない……でも忘れないで……私は貴女の味方……忘れないで……）

声はその言葉を最後に、綾に語りかけることはなかった。

「あれ？ ……え、え？」

意識を取り戻したとき、綾は夢だと思った。

自分は確かに公園にいたはずなのに、目を覚ましたら学校のグラウンドに立っていたからだ。

最初に聞こえたのは大勢の声、女の声、男の声。

グラウンドには、綾と同じく風蘭中学校のジャージを着た生徒達でいっぱいだった。

試しに頬を抓ってみた。ぎゅう、痛い、地味に痛い、夢じゃない。もしかしたら、自分は白昼夢を見ていたのではないだろうか？

そう思い込もうとした綾は、すぐさまそれを諦めた。ジャージの下に来ていた下着が汗で湿っていただけでなく、ジャージ自体、砂で汚れた後があったからだ。

ゾクリと、言葉にできない戦慄が全身を覆う。

「はあ……………もう、本当に何なのよ」

綾は深くため息を吐くと、晴れ渡った空を見上げた。家を出るときに見上げた空と何も変わらなかった。

この時、綾は気づかなかった。擦り剥いた腕と膝の傷が治っていて、痛みが消えていることに

学校のチャイムが鳴った。先生がメガホンを使って生徒達に指示を始めた。

綾もそれに従った。生徒達も雑談を続けながらも先生の指示に従い始めた。

人数の点呼のため、綾達はグラウンドに立たされた。まだ10月とはいえ、後数日で11月になる。早朝はすこし肌寒いだけでなく、生徒達の服装はジャージの上下だけで何も羽織っていないかった。

口々に早くして、寒いと生徒達の口から苦情が出たが、予想以上に点呼に時間が掛かってしまい、先生達も少し辛そうに手を擦り合わせた。

結局、グラウンドを移動し、バスに乗り込んだのは予定時間を20分過ぎた頃だった。

ドアに「風蘭中学校貸し切り」と書かれた張り紙が貼られた大型バスが正門前に並んでいた。朝の登校途中に横を通り過ぎたが、いざ改めて近くで見ると以外に大きい。綾達の学校はークラス30人前後になるように編成されているが、それでも十分余裕をもって座ることができた。

綾の所属する1組が全員乗り込むと、ゆっくりとバスが動き出し、二泊三日の修学旅行の旅が始まった。

先生は予定しているスケジュールを生徒に伝え、先生はさつさと寝入ってしまった。クラスメートの男子や女子達は、お目付け役が寝たのをいいことに、気兼ねなく菓子の受け渡しや、席の移動を行っていた。

車内はたちまちお菓子の袋を開ける音、慌しく席を移動する音、大きな声で叫ぶ人など、喧騒に溢れた。

綾はドアからもっとも近い椅子に座り、体を縮み込ませて目立たないように息を潜めた。

……が、その努力の甲斐もなく、平穩の一時は壊れてしまった。
「ねえ、高田。ちょっと、お菓子持っていない？ 持っていたら譲ってほしいんだけど」

突如呼ばれた綾の苗字に、というより、その声に通路側に目を向けた。

そこには、綾よりも一回りも体の大きい女子……宮北が立っていた。髪を左右のリボンで縛っているが、ツインテールと呼ぶには長さが足りなかった。縛ってあるリボンから飛び出した髪の束がアンバランスな印象を与えた。

「ほら、いいでしょ、早く渡しなさいったら！」

宮北は了承を得る前に、綾の隣に置いてあったリュックを奪い取り、勝手にチャックを開けると遠慮なく手をつ突っ込んでお菓子を探り出した。

「あ……やめ……だめ……」

綾はそれを止めようと思ったが、自分でも分かるくらい頼りない声しか出なかった。

そうこうしている内に、お菓子の袋を取り出した宮北は、またにやにやと笑うと、綾にリュックを突き帰した。そのまま礼も言わずに宮北はバスの後部座席に戻っていった。

綾は喉元まで上がってくる泣き声をリュックに顔を埋めてごまかし、漏れ出てくる涙を必死に隠し、ただ耐えた。もし涙を見せてしまえば、彼女達を喜ばしてしまうことになり、さらに酷い事をする
と知っているから。

「ぎゃはは、マジ？ あいつ本当に根暗だよな」

「そうそう、さっさと菓子渡せばいいのに、ぐずぐずと渡さないからさ」

後部座席から、宮北の話し声が聞こえた。口ぶりからしても罪の意識は感じられない。

「それで無理やり取ってきたわけ？ うわ、酷！」

「いいじゃん、あんな根暗なやつ。誰も相手しないんだし」

「だよね。むしろボランテシアだよ、私達つてさ。感謝してくれなきゃ」

綾の心を無視した言葉…あまりにも身勝手な意見が、ヤスリのように綾の心をすり減らしていく。それも一人二人ではない。

いつの間にか、綾以外のクラスメート全員が口々に彼女の悪口で盛り上がっていたのだった。

悔しかった……どうして自分は人前で話すこともできないのか。悲しかった……嫌と思っても怖くて逆らうことができないのが。

恥ずかしかった……いつまでもただ耐えることしかできない自分を。

零れだした涙を隠すように、綾は強くリュックを抱きしめた。

リュックが綾の腕に閉められて潰れた。綾自身は軽く抱きしめたつもりだった。

だから、リュックに入っていた水筒が、あまりの締め付けの強さに変形してしまったことに、綾は気づくことが出来なかった。

バスに揺られること数十分。辿り着いた場所は綾の住んでいた町から遠く離れた山林、キャンプ施設脇の駐車場であった。

「はい、みんな！ 先生の話聞いて、ちゃんと行動してね！」

綾の担任でもあり体育教師を勤めている、遠藤先生の声が辺りに響いた。

生徒達の青色のジャージと違い、灰色のジャージを着て立っている姿は中々に似合っていて好青年という言葉がピッタリな人だった。先生は、バスから降りて思い思いにお喋りしているクラスメート

達の騒音をかき消すように、大声を張り上げた。

「これから各班に分かれて飯盒炊爨に必要な薪や食材を配ります。
1組から順々に配るから、各班は受け取ったらキャンプ場に向かえよ！」

朝の点呼で多少、予定の時間に遅れてしまったため、教師達は慌しく準備を進めていた。

生徒達も始めは静かにしていたが、一人、また一人とお喋りを始め、遂には先ほどと変わらず喧騒が戻ってきた。

その喧騒の中、綾は一人で薪を持たされていた。

「私達は食材を持っていくから、高田は薪を持って行ってね」
嫌らしい笑みを浮かべた宮北がそう言った。

「そうそう、私達は先に行つて、かまどを組み立てるから」
その横に、同じく嫌らしい笑みを見せている女子、桜井が宮北に続いた。

宮北と身長は同じくらいであったが、宮北よりも横に二周りも彼女は大きかった。髪を後ろ一本にまとめてゴム紐で留め、頬にそばかすがあつたその姿は、さらに彼女を大きく見せた。

桜井は綾に一言だけ伝えたと、宮北と一緒に他の女子のグループと先に向かつてしまった。

飯盒炊爨は、元々ークラスの人数を半分に分けて行つ手筈になっている。

男子と女子に別れて行うだけだが、今回の修学旅行の宿泊先であるホテルが用意したかまどは一番大きいやつでも8人分しかなかったため、さらに半分に分けられたのだ。

綾は不運にも、宮北と桜井と同じグループになってしまったのだ。
「どうしよう、こんなに持てないよ。私、非力なのに」

薪自体は既に燃えやすいように何本かに折られていて、一本はそれほど重くない。しかし、それがグループ全員分となると、その重量はかなりのものになる。

それだけでなく、綾の身長は同年代から見ても低い。綾が持つて

いく薪の量は人数に比例して量が増えるので、横に並べて束ねてある薪でも、綾の太ももの辺りまでであった。

幸い鉄線で束ねられていたおかげで、途中で切れてしまう心配はなかったが、4〜5m進んでは休み、進んでは休みを繰り返すことになった。

横を同じクラスの男子が笑いながら走っていったが、誰一人綾に手を貸すものはいなかった。

何とか遅れることなくキャンプ場に到着したときには、先に到着していた生徒達が思い思いに準備に取り掛かっていた。

綾は自分の班を探した。ほどなくして見つかり、半ば引きずるようにして薪を持っていった。

宮北や桜井達は、綾のことを無視して楽しそうにはしゃぎながら共同テーブルで食材を切っていた。とりあえず綾は既に用意されていた綾の班のかまどの近くに薪を置いた。

ようやく薪を運び終えた綾の手は、痺れて感覚がなくなっていた。喉に痛みを感じるくらい、身体は酸素を要求していた。体中から汗が噴出し、汗に濡れたシャツが不快な感覚をもたらしていた。

少し休憩しようとリュックを下ろそうとした途端、背中に強い衝撃が走り、綾は前のめりに転んだ。

背中に担いだリュックには、水筒やらが色々と押し込まれていたおかげで、背中の部分はクッションになった。

けれども、手をひどく擦り剥いてしまった。

鈍い痺れと痛みが広がり、思わず涙が目尻に滲んだ。振り返って、状況を確認する。

「痛えな、気をつける！ チビ！」

そこには同じクラスの男子達が立っていた。全員、綾よりも頭一つ分背が高い。傍目から見ると小学生が中学生に恐喝されているようにも見えた。

その表情は共通して嘲笑っていた。綾を見下していた。

この時、もし彼女を助け起こしてくれる人がいたら、きっとその

人は男子達に怒鳴り散らしていただろう。言葉には出していなくても、一様に故意にやりました、と男子達の顔に書かれてあつたのだから。

「おいおい！ 謝れよ、お前からぶつかってきたんだろ！」

「そうだそうだ。土下座しろ、土下座」

口々に吐かれる卑劣な言葉。自分は悪くないと思っけていても、綾には謝る以外の選択肢を選ぶ勇氣はなかった。

恐怖で足が竦み、目を見ることができずに俯いたまま謝った。

「ご、ごめんなさい」

声も震え、体中が燃え上がるほど熱い。視界が真っ赤に染まつてしまつくらい悔しいと感じながらも、謝った。

男子達はそれで満足したのか、それ以上追求はしてこなかった。

「しょうがない、俺達も準備しなきゃいけないし、これで許すか」

「そうだな、腹も減つてきたし、早く作ろうぜ」

そう言い残し、男子達は自分達の班の所に戻つていった。

この時も、誰一人彼女に手を差し伸べる人はいなかった。

そして、今しがたできた傷の痛みが消えていることに、彼女は気づかなかった。

飯盒炊爨も終わり、その後も、後片付けやレクリエーション等のイベントも順当に消化されていった。

けれども、綾達が宿泊するホテル『希望』に着いた時には17時を回っていた。

そこから慌しく先生達からの諸注意、泊まる部屋の確認が始まる。各班に部屋に分かれた後、私服に着替える。その後すぐさま先生達が一部屋ずつ見て周り、人数の確認をとつた後、ホテルが用意してくれた夕食を食べる。

食事が終わり、15分の休憩時間が当てられたが、入浴の用意や各自就寝の準備をしていたために休むことはできず、やっと一息つ

いた時には21時を回っていた。

綾達が泊まることになった部屋は3階の和室だった。男子達は2階で、少数の女子達の間で、下まで降りるのが面倒だと不満が出たが、何事もなく時間が過ぎた。

綾の班は8人だったが、全員分の布団を並べても十分に余裕があった。

綾を除いた女子は入り口から一番見えにくい場所に固まって布団を敷き、綾は入り口近くに布団を敷いた。

女子達は綾を存在しないものとして扱い、綾も声をかけようとしなかった。

綾にとっても、いまさら彼女達と仲良くなろうとは思わなかった。それからしばらくの間、女子達は楽しげな雑談を広げ、時にははしゃいで暴れたりもしていた。

一人寝床に入った綾は、早く明日にならないかと、目を瞑ってじっとしていた。

綾が何度目かの寝返りをうった時、雑談をしていた女子の誰かがポツリと言った。

「あれ？ あいつ寝ているんじゃない？」

その言葉にお菓子を食べていた女子の一人が綾の方を見た。布団に包まっている綾を見て、些かバカにしたように笑った。

「あははは、なーにあいつ、もう寝ているの？」

その隣にいた女子も綾の方を振り返ったが、すぐに興味をなくし、お菓子を食べ始めた。綾を見ていた他の女子達も一人、また一人雑談を再開していき、再び綾はいないものとして扱われた。

綾は悲しかった。

どうして自分がこんなに惨めな思いをしなければいけないのか。

どうして自分はこんなに嫌われるのか。

総じて自分は言い返せないのか。

この世界すべてから逃げ出したかった。

でも、死ぬ勇気も持てず、両親に当たろうとも思わない自分がと

ても情けない存在に思えて仕方が無かった。

（やっと静かになったわ……どうして私はこんなに虐められるの？

私が悪いかしたことなの？ 私の何が気に入らないの！）

けっして声に出すことはなかったが、今すぐ飛び上がって叫びたかった。

綾の心に熱くドロドロとしたものがうねり、それが自らの体を突き動かして、すべてを無茶苦茶にしてほしい。

そんな欲求まで生まれてきた……綾はまた自分を情けなく思った。

時計の短針が夜中の10時を過ぎた頃、先生が見回りに来た。

「それじゃあ10時になったので消灯。おまえら、騒ぐのはある程度許すけど、他にも来ている一般の人がいるのだから騒がしくするな！」

見回りにきた遠藤先生が入ってくるなり、女子達に注意をした。

綾は内心、自分は静かにしていたのに！と、憤りを感じていた。

それを声に出したら起きているのがばれてしまうだけでなく、また虐められるので黙っていた。

綾を覗いた女子達は急いで寢床についた。遠藤先生は全員が布団に入るのを見届けると次の部屋に向かって行った。

室内の照明は消され、静寂に包まれた。綾は室内のほうを振り向こうとは思わなかった。

彼女達が息を押し殺して掛け布団を頭から被っているのが想像できたし、迂闊に目が合えばまたとやかく言われるのも想像できたからだ。

「ねえ喉渴いたよね？」

廊下の照明と窓から射し込む僅かな月明かりだけしか光源はなかったが、大体の輪郭くらいは見通すことはできる。

部屋の中にいた綾を除いた女子達は、全員布団に入り、誰一人寝ていない。押し殺したような雑談と笑い声の中、宮北がぼつりとこ

ぼした。

「うん、喉からから。皆は？」

その言葉に桜井も同意した。

「あたしも」

「あ、私も」

「皆も？ そっついわれると喉渴いてきたな」

「喉渴いた」

部屋は真っ暗になっっているけど、声は素通りだ。女性特有の高い声は小さくとも端まで届いた。同室の女子達も口々に同意した。

その中で、先生に見回りに来られた時、真っ先に見られる入り口脇に押しやられた綾は、一人寝入ろうとしていた。

入り口脇という場所なら何かされようとしても、先生に見られやすいので、おいそれと虐めをしようとしないうという考えからだ。内心、この位置に満足していた。

「おい、高田！ お前ちよっとジュース買いにいつてよ」

「……………」

「高田、寝ているの？ 高田」

綾は無視をすることにした。喉は乾いていないし、かなり前から床についたから彼女達も諦めるだろう。そう考え、狸寝入りすることにした。

「高田、起きろ」

起き上がってきた女子の一人、桜井が手探りに綾の方に近づいてきた。

顔は女子達の方を向けているけれども、綾は両目を固く瞑って見ないようにした。

「……………」

綾はそれでも無視した。朝から疲れるようなことが何度も起こり本当に疲れている。ジュースを買いに行くのは面倒だった。

「……………」高田、起きろ！」

けれども、業を煮やした桜井は掛け布団の上から綾を力いっぱい

蹴りつけた。

「……！！ はぐう！ ……痛……」

不運にも鳩尾の辺りを蹴られてしまった。掛け布団の上とはいえ、綾にとつて、それでも十分な威力だった。

痛みに、思わず声を上げてしまった。綾は身を縮ませた。

「起きろー高田ー起きろー」

既に綾が起きているのは分かっているはずだが、桜井はさらに執拗に綾を蹴り続けた。掛け布団に桜井の足跡が付き、更にその上から新しく足跡が付く。

綾は黙ってそれに耐えた。布団の中で体を丸めて、蹴られた鳩尾を擦った。何度も蹴られる体に衝撃が走る。

そして、ふと、綾の脳裏に疑問が浮かんた。

痛くなかつたのだ。鳩尾を強く蹴られたのに、痛くも苦しくも何ともなかつた。

始めは痛いと思った。痛いと感じて体を丸めた。しかし、思い返してみる。

鳩尾を蹴られた時、自分は痛みに目を見開いた……はず、けれども痛みはない。そして、蹴られ続けている今も……。

ここにきて、綾はあることに気づき、固く瞑つた両目を見開いた。「あら、起きたの？ だったらジュース買いに行つてね、お金はあんた持ちで。私はオレンジジュースだから」

目を開けたのを見た桜井は綾が起きたと思いジュースの注文をした。

「あ、私もオレンジお願い。無かつたら適当なの」

「私はファンタなら何でもいいから」

「私は緑茶買つてきて。緑茶が無かつたら私もファンタ」

それに続いて綾に次々とオーダーを続ける。誰一人リユックから財布を出そうとする素振りすら見せなかつた。

そのことに對して特に何も言わなかつた。綾にとってはいつものことだから。

それ以上に、綾の頭は気づいてしまった出来事で埋め尽くされていた。

部屋を出て、一人明かりの付いた廊下を歩いた。途中、何人かの先生に見つかったが、ジュースを買いに行くだけと伝え、先生達も黙認した。

綾はジャージの上から鳩尾を擦った。蹴られた鳩尾も、蹴られ続けた手足や胴体も、まったく痛みを訴えなかった。

そしてそれ以上に、怪我をした腕や手のひら、膝の擦り傷が無くなっていることに、例えようも無い不気味さを覚えた。

「ジュースを7人分買っても重くない……………なんで？」

ホテルのロビーの売店で、リクエスト通りジュースなどを買うことができた。店員がビニールの袋にまとめてジュースを入れてくれたので、持ち運びに不便することもなかった。

右手に持ったジュースの入った袋を眼前まで持ち上げる。

「とっても軽い、まるで羽みたいだね。私ってこんなに力持ちだった？」

綾は女子達の中でも非力な方だった。綾自身、それを自覚していた。

「ははは……………本当、夢じゃないよね、これって……………」

試しにまた頬を抓ってみる。ぎゅう、痛い。いや、これはとっても現実味のある夢に違いない。きっと痛みが足りないのだ。そうに違いない。

さらに抓ってみた。ぎゅぎゅぎゅう、痛い、痛すぎる。まだ覚めないのだろうか？

さらにさらに力を込めて抓った。ぎゅぎゅぎゅぎゅう……………

！痛い、洒落にならないくらい痛い。そして夢から覚めない。

そうか、これは現実なんだ！

「あほらし……………何やっているんだろ……………私……………」

なんだか自分が馬鹿に思えてきた。

思わずため息をこぼした。抓った頬がジンジンと痛む。

「ただいま……………ジューズ買ってきたよ」

部屋に戻った綾は、真つ暗な中、隅の方で固まっている女子達にジューズの入った袋を掲げた。

部屋の中央まで来たとき、綾は不審な点を覚えた。女子達の顔に一樣にいやらしい笑みを浮かべていたのが見えたからだった。

「ねえ……………何でそんな所に集まっているの？」

綾は嫌な胸騒ぎを感じた。

何をしているのか尋ねようと足を踏み出そうとした瞬間、ありえないことに気づいた。

どうして照明の付いてない中、女子達の表情を読み取ることが出来たのだろうか？

しかも、照明の付いている廊下から今しがた戻ったばかりなのに。つまり、まだ暗闇にも目が慣れていないはずなのに…………。それ以上足元も見えないのにどうして分かったのか。

その疑問に思い至った瞬間、暗闇から伸びた腕が綾の体を拘束した。

「き……………んん！ん……………！！」

悲鳴を上げようと口を開けた瞬間、それより早く口の中にタオルを押し込まれてしまった。

「ん……………ん……………！！」

抵抗する間もなく、綾は布団の上に押し倒されてしまった。背中から倒れこんだ勢いで頭を強かに打ちつけ、光と暗闇が交互に視界を埋め尽くした。

突然襲った事態に、綾は体をがむしゃらに動かした。何が起きたのか分からなかったが、自分が何者かに襲われていることだけは理解できた。

しかし、あつという間に四肢を押さえつけられた。そして、この時になって初めて自分を襲っている人物が誰なのか分かった。

当然、綾は精一杯体を揺すって抵抗した。自分よりも体格も大きく体重も重い男子達に拘束されていると分かっていても抵抗した。なんで、なんで！？　どうして自分がこんな目に遭わなければならないの！？

悲しかった、悔しかった。そして、それ以上に恨んだ。

今まで感じたことがないくらい強い怒り。怒りは恨みに変わり、恨みはどんどん殺意に変わっていく。

気づいたとき、既にジャージの上は捲り上げられた。下に来ていたシャツも無理やり捲り上げられ、綾の小ぶりながら女性といえる部分が観衆にさらされた。

その瞬間、誰ともいわず男子達の動きが止まった、が、すぐに行動を再開し、ジャージのズボンに手を掛け始めた。

「ああ！　もう動くなよ！」

それだけは、と綾が力を振り絞って暴れる。焦れてきた男子の一人が、所持していたカッターを綾の頬に突き付けた。

勢い余って綾の頬に一筋の傷を付けた。血が滲み、ゆっくりと痛みが広がっていく。

「あ！　おい危ないだろ、刺さったらどうするんだよ」

綾の右手を押さえている男子が、カッターを持った男子に鼻息荒く怒鳴った。

「すまん、こいつが暴れるからおとなしくしてもらおうかと思って

……」

「おい早くしろよ、もう我慢できねえ！」

左足を押さえている男子が急かす。

「そつだ、写真撮つところよ、写真」

じつと成り行きを見ていた桜井が突然提案をした。

「写真撮っておけば後でお金請求できるし、あんた達だって、そいつで遊べるでしょ」

「頭いいな、桜井。そつだよ、おい、カメラ持っているやついるか？」

一人見張りをしていた男子が、女子にカメラを持っているか聞いた。

「あ、あたしインスタントカメラ持っているよ」

女子の一人がリュックからカメラを取り出す。見張りをしている男子にカメラを渡した。

「やべ、俺もう我慢できねえ」

男子の一人が切羽詰った声を出した。

「落ち着けて、これからいくらでも出来るようになるんだから」

右手を押さえている男子がそういつて窘めた。

綾はもう抵抗しなかった。綾を覗いた全員がカメラの方に意識が向き、綾から注意が逸れていた。

綾は憎んだ。自分が辱めを受けるのをせせら笑って見ている女子達を。

綾は憎んだ。畜生よりも劣る行為を平然と行おうとした男子達を。

綾は憎んだ。誰も助けてくれない周りの人達を。

綾は感じた。疲れ果てて腕すら上げるのも億劫に感じた自分の肉体から溢れてくる力に。それに比例するように膨れ上がる殺意に。

この時、誰か一人でも罪悪感を覚えて行為を中止していたら、未来は変わっていたかもしれない。

この時、誰か一人でも彼女の目を見ることが出来たら、未来は変わっていたかもしれない。

誰も気づかなかった。綾が抵抗を止めていたことに。

誰も気づかなかった。綾の瞳の色が、黒から血のような赤い色に変わっていたことに。

誰も気づけなかった。この出来事で綾の心に重大な変化を与えたことに。

誰も気づけなかった。異変はすぐ側まで迫っていたことに。

気づいた時はあまりにも遅く、全て手遅れだった。

「あれ、こいつおとなしくなっ」

始めに気づくことができたのは、皮肉にもカッターを突き付けた

男子だった。

「……ふう……ふう……ふう……ふう……」

綾は立ち上がっていた。

四肢を押さえていた男子達は、一瞬で全員跳ね飛ばされた。

一人は蛙のような呻き声を上げて壁にぶつかり、一人は布団の上に頭から転がって動かなくなった。

一人は見張りをしていた男子の方に跳ね飛ばされ、二人一緒に倒れこんだ。

「……ふう……ふう……ふう……ふう……」

目にも止まらない速さだった。瞬きすれば見逃してしまうくらい。

一瞬でカッターを持った男子を残し、他全ての男子を綾は行動不能にした。

「……へ？」

一人取り残された男子は、目の前に広がった事態に何が起きたのかわからなかった。部屋の隅で見学していた女子達も、目をまんまると見開き、立ち尽くす綾を黙って見つめた。

誰も話さず動かない静寂に包まれた中、綾だけが動き出した。

一歩、また一歩と一人立っている男子の目の前まで歩み寄る。

「……」

男子は目の前の少女を見下ろした。

跳ね飛ばされたクラスメート、呻き声すら上げない友達、跳ね飛ばされたクラスメート、その友達を跳ね飛ばした、自分よりも頭一つ分以上に小さい少女。

幾つかの事柄が、何度も男子の頭の中をグルグル回る。

綾の腕がゆっくりと上がる。男子はその腕が上がるにつれ、顔を上げる。

「……へ？」

一瞬、綾の腕がぶれた。ぱしん、乾いた音が室内に響いた。

次の瞬間、綾の左手に今しがた男子の持っていたカッターが納ま

つていた。

「……え、え……えええ？」

男子は、ぼかんと 指が一つ残らずぐしゃぐしゃに折れ曲がった自分の手と、間接が一つ増えた腕と、カッターを持った綾を交互に視線を向けた。

それと同時に女子の一人が失神して布団に崩れ落ちた。誰一人手を貸すことはなく、室内にいる全員が綾と男子の行動を見続けた。

綾はカッターを持っていない右腕を掲げ、ゆっくりと振りかぶった。髪が捲れて綾の爛々と輝く血のように赤い瞳が覗けた。

「……えええ……え、え、え……！」

綾の右腕がぶれる。そして、この時、綾の変動に気づいた最初の少年は……。

「……？ た、助けぶあ」

弾丸のように突き出された綾の右腕によって、腹に響くような破裂音と共に男子の頭は吹き飛ばされた。

男子の頭だった部品は細切れに飛び散り、男子の後ろの壁に白いゲル状の物体や、血液、脳髄、眼球などが貼り付けられた。

頭を失った男子は、吹き飛ばされて剥き出しになった首の血管から規則的に血液が噴出し、男子の衣服と布団を赤く染めていった。

その体は糸の切れた人形のように音もなく倒れこんだ。痙攣すらせず、文字通りただの血を吐き出す物体に変わり果てた。

「……！……！……！……？ ……つ……！……？ ……ぐぼおっ！」

それを見ていた女子の一人がへたり込む。次いで悲鳴を上げるよりも先に吐いた。他の女子達も先ほど食べたお菓子を吐き出し、中には失禁する者もいた。

鉄臭い臭いと、胃液の嫌な臭い、失禁した尿の臭いが室内を漂った。

綾はそれらを黙って見下ろした。捲り上げられた下着を下ろすと、月明かりが射し込む窓を開け放った。

窓から入り込む夜風が室内の濁った空気を洗い流し、綾の黒い髪

をなびかせた。

後ろを振り返る。血液を吐きつくした死体、吐しゃ物に塗れた女子達、いまだ動かない男子達、グロテスクに汚れた室内。

綾にとつてすべてがどうでもよく思えた。自分は人を殺してしまつたことも、どうでもよかった。

ただ、警察に捕まれば無期懲役かな？ と面倒な事になるだろう未来を考え、煩わしく思えた。

ふと、握り締めていたカッターが目に入った。その瞬間、綾の脳裏に閃光が走つた。

窓枠に手を掛ける、身を乗り出して窓枠に立ち上がる。後ろ手に上の窓枠を掴む。綾の体を月明かりが照らした。

眼前に高くそびえ立つた山々が見えた。鬱蒼とした木々が月明かりを阻み、夜風が木々をなびかせている。

「ここでは邪魔が入りそうだけど、あそこなら邪魔は入らない」

視線を下に向けると地面まで7、8mくらいの高さ。真つ黒なアスファルトが綾を見上げていた。普通に降りればまず骨折は免れない高さだ。

しかし、不思議と綾の心に不安は無かった。この程度の高さで骨折などするわけがない、根拠のない、確信めいた思いが彼女を突き動かした。

「さよなら」

軽く中腰になる。両足に力を込めて高く飛び上がった。反動で窓枠がひしゃげ、破壊されたが、綾は気にも留めなかった。

助走なしで20m近く水平に飛ぶ。地面に両足で着地する。何事もなく立ち上がると綾は走り出した。

綾は振り返ることなく、山々を目指して暗闇の中を走つた。その肩は震えてなかった。

右手に力を込める。左手の手首に添えたカッターが音もなく引か

れた。

赤く染まったカッターの刃。あまりのあつけなさに拍子抜けしてしまった。

テレビなどで見た映像では血はじわりじわりと滲み出すようなものだったのに、実際は少量の血が勢いよく噴出した後、体中の血液がポンプで押し出されるように、一定の間隔で噴出していった。

握り締めていたカッターを放り捨てる。手首からこぼれる血液が地面に降り注ぎ、その内の何割かは腕を伝って肘から垂れて私の服を濡らしていく。

立ったまま背中の木々にゆっくり体重を預ける。時期に、出血多量で死が訪れるのは間違いない……と思いたい。

両親も、教師も、誰も助けてくれなかった結果、私が選んだ死という終焉。

冷たくなった私の亡骸を見て、父さんと母さんは涙を流してくれるだろうか？

それとも、面倒な事をしてくれたと怒鳴りつけられるだろうか？
そう思うと申し訳ない気持ちも湧かないでもない。

けれども、やはり遅かれ早かれ何時かはこうなっていたと思う。
足に力が入らなくなり、ずるずると巨木に背中を預けたまま座りこんだ。

クス、っと口から笑みが零れる。すぐにそれは笑い声に変わった。
「あは、あはは、あはははははは」

不思議と、自分がとても滑稽に思えた。

普通こういう場面なら、やっぱり死にたくないとか後悔する場面かもしれないのに。

だけど、どうしても後悔という感情は訪れなかった。

今の私にあるのは、現実から逃れられる歓喜と、手足を撫でる山風の冷たさだけしかなかった。その冷たさのおかげか、すぐに笑いは収まった。

ふと、場違いな考えが浮かんだ。これから死んでしまうけれど、

どうしても気になってしまった。

「あ、服に泥がついちやう」

自分がどこに腰を下ろしているのか思い出した私は、あわてて立ち上がると思った。けれども、よくよく考えてみたらジャージはすでに血で汚れてしまっているうえに、すでに立ち上がる力も残っていない。

大きく息を吐き出す。

ふわり、突然私の周囲が光に照らされた。顔を上げて、息を呑んだ。

それはとてもきれいな夜空だった。

後にも先にも、これほど綺麗な夜空は見たことがない。……といっても、ゆっくりと夜空を見たということはないので、過去にその時よりもはるかに美しいプラネタリウムが広がっていたこともあったかもしれない。

けど、それでも私は、自らを白銀に染め上げる月の光と、全てを優しく包み込む母なる夜の闇が、例えようもないくらい美しいと思えた。

ゆるやかに視線を落とす。暗闇の中でははっきりと分らないが、きっと私の服は元の色が分らないくらい血の色。

さっきまで文字通り、痛いほど主張していた手首のジクジクとした痛みも、はつきりと体温を奪っていく大地の冷たさも、少しずつ感じなくなっていた。

すでに自分が座っているのか寝ているのかも分らない。

ぼやけ始めた意識と視界、それと同時に訪れる眠気。自然と下がついていく瞼に逆らおうとは思わなかった。

(……いの?)

あと少しで死が訪れるというその時、誰かの声が聞こえたような気がした。

第二話：予感（後書き）

万が一見落としがないよう、毎回前書きで注意書きをします。

第三話：変異（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカニバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださるようお願いします。

ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています。

第三話：変異

目を開けたら、そこには何も無かった。

名作、『雪国』を連想させる言葉が脳裏をよぎった。いや、比喻ではない。

気づいたら綾は真つ暗な場所にいた。あまりにも暗すぎて目を開けたのかも分からない。

辺りを見渡しても真つ暗な闇、闇、闇。

驚いた綾は思わず視線を下ろす。不思議なことに、眼前に何があるのかも分からない暗闇の中、自分の体だけは白く浮き出て見えた。身に着けていたジャージすらなく、裸のまま暗闇の中をぽつんと立っていた。

しかし、足裏からは何の感触も伝わってこない。自分が立っているのか座っているか、それとも寝ているのかも分からない。お尻も、背中も、お腹も、何かに触れている感触はない。

「あれ？ …………… あれ？」

綾はわたわたと足踏みをした。それでも両足裏からは何の感触も伝わってこない。だからといって、浮遊感もなく、落下しているようにも感じなかった。

「何、ここ………… 私って手首切って自殺したわよね………… どうして生きているのかしら」

独り言をぽつりとこぼす。気味が悪くなった綾は何でもいいから声を出して薄気味悪さを消そうとした。

「もしかしくなくても…………… ここって死後の世界？ 死後の世界ってこんな所なの？」

視界が滲む…………… 涙がこぼれそうになった。

綾はあわてて涙を拭った。ふと、綾は今しがた目元を擦った両手を見た。

「あれ…………… 血が付いてない」

ぺたぺたと体を撫で回す。どこを触っても血は付いてなかった。

「不思議……それに死後の世界って何もないのね……………」

（綾はまだ死んでいないから、ここは死後の世界ではないわ）

思わずこぼれ出た言葉に突如、返事が返された。突然のことに目を見開く。

「……だ、誰ですか？ わ、私以外にも誰かいるんですか？」

どこにいるのか分からないので、綾はとりあえず声を上げた。意味はないと思っただけど辺りを見渡す。

（あああ……綾、怖がらないで。私は綾の味方だから、怖がらないで）

「どこ、どこにいるの？ お願いだから怖がらせないで」

綾は手当たり次第に手を伸ばす。その手は何も掴まなかった。

（大丈夫……もう綾を虐めたり怖がらせたりする人はいないわ。あの人達は私がやつつけたの……綾のせいじゃない。綾がやつたんじやないの）

この言葉に息を呑んだ。どうしてその事を知っている？ あの時
の事を知っているのは室内にいたクラスメートだけのはずだからだ。
どこから話してきているのか分からないけど、その声はあまりにも寂しそうで、あまりにも悲しそうな響きだったのが良かったのだろうか。

不思議と、綾の混乱は少しずつ静まっていった。

「……………あなたは誰で、あなたは何を知っているの？」

落ち着くと、今度は疑問が後から後から湧いてきた。だが心のどこかで、この質問は無意味なものではないか、綾はそう思った。
（私は貴女のことなら何でも知っているの……………初恋の人から貴女しか知らない悩み、はたまた家族との不和から、初めて初潮を迎えた時の貴女の台詞まで）

綾は言葉が出なかった。普通なら鼻で笑ってしまいそうなのに、もう綾にはそれを信じない選択を選ぶことは出来なかった。

「あなたは……………何なの？」

（私は綾、綾は私、私は私で、綾は綾……）

まるで謎々のような返答だった。

（ごめんなさい……もっとゆっくり綾と話したいけど、今は時間がないの）

声が話を仕切りなおした。

突如、綾の眼前に横並びに白い光の玉が二つ出現した。ピンポン玉くらいの大きさで、淡い光を放っていた。

「な、何これ？」

横並びの光の玉が音も無く動き出し、等間隔で円の軌道を描く。すると、玉の一つが透き通る青海のような青色に変わり、もう一つが血のような、ドロドロとした赤色に変わった。

（これから綾は生き返る）

先ほどまで話していた声ではなかった。さっきよりもずっと暗く、静かで、それなのに優しいようにも思える声。

その声に、今朝の出来事が綾の脳裏を過ぎった。

「あなた……その声、まさか、あの時の……それに生き返るって？」

生き返るという言葉に興味を感じた。しかし、それ以上に綾の胸に恐怖が湧き上がってくる。声が震えてしまうのを抑えられない。

生き返ってしまったら、大切な何かを失ってしまう。そんな気がしたからだ。

（綾は不思議に感じていないのね。どうして綾があの人達の拘束を振りほどくことができたとか、どうしてあんな高いところから降りて平気なのか、とか）

「え……っと、それは……それは……」

綾は愕然とした。

今までそれぐらい出来て当たり前前という意識が根底にあったが、落ち着いて考えると、事実気付く。

綾が行ったことはどれも不可思議な事だった事を。

どうしてあんなに簡単に振り解けた？ 男達に押さえつけられた

時、どんなに力を振り絞ってもビクともしなかったのに。

そもそも、運動オンチで、体育の成績も必ず最低点を取る綾にとって、あれらの行動はどう考えても無理なことなのだ。

この時、初めて綾は疑問に感じた。

そういえば、なぜ出来て当たり前だと思ったのだろうか。どう考えても不可能な事なのに。

（それだけじゃない、貴女は3階から飛び降りたのに怪我一つない。あまつさえ、助走なしで20m近くも飛べる異常な脚力）

「……………」

（肉眼で認識できない程のスピードでナイフを奪う異常な瞬発力、素手で人間の頭を吹き飛ばしてしまったのに、その衝撃に耐えられる常識外の頑丈さ、どれをとっても異常な話だと思わない？）

「……………」

あの時の出来事を一つ一つ思い出していく。

骨を砕く感触、クラスメートの頭を吹き飛ばした感触、体を撫でていく冷たい夜風、手首から流れていく自分の血液。

体内の胃液が込み上げてきた。抑えようと両手を口元に持つてきた瞬間、その両手が血みどろに塗れていたことを思い出し、逆効果になってしまった。

吐き気を堪えて押し黙っている綾に、声はかまわず話を続けた。

（そんな力を綾は手にする。私が綾をそう作り変える……………いえ、そうじゃない。作り変えるのではなく、抑えていたものを、元に戻す）その言葉を聞いて綾は首を振った。

「作り変えるって、どういう事よ！ それに、あなたはだれなの！ 姿を現してよ！」

綾は聞き返す。何かが、綾の頭の中で激しく何かが鼓動する。息が荒くなっていく……………上手く呼吸できない。

気づいたときには既に、倒れて横になっていた。

「お願い……………もう止めて、許して、私が何をしたのよ」

（勘違いしないで、私は綾を助けただけ……………綾を苦しめるつもり

はない。今、綾の肉体は凄まじいスピードで変化している。
その影響が出ているだけ、すぐに収まる)

「はあ、はあ、はあ、はあ……う、ううう……へん……きょう……？」

朦朧とした意識の中、遂に意識を失った。

その瞬間、綾の体から光が四散していく。小さな光の粒が綾から抜けていく度に綾の体が少しずつ薄くなっていき、消えた。

(もうすぐ……もうすぐ……大丈夫、私は綾の味方)

完全に暗闇しかなくなった場所に声は朝の時と同じく、話を続けた。

残っていた玉の一つ、透き通るような色をした青色の玉が、血のような赤色の玉に包み込むように飲み込まれていく。

(大丈夫……私はずっと側にいる。今までも、そしてこれからも)
その言葉を最後に、暗闇の中、小さな光が現れた。

光は少しずつ強くなっていき、人間くらいの大きさになった時、一瞬、形を変えた。

(ずっと……ずっと味方だよ……綾……)

ほんの一瞬、光は綾の姿をとった。

次いで、その光が強く発光した。目も開けられないくらいの強さだった。そして光は一瞬で消え、それっきり光は姿を消した。

夜空よりも黒かった森。その森が山々から姿を現した太陽に照らされ、少しずつ本来の色を取り戻し、美しい外観を見せ始めた。

太陽が高くなるにつれ緑葉の鮮やかさが増していく。森に棲む動物達も徐々に木々の隙間から降り注ぐ光が強くなるにつれ目を覚まし始める。

早朝といってもいい時間帯。肌寒い空気が山々を満たしていた。その数多く連なっている木々の中で、一際大きい木にもたれかか

って寝ている少女、綾の姿があった。

学校指定の青色のジャージ上下は、乾いて赤黒く変色した血で汚れてしまっていた。それだけでなく、綾の周りにはおびただしい血痕の後が残り、異様な雰囲気醸し出していた。

そして綾の元にも太陽の光が射し込み、綾を照らした。

「……ん……ん……眩、しい……」

その眩しさを嫌がるように綾は寝ぼけながら、腕で両目を遮った。

「ん、んん……」

しばらく、そのまま綾はじっとしていた。その間にも少しずつ虫達の囁きも増え、綾の頭上を鳥が何匹も横切っていった。

太陽の日差しが少しずつ強くなっていき、綾の身体を焼いていく。「……眩しい？ 眩しいって……ええ！？」

ぐったりと寝ていた綾は眠気を跳ね飛ばして立ち上がった。重力に負けていた瞼もやる気を出した。

「う、おお？ ひ、貧血が」

寝起きに勢いよく立ち上がったのが原因で貧血を起こし、すぐに地面に再開した。

「痛い、全部痛い」

両手を顔に当てて綾はのたうちまわった。

「痛い……もう、寝起きから悲惨だわ」

泥だらけになった綾は、そのまま大の字に仰向けになった。立ち上がったらまた貧血を起こしそうだし、どうせ泥だらけになってしまったんだからという思いもあった。

ぼんやりと木々の隙間から青空に目を向ける。

透き通るような青空に白くて小さい雲が所々浮かんでいた。太陽の光がさらに美しさを引き立たせていた。

首を横に傾けた。

雑草が繁茂し、木々が邪魔をして日の光があまり届いていない辺りは薄暗かったが、奥の方に何かの動物が動いたのが分かった。

「まるで別世界みたい。あっちが天国で、こっちが地獄。あんなに

大きいのに、あんなにも遠い」

両腕を掲げる。精一杯伸ばしても、少しも近づいた気がしない。むしろ手を伸ばした分、ここからの距離を実感させた。

「手を伸ばせば伸ばした分だけ遠くなるなんて、意地悪な青空ね」

太陽を隠すように重ねると、光で手が透けて見えた。手の中を通る青白い血管が、暖かな炎のような糸に見えた。

「とても綺麗、なんだか身体が消えていくみた……!？」

最後まで言葉が出ることはなかった。綾の表情も強張った。

最初の時と同じ、それ以上に早く起き上がった綾はたった今見つめていた両手を見つめた。袖口は血で真っ赤に染まっていた。

手のひらにうつすらと付いた血痕が痛々しく映った。

震える右手で左手の袖口を掴む。胸が苦しい、背筋に、じわつ、と汗が吹き出た。綾は意を決し、ゆっくりと袖をまくった。

「……嘘」

左手首には血痕しか残ってなかった。

「なんで？ どうして？」

傷が塞がったのかと思い、血痕の付いている手首を掴み、擦ってみた。

綾の感覚は少しのくすぐったさと抓った軽い痛みしか伝えてこなかった。

目を凝らしてみても、もともと怪我をしていないと思えてしまうくらい、何の傷跡もなかった。

「どうなっているの？ それに……」

綾は顔を上げて、自分を照らす太陽を見つめた。

「全然眩しくない……瞬きだっしてないのに」

視線を落として薄暗い木々の中を見つめた。さっきまで太陽を見つめていた両眼は、はつきりと、はるか奥の方に生えてある小さいキノコらしき物を見つけることができた。

「どうしてあんなに遠くの物が見えるの？ 私ってこんなに目が良かったっけ？」

綾の背筋に冷や汗が流れた。ふつつつと湧き上がる違和感と恐怖感を振り払って立ち上がった……ところで、あることに気づいた。

「そういえば、ここからどうやって下山すればいいのしろ」

辺りを見渡すと、似たり寄ったりの風景が広がっていた。

一度大きく深呼吸をして、ため息を吐いた。そして、綾は目に付いた場所に足を踏み出した。

ある刑事達の会話（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカニバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださるようお願いします。

ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています

ある刑事達の会話

「これはまた随分と派手にやらかしたな、おい……」

勤続25年、少年課のベテラン刑事、大原はあまりの部屋の惨状にため息をこぼした。

亜麻色のくたびれたコートが、刑事という仕事の激務さを伝えていた。

「前田、お前はよく平気だな」

大原は黙って壁を見つめている相方に眉をひそめた。

「そうはいつでも大原さん。今更血が飛び散っているくらいで気にしていたら、この仕事はやっていけないでしょう」

壁一面から目を逸らさないまま、大原に背を向けて返事をした。

「それにも限度があるだろうが、俺だって長くこの仕事をやってきたが……はつきりいつて異常だよ」

「事件に異常も何もないでしょう」

「それは……そうだけどよ、今まで色んな事件を扱ってきたが、その中でも群を抜いて異常だと思っているんだよ」

大原も前田の横に並んで壁を眺めた。横目で相方の横顔を見つめたが、すぐに壁の方に向き直った。

「奇遇ですね、私も同意見です。それにしても、何をどうすればこうなるのでしょうかね」

その言葉を最後に互いに沈黙が訪れた。

大原と前田は、眼前の壁を静かに見つめた。

元は白色で小奇麗だったであろう、白い壁紙は血を塗したように真っ赤に染まっていた。それも壁だけでなく、並べられていた布団にも、ふすまの美しい山脈の水墨画にも、取り付けられていた時計にも血が飛び散っていた。

大原は視線を上げて、取り付けられている時計に目をやった。

まるで、飛び散った血で装飾された悪趣味な時計のように見えた。

規則正しく時を刻んでいる時計の針の長針は血で見られなくなっていたが、短針は昼の2時を指しているのが見えた。

「血で染まった寝具と壁、おまけに時計か……まるでホラーですね」「奇遇だな、前田、俺もそう感じたところだ。なあ鑑識さん、一つバカな事聞くんが、熊とか野犬とかじゃない……よな？」

大原は側で現場検証をしている鑑識の一人にぼつりと尋ねた。

振り返った鑑識の一人は、まだ年若い青年だった。彼は、一瞬考えた後、その言葉に答えた。

「僕としても、できることなら熊と断言したいところですけど、どちらに違います」

「それじゃあ、この部屋の惨状は、何が原因で起こったと思う。俺の固くなった頭では何も思い浮かんでこないんだ」

「すくなくとも、熊や猪……野生動物という線は薄いですね。どちらかと言うなら、爆発物を使用したと考えれば、まだ納得できます」「というと、頭の狂ったバカが爆弾でも投げつけたのか？」

青年は横に首を振った。

「その可能性は高いと思います、現時点では何とも言えませんが、それでも腑に落ちない点がいくつかあります」

部屋を見渡していた前田も話しに加わってきた。

「どんな些細なことでもいい、今の段階でわかっているだけでも教えてくれ」

青年は少し、考える素振りを見せた。

「わかりました……けど、まだ確信があるわけではありませんから、あくまで参考程度にしておいてください」

「わかっているよ、俺達だって今すぐ犯人特定に繋がるとは思っちゃいない」

大原はコートのポケットからメモ帳とボールペンを取り出した。

青年は大原がメモを取る用意がすむのを待って話し始めた。

「不審点は二つ、凶器に使われたと思われる爆発物と部屋の状況です」

「そのどこがおかしいと思うんです？」

「仮に、小さな爆弾が使われたとします。その爆弾の威力は人間の頭を吹き飛ばし、壁一面に血液を飛び散らす程の……それほどの威力の爆弾が使われたなら、被害者の身体に確実に残っているものが無いんです」

「それはいつたい？」

「火傷です」

「火傷？　なんで火傷がないと変なんだ？」

前田は疑問に感じて聞き返した。

「たとえ方向性をつけて爆発させたとしても、普通は身体や回りの物にも多少は爆風が届くんです。しかし、あの死体には火傷の痕がどこにもありません」

「ふむ、火傷の痕か……二つ目は？」

「何よりも疑問が残るのが、爆発物の破片が何一つ残っていないことなんです」

青年の言葉に、メモを取っていた大原が声を上げた。

「……残っていない？　それは本当のことか？」

「はい、飛び散るはずの破片が一瞬で燃え尽きるくらいの爆発なら、まちがいなく死体は火傷を負っているはずなんです。しかし、火傷は見当たらない、おまけに破片もない、お手上げですよ」

「……君の意見では、どう考える？　何でもいい、現実的にありえないことでもいい、これと同じ事を行うにはどうすればいい？」

前田が青年に尋ねた。青年は少しの間口を閉ざしたが、すぐに口を開いた。

「もし、これと同じことを行うとしたら、ハンマーですかね、と言っても、普通のやつでは駄目です。人の頭を覆い隠すくらいの大きさで、かなりのスピードで振りぬかないと、こうはならないと思います」

頭に手を当てて大原は呻いた。

「おいおい……頭よりでかいって、どんなハンマーだよ。俺の知っ

ているハンマーっていったら金槌くらいしか思い浮かばないぞ」

「安心してください大原さん、私もそれくらいしか思い浮かびませんよ。そんな物をどうやって調達したのだろうか？」

「それ以前に、どうやってたそれを使うことができたのかということころだな」

大原はメモとペンを懷に戻した。

「そんなの特注に決まっているだろ、ここであれこれ話しても仕方がない。後は本部で情報整理をした後に再調査だ」

「ところで、被害者の生徒は今どうなっている？」

大原と前田を乗せた車は、林の隙間からこぼれる夕陽を掻い潜るように走った。

林道を走る車が低い音を立てて排気ガスを吐き出した。車内のヒーターの電源を入れ、少しずつ温まっていく車内に頬を緩ませた大原が、前田に尋ねた。

「被害にあった男子生徒は一人以外、死亡しました。その一人も、頭を強く打った影響で、脳死状態。植物人間だそうです。ただ、同室の女子生徒は全員、外傷はなかったとのことですよ」

「外傷は……か、内面はかなり酷いんじゃないのか？」

じろり、前田を睨んだ。

「睨まないでくださいよ……女子生徒は全員病院に搬送されましたよ、よほどショックを受けたんでしょうね。普通に鎮静剤を使っても効果がなかったらしくて、倍の量を使ったらしいですよ」

無理もない、大原は心の中で女子生徒に同情した。

「ところで、一人行方不明になっている女子生徒の事は耳に入っていますか？」

「知っているよ、同室の高田綾の事だろ？ ホテル中を探し回っても居なかったんだ。おそらく犯人に連れ去られているか、既に殺されているか、そのどちらかだろう」

胸中に湧き上がってくる煮えたぎる何か。大原はそれが何か分かっていた。

この仕事に就いた時から幾度となく感じた感情……怒り、犯人に対する怒りだ。

「大原さん、そろそろ行きましょう。いつまでも温まっている時間もないでしょう」

その言葉に、大原はいつの間にか握り締めていた両手の力を緩めた。

「自分も、犯人には怒りを覚えています。けれども、ここで怒っても仕方ない。この怒りは犯人逮捕に注げばいいのですよ」

大原と前田の二人を乗せた車は林道を走り続ける。夕日が作り出す「そうだな、俺らしくも……ん？ あれ？」

「どうしたんです？」

「いや、な、今人影が見えたような気がしたんだ」

大原はガラスに鼻が触れるくらい顔を近づけて外を見つめた。緩やかに流れていく木々、そこに人影はなかった。

「気のせいですよ、こちら辺は熊もでるらしいですよ、看板か何かを見間違えたんでしょう」

「気のせい……だったのか」

「そうですよ」

車は林道を抜けて走り続けた。その車が向かう先、捜査本部のある警察署を目指して。

第四話：夜の街（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカニバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださるようお願いします。

ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています

第四話：夜の街

トンネルを抜けると、そこにはアスファルトがあった。

それを目にしたとき、綾の両眼は自身の意思を無視して涙を流した。

「やっと…… やっと下りることができた…… やっぱり、さっきの道を左に進んで正解だったんだわ、幽霊のそんなトンネルでも我慢して進んでよかった」

よるよるとアスファルトで舗装されている道路まで出る。途端に膝の力が抜けて座り込んでしまった。ひとつ、ふたつ、水滴が道路を濡らす。

「うっ……、猪とか野犬とかなら追い払えると思っていたのに、熊は卑怯だわ。あの爪とか牙とか、人間に無いものを持ちすぎ。生きた心地がしなかったわ」

冷たいアスファルトの感触が、不思議と心地よかった。自分は今、文明に触れている、知恵に触れている、奇妙な安心感があった。

「それにしても、自分でもよく下山できた。普通だったら3回は命を落としているわね、絶対」

綾の脳裏にここまでの苦難が蘇ってくる。

下山を始めてから数十分後、突如飛び出してきた動物、綾の腹あたりまである大きな猪だった。これは負ける、瞬時に悟った。

だが、襲われる前に逃げようという考えが思いつくよりも先に、猪が、こちらが心配になるくらいの勢いで逃げていった。

それからさらに数十分後、草むらを掻き分けた先、野犬の群れとの対面を果たした。これは負ける、考える余地はなかった。

だが、先ほどと同じようにこちらが行動を起こすよりも先に、四方八方に逃げていった。

さらに数十分後、三つに分かれた分かれ道に出た。とりあえず、左から行ってみよう、大して考えることなく選んだのが運のつきだ

った。

そこから数十分後、足を踏み外して崖下十数メートルを落下することになった。

幸いにも、かすり傷ひとつすることなく、お尻に大変なダメージを受けただけで済んだ。

そこから痛むお尻を擦りながら足を動かすことしばらく、綾の身体を覆い隠せるくらいに大きい熊に遭遇した。

これは死んだな。自然と諦めの言葉が出た。

しかし、予想外にも、熊は綾を無視して走って茂みの中に消えていった。

しばらく、その場を動くことができなかった。

ようやく動けるようになって下山を続けると、幽霊がダース単位で出そうなトンネルを見つけた。怖いけど、もしかしたら、人が住んでいる所に出られるかもしれないと思い、恐怖を押し殺して入ってみた。

中に入ってみると、不思議とトンネル内の壁の染みまで見ることができ、足元もはっきり確認できた。

まるで明かりで照らされたみたいに。

背筋に薄ら寒いのを覚えた。

やっとトンネルを抜けた時、人の手の入った道路、アスファルトを見つけることができて、気が抜けてしまった綾は、その場にしばらくくっつくまっていた。

「……あれ、よく考えたら、道路の真ん中で座っていたら危ない？」

太陽が山々に姿を隠し始め、緩やかに綾の影を伸ばしていた日差しが少しずつ弱まってきた。のろのろと立ち上がり、とりあえず、道路わきに寄った。

「これで家に帰れる、けど、帰っても私は……」

綾は自分の両手をじっと見下ろした。その手で道路わきの生い茂った雑草を掴み、身体を押し込む。

「私……殺人犯なんだよね、犯罪者なんだよね……」

茂みを掻き分け、草むらの間に腰を下ろし、膝を抱えた。道路側からは、覗き込まないと見えない、こちらからは見える。すわり心地は悪かったが、隠れるにはよかった。

「殺しちゃったんだよね……殺人犯なんだよね。見ている人いっぱい居たし、きつと警察がホテルに到着しているよね。それで私のこと捜しているかな、殺人犯を捕まえろ、って……」

膝に埋めた顔を上げる。その時、一台の車が綾の前の道路を走っていた。

「今……車に乗っていた人、私のこと見たかな？　もしかしたら警察の人かもしれない……逃げなきゃ」

綾は大きいため息を吐いて立ち上がり、草木を押し分けて道路に飛び出す。

「でも、どこに逃げる？　どこに逃げればいいんだろう」

特に思い浮かぶ所はない。

「さっきの車……」

気づいたら車の向かった先に足を向けていた。

日も沈み、街灯が町を照らす。ひっきりなしに側を通過していく車を、綾は横目で眺めていた。

綾の横を通り過ぎていく人たちは、コートやマフラー、手袋、暖防具を身に付けている。皆、綾の姿を見ると眉をしかめ、啞然とした表情を向けた。

綾はそれらに目を合わせずに俯いて足を進めた。

軽いため息をつく。周囲との温度差によって、まるで白い霧を吐いているように思えた。

顔を上げて側を通り過ぎていく通行人に視線を向ける。寒そうにマフラーに顔を埋める人、手袋の上から手をすり合わせる人、ポケ

ツトに手を入れる人、足早に帰路に急ぐ人、皆、寒さに耐えていた。両手を組んで、そこに息を吐いた。

しかし、吐息より暖かい両手は温かさを感じなかった。

「こんなに息が白くなるのに、どうして寒く感じないのだよ」

まったく寒さを感じない身体に、何度も感じた不自然さを思い出した。

そして、朝、森の中で目覚める前に見たあの夢の事を思い出す。

「まさか……まさかね……そんなことあるわけ……ん？」

聞こえてきたBGMに立ち止まる。綾の身体をショーウィンドウの中のテレビが照らす。テレビからはコメディ番組が軽快な音楽と共に始まっていた。

「そういえば、今日はこれがある日なのだね……すっかり忘れていたわ」

その番組では、司会者の毒のあるギャグと、始終笑いつぱなしのゲストが観客を笑わせて番組を盛り上がらせていた。

昨日までの綾なら、きっと笑っていただろう。

でも今の綾には、とてもではないけれど笑っていられる余裕はなかった。

そこから離れる。テレビに振り返ることはせず、再び歩く、歩く。幸いにも、上下のジャージは直接肌に夜風を浴びせることを防ぎ、冷たい等の感覚はなかった。といっても、身体はまったく寒さを感じていないので、たとえ手足がむき出しでも、平気だったかもしれない。いや、平気だ。

言葉に出せるような証拠はない、けれども、大丈夫だということを理解できた。

「どこに逃げようか」

特に行き先があるわけでもない綾は、気の向くままに歩いた。

頭の中を、昨日から今日までの出来事が、繰り返し、繰り返し、鮮明に再生される。

自分を犯そうとする獣のように血走った瞳、人を殴った感触、肉

を殴った感触、人を殺した感触。すべて、たった今起きたことのよ
うに思い出せる。

けれども、後悔はしていないし、罪悪感を覚えることもない。
自分が犯されそうになった。それが嫌だから、無我夢中で抵抗し
たら殺してしまった。殺されても仕方ないことを、あいつ等はした。
言い訳は、いくつでも作ることができた。

でも、すべて違うような気がする。

本当は、あんなふうに彼らに仕返しがしたかったのかもしれない。
初めて人を殺したのに、なんの感慨も無い。

感覚が麻痺してしまっているのだろうか。本当は今にも泣き出し
てしまうのを、無意識に抑えているのだろうか、それも分からない。
解けない疑問に、自然と歩調が速くなっていく。

胸中に渦巻く捕らえることのできない何かが、自分に答えをささ
やいているような気がした。

視線を通り過ぎて行く車や人通りに向ける。並木道を進んで行く
と、商店街に出た。既にいくつか照明は消え、ほとんどの店はシャ
ッターを下ろして閉店していた。

例外は喫茶店やファミレスなどの飲食店などは営業していた。窓
からのぞいた中は客で満員、それに近い人数で席は埋まっていた。
見て回ってみると、どこから肉の焼ける良い匂いがしてきた。辺
りを見回すと、牛のイラストが大きく書いてある看板が見えた。匂
いはここからきているのだろう。

ぐう。

思わず鳴ってしまったお腹を押さえる。今頃になって、自分が今
日一日何も食べていないことに気づいた。

「お腹すいた……」

ジャージのポケットから財布を取り出して中身を確認、お札と小
銭がちらほら……計2780円。

ぐう。

また鳴ってしまった。いちど意識してしまうと、どんどん空腹感

が強くなっていく。強くお腹を押さえつける、余計に大きな音を立てた。

「仕方ない、コンビニに行こう」

商店街を抜けた先に見つけたコンビニで、おにぎりを買った。出るときに時間を確認したときは、20時を少し過ぎていた。

休める所がないかと探し回り、やっと公園を見つけたることができたとき、お握りは冷え切っていた。

公園の中に建てられた時計を見て、一時間近く歩き回っていたことに気づいた。

「ずいぶんと遅い晩御飯になっちゃったな……、カップラーメンとかにしないでよかった。冷たくなったラーメンなんて食べたくないしね」

ベンチに腰を下ろす。夜風と気温によって冷やされた木板が、ジヤージ越しにお尻に触れる。

「……冷たいけれど、冷たくない……いつか、それならそれで楽し」

もう気にしていても始まらない、綾はあれこれ考えるのを止めた。ビニールの袋からおにぎりとお茶を取り出す。鮭、昆布、シーチキン、基本だ。

本当は梅にしたかったけれども、無かったので妥協した。

とりあえず、温くなったお茶を取り出す。体温よりも低いお茶の温度が、微妙に心地よい。

小さくため息をついた。いけない、何だか今日一日の間に沢山ため息をこぼしたような気がする。

綾は背筋を正して気を引き締めた。そして、お茶のキャップを開けて、一気に喉に流し込んだ。

「……んん！？ げほ！ げほ！ うええ！」

一気に吐き出した。

「げほ、げほ、な、なにこれ、味が変」

綾は飲んだお茶をすべて吐き出し、一息つくと、今さっき買ったお茶を眼前まで持ち上げた。ペットボトルの中は半透明の茶色い液体が容器を満たしていた。

蓋に鼻を近づけて臭いを嗅いでみる。

「うゝん……変な臭いはしないし、色はお茶とそんなに……まあ、おかしくても分らないけど」

恐る恐る、少しだけお茶を飲んでみた。

「……うええ、不味い、不味すぎる、飲み物じゃないわ、これ」
胃に入った分はすぐに強制的に吐き出された。

涙目になりながらも、今さっき苦しめられたお茶を見つめた。

「腐ったお茶を売るなんて、どういう店なのよ」

すっかり気分が落ち込んだ綾は、お茶をビニールの袋に戻した。
気を取り直して、鮭のおにぎりを取り出す。

「はあ……あんなに不味いお茶飲んだのは初めてよ」

おにぎりを包んだビニールを剥がす。のりを破かないようにきれいに剥がすことができた。

「あのコンビ二は、なんてものを売りつけるのよ……まったく」

三角形の黒いおにぎりを一思いにぱくり。

口中に広がる、ほんのりと香るのりの匂い、冷え切った米の味と鮭の味。

「……ぶへえ、ごほ、ごほ、うえええ！ げほ！ げほ！」

それらを堪能する前に吐き出された。

「うつつ……ま、不味い、言葉に出せないくらい不味い。おにぎりまでも腐っているとは思わなかった……コンビ二店員、無表情でなんてものを売りつけるの」

胃液の苦い味がさらに吐き気を誘う。涙目になりながら、お茶を飲もうと袋に手を伸ばそうとして、止めた。

「そつえば、お茶も駄目なんだっけ」

ビニールの袋から、残りのおにぎりを取り出し、裏返す。賞味期

限は後8時間も余裕があった。

「よく考えたら、お茶が腐るって、いったい何ヶ月置いたら……ああ、お腹減った」

残りのおにぎりを食べようとする気持ちも薄れた。しかし、お腹は激しく自己主張を繰り返し、食べ物 を 催促 してくる。

綾はお腹に手を当てて空腹を紛らわした。気休めにしかならないけれど、少しは空腹感が薄れたような気がした。

綾はベンチの上に横になって休んだ。吹き付けられる風は冷たいと感じたけれども、寒いとは感じなかった。

綾はゆっくりと目を閉じた。

夢でありますように。

心の中で、お祈りした。

ぐう。

その願いにお腹が答えた。なぜだか涙が出てくるのを感じた。

広い部屋だった。

床には素人目にもわかるくらい柔らかそうな絨毯が一面に敷かれていた。部屋には窓が一つもなく、汚れ一つない真っ白な壁が四方一面に広がっていた。

その一つの壁には、場違いな鋼鉄製のドア、横にパスワードが入力できるようになっているコンソールが取り付けられていた。

天井には大型の空調機が動いており、部屋の空気を清浄にしていた。

その中央に大きな丸い円卓が、ぽつんと鎮座していた。その円卓には十個の椅子が置かれ、そのうちの五つに、男女が座っていた。「なあ、あの話はどうなっている？」

暖房によってほどよく温まれた室内。椅子に座っていた一人の学

生服を着た男が誰ともなく訪ねた。

ぼさぼさの茶髪にきりりとした目、高い鼻、皮肉げにゆるんだ口元、どこから見ても優男に見えてしまいそうな男だったが、瞳の奥にある絶大な自信がそう見せなかった。

「あの話って何？」

その言葉に返事を返したのは対面に座っている、藍色の学制服を身に付けて、長い髪を後ろに縛った女性だった。切れ長の目と、程よく高い鼻、横一線に閉じられた唇、全体的にすらっとした顔立ち、背筋を正して座っている姿と、後ろに縛った髪が武士を連想してしまふ、文句なしの美人だった。

「明美、亮一が言っているのは麻薬を売りさばいている、あのクズのことです」

「明美、亮一が言っているのはへ口へ口になる薬を売っている、あいつです」

女性の疑問に答えたのは女性の横に座っていた少女達だった。瓜二つ、同じ顔をした、双子の少女が手をつないで座っていた。斜めに下がった眉と、眠そうに閉じられた両目、可愛らしくちょこんとある鼻と小さな口、二人が着ている白のワンピースが少女達を幼く見せた。二人の首にかけられた純銀のネックレスと、左右対称になるように互いの指にはめた指輪が、蛍光灯にきらめく。

「違えよ、いや、それもだけど、それじゃなくてさ、中学生惨殺事件の話だよ」

男、亮一は、手を振って答えた。

「今朝のニュースでやっていたやつ？ あれがどうかしたのか？」

武士のような女性、明美は、姿勢を崩すことなく、視線だけを亮一に向けた。

「あの事件、まだ犯人が見つかっていないはずだったよな？」

「見つかったというニュースは聞いていないが、何か気になることがあるのか？」

「実はさ……」

鬼気迫った表情で、亮一が円卓に身を乗り出した。明美は視線だけを向け、椅子を動かして身体を引いた。双子の少女、明日香と明日菜は眠そうな顔を、亮一に近づけた。

「俺と明日香と明日菜の三人で、ちょっと事件現場を見に行っただよ」

「見に行っただって……お前、見つかったてはいないだろうな？」

明美が驚いて亮一に問いただした。

「その辺は問題ねえ、そのための明日香と明日菜だ」

「そのための私達」

「用は身体が目当て」

明日香と明日菜は、さりげなく、凄いことを言った。

「おい！ 人聞きの悪い事を言うな！ お前ら喜んでついてきただろ！」

「ひどい人……私達があなたに逆らうと思う？」

「もうあなたの身体無しでは生きてゆけないのに？」

明日香と明日菜はお互いの手を組んで、すすり泣いた。

誤解を招くようなことは言うな、五階も六階、身体が目当てなのは確かのように、ねえ、明日菜？ 何て可哀想な私達、涙なくしては語れないですね、明日香。

静かだった部屋は騒がしくなった。主に亮一と双子が騒がしい。

「お遊びはそこまで……で、何のために見に行った？」

静かに、しかし、妙な迫力をもって明美は三人に尋ねた。

部屋に再び静寂が戻った。

三人とも、背筋をピシッと伸ばした。

「事件現場を見に行ったんだけどよ、酷いもんだぜ。部屋中に飛び散った血痕、被害にあった死体、ホラー映画の撮影かと思っただい」

「私達も、おもわずオシッコ漏らすところでした。ねえ、明日菜」

「ええ、明日香。うら若き乙女がお漏らしだなんて、そんな……」

「で、それがどうかしたのか？」

明日香と明日菜を、明美は華麗に無視した。

とりあえず亮一も、話を続けた。

「焦るなって、盗み聞きしたところによると……だ。被害者の中には、頭が完全に消失しているものや、肋骨を粉碎されているものもあつたらしいんだ」

「肋骨を……もっとオッパイ大きくしないといけないわね、明日菜」

「ええ、明日香。そうすれば、ぼよよんとガードできるかもしれない」

「もったいぶらずに、さつさと話せ、時間の無駄だ」

お互いの胸をわしづかみしている双子を明美は意識から除外した。

「ぶつちやけ、俺が言いたいことは、その事件を起こした人物は何かしら之力……俺達と同類なのかもしれないってことだ」

「ということは、オッパイだけ大きくても心許ない……と、ねえ、

明日菜」

「ええ、明日香。ボン、キュ、バン、のナイスバディでなければ駄目なのですね」

「確信をもつて言えるか？ 愉快犯の犯行かもしれないぞ」

互いのお尻を撫で回している双子の存在を、明美は存在しないことにした。

「最初は爆弾か何かを使つたんじゃないか、って話が出たらしい。

けど、状況からみて、爆弾の可能性はゼロに近いって刑事と鑑識が話していたのさ」

「そうですね、ぼよよんになれる可能性はゼロではありません。ね

え、明日菜」

「ええ、明日香。ナイスバディも夢ではないということです」

双子の少女は椅子から立ち上がり、天井を指差した。

ああ、どうしてあなたは明日香なの？ それはパパとママが名づけてくれたからよ。どうして私達は双子なの？ それはパパとママが頑張ったからよ。

寸劇が始まった。

明美の眉が引きつった。亮一の顔から血の気が引いた。

「は、話を聞いた限りじゃ、同じ事をする為には、頭よりもでかいハンマーを使って、メジャー選手並みのバッシングをしなければ不可能らしい。しかし、普通の人間にはそんなことできるわけがない」

「ふむ……話を聞くかぎりでは、能力者の可能性が高いな」

明美は椅子から立ち上がった。そして、明日香と明日菜に身体を向ける。

突然、明美の右腕が小さく光を放ち始めた。光は徐々に右手に集まりだし、集まった光が棒状に形作っていく。棒状になった光が弱まり始めると共に、鮮明になっていく。光が消えた時には、一本の抜き身の刀が右手に納まっていた。

明美は双子の少女を、ギラリと睨んだ。

「先に言っておくが、私はあまり我慢強いわけではないんだ」

殺し屋も逃げ出してしまいうくらい、怖かった。

青い顔が白くなり始めた亮一が、少しずつ明美から距離をとる。

睨まれた明日香と明日菜は、眠そうな外見とは裏腹に、素早く椅子に座った。

「どうしたの、刀なんか出して。嫌なことでもあったの？」

「明日香、聞いては駄目よ。今日はきつとあの日なのよ」

明日香と明日菜は素知らぬ顔でとぼけた。それを見て、亮一はさらに距離をとろうとして、壁にぶつかった。

明美の眼光が鋭くなった。背中に感じる堅い壁の感触に亮一は涙が出そうだった。

「そこまでじゃ」

大惨事が起きそうな剣呑とした雰囲気、少女の一声に一気に四散した。

話に参加していなかった少女は、円卓に肘を寄せ、顔の前に手を組んだまま話を続けた。

「明美、お主は少し落ち着け。明日香、明日菜、あんまり挑発する

でない。それから亮一、そんな遠くまで行かないで、こっちに戻れ」
明美は少女に反論した。

「しかし、アリス様」

「じゃから、落ち着け。今に始まったことではないじゃろう？ 笑って流せばよい」

少女、アリスは、絶世の美少女だった。夜空に輝く月のように鮮やかな銀髪。すらっと整った眉、長いまつげと金色の瞳、高すぎず低すぎない形良い鼻に、微笑んでいるように見える桃色の唇。絶妙のバランスで置かれた各部位のパーツは一つ一つが最大限の魅力を放っていた。フリルのついた黒のドレス、両手には防寒のためとは思えない、高級感溢れるシルクの手袋。首元から見える雪のような肌、耳に付けられたピアスが、さらに少女の魅力を引き出していた。

アリスは全員が落ち着くのを待つて、話を続けた。

「話はわかった。亮一の話からすると、その犯人は間違いなく能力者じゃ。よって、お主らに任務を与える、よく聞くのじゃ」

アリスは手を組んだまま、全員を見渡した。室内は重く、静かな重圧に包まれた。

「まず、明日菜、明日香」

「「はいです」」

明日香と明日菜は同時に返事を返した。

「お主らは、麻薬を売りさばいている、あのグループを殺せ。場合によっては亮一と協力してじゃ。部下も全員な。証拠は残すな、そして儲けていた金を手に入れろ」

明日香と明日菜は同時に椅子から立ち上がり、アリスに向かって一礼した。

「了解しました、アリス様。不肖、『暗殺者』の明日香、行かせてもらいます」

「了解しました、アリス様。不肖、『暗殺者』の明日菜、行かせてもらいます」

明日菜と明日香は手を繋いでドアに向かった。

「明美、亮一」

「はい」

明美はまっすぐに前を見つめたまま、亮一は片手を上げて返事をした。

「お主らは、協力して中学生惨殺事件の捜査に当たれ。能力者と衝突するかもしれん、場合によっては殺害してもかまわん。亮一はさつき言った通り、お前は平行して事にあたれ」

あれ……明日菜、ドアが開かないわ、パスワードが変更されたのかしら。そんな話は聞いていないわ、パスワードを間違えているのよ。

「アリス様、能力の有無、能力の種類等は確認しなくてよいのですか？」

チラリと、明美はアリスに顔を向けた。

「確認する余裕があれば、確認してもかまわん。じゃが、能力が分からない以上、深追いは禁物じゃ」

明日菜、ドアが開きません、どうしましょう。パスワードが使えないなら呪文を唱えればいいのです、明日香。それはナイスアイデアですね、明日菜。

「アリス様、場合によっては仲間に引き込むのは駄目か？」

椅子から立ち上がった亮一は、ドアの方に向かいながら尋ねた。

「それはお前たちの判断で決めてもかまわん」

開け、ゴマ、開け、ゴマ、アニョハセヨ、開く気配が皆無です、明日菜。あきらめてはいけません、明日香、あきらめたら、そこで試合終了ですよ。分かりました、安西先生。

「了解しました、アリス様。不肖、『斬鉄剣』の明美、任務承りました」

椅子から立ち上がった明美は、ピッタリ60度の一礼をした。

こうなったらリミットです、リミットしかありません、明日菜。

残念ですが明日香、MPが足りません。では宿屋です、宿屋で回復

しましろう。明日香、宿屋は外にでなければありません。そう……
もう、駄目なのね。

ドアまで行き、手早くパスワードを入力した亮一は、改めてアリスに向き直った。

「了解、アリス様。『幻影』の亮一、任務承りました……と」

直後、双子の少女はきゃーきゃーと、はしゃぎながら部屋を出て行った。

第四話・夜の街（後書き）

いちおう、読み忘れないように、毎回前書きに注意書きを書きます。

第五話：出会い（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカニバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださるようお願いします。

ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています

第五話：出会い

「おい、お前……そんな格好で何をしているんだ？」

その言葉と共に、綾は目覚めた。広がる夜空が、今自分が寝ている場所が、ベンチであつたことを思い出した。

「おい、おい、生きているか」。俺が見えているか」

ベンチに横になったまま、顔だけを声のする方に向けた。

そこには、自分を見下ろしている男がいた。茶色いジャンパー、ジーンズ、スニーカー、剃られた頭。怪しい男だった。

腹筋に力を込め……力を入れているのか分からないくらい、あつさりと起きることができた。そして、改めて男を見つめた。

「おおお、生きている、生きている、大丈夫か？　こんなところで寝ていたら凍死するぜ」

男は二方つと笑顔を見せた。2本抜けた前歯が少し間抜けだった。「こんな所でどうしたんだ？　もう夜中の4時だぜ。……いや、朝の4時か？　どっちでもいいか……おれ、喜一、武田喜一、喜一って呼んでくれよ」

へらへらと笑みを見せながら、喜一は自己紹介をしてきた。

ぼつと、その様子を見ていた綾も、じつと綾を見つめ続けているので、自己紹介をすることにした。

「高田……高田綾です。何か御用ですか？」

「喜一！」

喜一はずいっと顔を近づけて、綾に注意した。

「は！　そ、そうか、恥ずかしがり屋め、お兄ちゃんと呼びたいんだな、そうかそうか、よし、お兄ちゃんと呼べい！」

どういえばいいのか分からない綾は、黙っていた。しかし、喜一はにつこりと笑顔を見せたまま、綾を見つめる。

右を見る、誰もいない。左を見る、誰もいない。前を見る、喜一がじつと見ている。

「……………喜一……………さん」

「違う！ お兄ちゃんだ！」

笑顔のまま、気合の入った催促が帰ってきた。

「……………お兄ちゃん」

「ぶらぶら！ やった、やったよ俺、お兄ちゃんだぜ！」

「あの……………ところで、何か用でも……………」

小躍りしている喜一に、綾は尋ねた。

「おっと、そうだったな。お前、こんな所で何しているんだ」

当然すぎる疑問に綾は言葉に詰まった。

本当の事を言うわけにはいかなかったからだ。人を殺して、逃げているうちに疲れて、ベンチで寝ていました。なんて言えるわけがなかった。

「い……………家出です、家出」

仕方なく、誤魔化すことにした。

「……………嘘だろ」

あつという間にばれた。

「う、嘘なんかじゃありません、何を根拠にそんなことを……………」

「血で染まったジャージを着ていて、家出に見えろと思っっているのか？」

見えなかった。そういえば血が付いていたことを思い出した綾は、次の言い訳を考える。だが、思いつかなかった。

走って逃げようか？ そう思い至った綾は、チラリと公園入り口に視線をやる。

けれども次の喜一の言葉が、綾の逃避行を思いとどまらせた。

「行くところがないなら、俺の家にこないか？」

ビシッ！ つと、綾は硬直した。その様子に、喜一は今しがた自分が放った言葉の危険性に気づき、あわてて弁明した。

「あ、でも、身体が目当てとか、そんなんじゃないぜ！ そうじゃなくて、行くところがないんだろ？」

あたふたと、身振り手振りで喜一は言った。

両手を組み、喜一から距離を取る。具体的には、一步横に移動する。

「……………」

「ああ、止めて！ そんな目で見ないで！ そんなロリコンを見るような目で見ないでくれ！」

綾のあまりに冷たい視線に、喜一は戦慄した。

何を思ったのか、喜一は手で顔を隠し、必死に綾の視線から逃れようとする。

「……………ロリータコンプレックス」

「ぐはあ、ち、違う」

だが、そんなことでは逃れられるわけがない。

追い詰められた喜一は、年頃の女性には言ってはいけない、禁断の言葉を口にしてしまった。

「俺はロリコンじゃない！ 俺の好みは、もつと出るところは出て、引つ込むところは引つ込む、ボン、キュ、バン。ツルツルまな板はストライクゾーンから外れているんだ！」

瞬間、綾の視線に殺気が混じる。

自分が何を言ってしまったのか分かっていない喜一だったが、綾の視線に気づき、ようやく自分の仕出かした事の大きさに気づいた。恐る恐る、喜一は弁明を述べた。傍目から見ても、情けない姿だった。

「別に、綾はまな板じゃないと思うぞ。これからどんどん成長すると思うし、まだ成長期じゃないか」

にこやかな笑顔を浮かべ、綾の肩を叩いた。

見事なくらい、墓穴を掘っていた。

綾はこみ上げてくる怒りを必死に抑えながら、教えることにした。いくら相手がフレンドリーに接してくるからといっても、初対面なのだ。いきなり怒鳴るのは、よくない。

「それって裏を返せば、今はまな板ってことじゃないですか？」

「え……………あ……………」

綾に教えられ、ようやく喜一は自分が墓穴を掘ったことに気づいた。

喜一は内心、自分を殴りたいと思った。

けれども同時に、ここで挽回すれば、綾の怒りも治まるに違いなし。そう考えた喜一は、行動に移ることにした。

首を傾げ、片手を頭に当てて、舌を出し、ウィンクして一言。

「ごめんちゃい」

どこをとつても、ふざけているようにしか見えなかった。

綾は顔を赤らめて怒った。

「私だつてちよつとはあるもん！ 脱いだらすごいんだから！」

「だー！ その話は置いとけ！ そうじゃなくて、ここであつたのも何かの縁。嫌になつたら、いつでも出て行つていいからさ……なあ？ お前だつて、いつまでもここに居るわけにもいかないだろ？」

確かに、いつまでもここに居るわけにもいかない。かといって、家に帰るにしても、既に警察が待ち構えているかもしれない。ホテルに泊まるお金もないし、バイトをするにしても、連絡先は書けない、住所も書けない、そもそも年齢が足りない、ないないづくしだ。最終手段として、売春をするという手段もあるけれども、考えただけで嫌だつた。

「怪しくないの？」

「へ？ 何が？」

なぜ、初対面の私を泊めようするのだろうか？ 綾は胸中で呟いた。

「あんたの家に行つたら、お金を盗んでどっか行つちゃうかもしれないわよ」

「あ、それは無理。お前そんなことしないだろ」

あつさり決め付けた。そこに躊躇の二文字はなかった。

「とにかく、お前は家に泊まる！ 俺はお前を泊める！ これで全てだ」

バカだ、バカがいる。どうしようもないくらい、お人よしのバカ

だ。

喜一の言葉に、小さくため息を吐いた。

しかし、今度のため息は悪い意味ではなく、なんだかくすぐったい、暖かい何かが、胸中をよぎった。

たえ自分の身体が目当てだったとしても、初対面の喜一が、こんな自分を泊めてくれると言ってくれたのが嬉しかった。

緩む頬を必死に引き締め、一言返事を返す。

「先に言っておくけど、変な事しようとしたら、警察に電話するかね！」

その返事に、喜一は目を輝かせて喜んだ。

「おお、泊まってくいか！俺も、一人で食べる飯は寂しいと思っ
ていたんだよ……後、俺はロリコンじゃないから、警察に電話する
ことはないぞ」

綾はさらに顔を赤らめた。桃色から、熟したリンゴへと。

「そ、そんなこといって、後でお風呂とか覗かないでよ！」

「お風呂……ねえ」

喜一は、綾の身体を上から下まで、何度も視線を往復させた。

綾は見せ付けるように胸を張った。それだけでなく、とりあえず
頭の後ろに両手を組んでポーズ。

「……………」

喜一は悲しそうな目で綾を見ると、無言で綾の左手と横に置いて
あったビニールの袋を掴んで歩き出した。

「ちよ、手を繋ぐな……って！あんた！今の目は何！今私を
哀れんだわね！いいもんいいもん！今は人よりちよっと小さい
だけだもの！すぐに手で収まりきらないくらい大きくなるもん！」

「もういい……………もういいから、早く帰って暖まるう、そうしよ
う、綾」

「だ……か……、そんな目で見るな！すぐにブラジャーが必要に
なるわよ！そのときには泣いて後悔しても知らないからね！」

喜一は黙って綾の頭を優しく叩いた。その目は穏やかだった。

反比例して、綾の頬は真っ赤なトマトへと熟した。

「頭を撫でるな！ 子供じゃないんだから！ そんな目で見ないでよ！ バカ！ バカバカバカバカ！」

無言にけなされて、涙目になりながらも、腑に落ちない疑問がある。

どうして喜一は自分を泊めようとしてくれているのか。どうして自分は大して警戒心を抱くことなく、彼に付いていつているのか。それが分からなかった。

チラリと自分の手を引く喜一と名乗った男性の後姿を見つめる。

おそらく、一人でご飯を食べるのが寂しいというのは本当だと綾は思った。もし悪意があるなら、もう少しマシな言い訳を使っているだろう。

ならば、なぜ自分はトボトボと彼に大人しく従っているのだろう。そんな綾の懐疑的な視線に気づいたのか気づいていないのか、喜一は後ろに振り返り、二カつと前歯が抜けた間抜けな笑顔を見せた。瞬間、綾の疑問は氷解した。始めから答えがそこにあったかのように、自然と理解できた。

「寒かったら上着貸すから、いつでも言ってくれよ。ていうか今すぐ貸そう、すぐ貸そう」

綾はその申し出に答えた。

「いない」

「即答ですか！」

きつと、こいつの間抜けな笑顔を見たせいだ。綾はそう思った。

喜一が住んでいるアパート、初めて家に入ったときの感想は、掃除してないわね、であった。

入ってすぐ右手の方に台所があり、左手の方には洗面所とトイレがあった。真っ直ぐ奥に進むと、大きく一部屋、リビングがあった。一人で住むには十分な広さであった。

ただし、ちゃんと掃除をしていればの話。

「まあ、ちよつと散らかっているけれど、くつろいでくれ」

喜一は、にへら、と笑顔を見せてこう言った。

視線を洗面所に向ける。洗面所は飛び散った水滴で水浸しになって、悲惨な状況だった。

視線を台所に向ける。流しには大量の使った食器、ゴミ等で埋め尽くされていた。

視線をリビングに向ける。放り出された衣服、袋詰めされたゴミ袋がちらほら、埃がたまつた廊下に電化製品。ともに掃除されているようには見えなかった。

「……………掃除しないでしょ」

綾は半眼で喜一を睨んだ。

「細かいことは言いつこなし。とりあえず、今日はもう遅いから、一眠りしてからにしよう」

喜一はゴミ袋を部屋の隅にまとめて、押入れから布団を二組取り出して並べた。

片方の布団の上に座って、ビニールの袋から、おにぎりとお茶を全て取り出した。

「この食べかけのおにぎり一個もらうぜ」

「あ、ちよつと待って、それ腐って……………」

綾が止める暇もなかった。食べかけの鮭のおにぎりを取り出すと、一息に口に放り込んだ。

「……………大丈夫なの？」

「んん、なふいが？」

口いっぱいにおにぎりを頬張ったまま、お茶のキャップを開け、残っていたお茶を一気に飲み干した。

「ぷはあ、おにぎり冷えているけど美味かった……………あれ、もしかして後で食べようと鮭を残していたのか？ だったら、洗面所の方に冷蔵庫があるから、そこから適当に食べたり、飲んだりしてくれていいぞ」

「そうじゃなくて……おにぎりの味、変じゃなかった？ 後お茶も」
喜一は小首をかしげた。

「別に変じゃなかったぜ、普通に美味かったけど……お茶も、普通にお茶だったし。もしかして賞味期限が過ぎているとか？」

「過ぎていないわ。ちゃんとコンビニで買ったやつよ」

綾は残っている昆布のおにぎりを手にとって、賞味期限を確かめたが、賞味期限まで、まだ余裕があった。

おにぎりのビニールをはずす。軽く、おにぎりの先端を摘んで引きちぎって、食べた。普段からよく食べていた、のりとお米の味だった。

けれども、綾にはどうしても不味く感じた。

「……不味い」

ふと、公園で食べたとき不味いと感じたが、味自体は変わってなかったことに気づいた。ただ、とんでもなく不味く感じただけで。

「そうなのか？ じゃあ、俺がもうぜ」

またも綾が何か言う前におにぎりを奪い取ると、豪快におにぎりを頬張った。一口、二口、三口、食べ終わった。

喜一はジャンパーを脱ぎ捨て、放り出されていた衣服から、ジャージを取り出して着込んだ。

「それじゃ、お休み。トイレとかは好きに使っていいから。後、これは好きに使っていいから」

どこからか取り出した一万円札を綾に手渡した。

綾はそこまでしなくても、と喜一に返そうとしたが、喜一は照明を消して布団に入って横になってしまった。すぐに寝息が聞こえてきた。

綾は渡された一万円札を黙って見つめていた。一万円札をジャージのポケットに入れてから、立ち上がって冷蔵庫に向かう。

冷蔵庫のドアを開けてみると、500mlのペットボトルのアクエリアスがあった。

冷蔵庫からアクエリアスを取り出して、冷蔵庫を閉める。栓が閉

まっであるアクエリアスは、まだ誰も開けていない新品であることが分かった。

アクエリアスの栓を開けて、匂いを嗅ぐ。変な臭いはしなかった。少しだけ、湿らせる程度に、口に含む。

「んんん！」

急いで洗面所に向かい、口の中の液体を吐き出した。

口の中を水でゆすいで……水も不味く感じたので、吐き気が治まるのを待って、音を立てないようにリビングに戻る。喜一は顔をこちらに向けて静かに眠っていた。

綾は、喜一を起こさないように布団に入った。

「お腹減った……のど渴いた……」

お腹が食べ物を催促している。水分も求めている。身体を丸めて我慢する。

ふと、目に入った喜一の寝顔を眺める。暗闇の中でも、はっきりと目に映った。

ぐうぐう。

慌ててお腹を押さえた。ちらり、喜一に目をやると、あどけない寝顔と穏やかな寝息。安心して力を抜いた。

もう、誤魔化すのは止めよう。

自分の身体が普通じゃなくなっていることも、自分が殺人犯になっってしまったことも、全て認めよう。

喜一の寝顔を見て、綾は少しずつ、自分のことを受け入れようと思った。

手を伸ばしてほっぺをつつく。以外にすべすべ、なんとなくつつく、つつく。

ぐうぐう。

お腹が鳴った。今度は押さえようとは思わなかった……けれど、ちょっとだけ、恥ずかしかった。

第六話：兄（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカニバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださるようお願いします。

ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています

第六話：兄

綾が喜一の家に泊まって一日目。

窓から差し込む朝日を見て、ずっと喜一のほっぺをつんつんしていたことに気づいて、しばらく顔の赤みが元に戻らなかった。

綾は泊めてもらった早朝、といっても、3時間くらいしか泊まっていなかったが、喜一に一言お礼をしようと思っていた。

しかし、喜一と綾が寝たのはつい3時間前。時計を見ると朝の8時。たぶん起きるのは昼過ぎになるかもしれない。

仕方ないので、何をするにもなく布団の中でくつろぐ。時計を見る、五分経過していた。布団の中でくつろぐ、時計を見る、5分経過していた。

お腹が減って眠れないのもあったが、単純に眠気を感じないので、時間の経過が遅く思えた。

書置きを残して行こうか、とも考えたが、なんとなくそれは止めることにした。

短い時間でも、親切に泊めてくれた喜一に恩返しをしよう、そう思い至った綾は布団から飛び起きた。途端に飛び散る埃。

「すごい埃……そうだ……」

ジャージのポケットから一万円札を取り出し、綾はにっこりと笑った。

始めはすぐに終わるだろうと考えていたけれども、予想以上にはかどらないものだ。

手始めに散乱しているゴミ袋を片付けることにした。

一つ一つ中身を確認し、ゴミ捨てを完了するのに要した時間は1時間。幸いにもゴミ捨て場はすぐに見つかったが、ゴミ袋が見つからなかった。

仕方なくコンビニを探し、必要な道具を買いに行って戻ってくるのに30分。

しかも、捨てるゴミ袋の量も半端ではない。

ゴミ袋に詰め込める量には限界があり、また、それを持つ手は二つしかない。おまけに綾の手は小さいので、何度も往復することになった。

次に、流し台の食器を買ってきた洗剤とスポンジで、片っ端から洗いまくる。洗い終わった食器は全て丁寧に布巾で水気を拭き取った。汚れたフライパンも、力を込めて洗う。少しフライパンが変形してしまっただが、綾は気にしないことにした。最後に洗剤を洗い流したフライパンを火で熱して乾かす。

埃がたまった調理器具は一つ一つ洗い、電化機器は埃をぬぐっていく。全て洗い終わる頃には、スポンジはすっかり泡がたたなくなっていた。なぜかフライ返しに変形していた。

最後に油や埃などで汚れたコンロ周りとし流し台も、濡らした布巾で丁寧に拭いていく。こんどは変形することはなかった。

次に洗面所に向かった。新しくスポンジを取り出し、邪魔なものを片付けてから洗面台を洗う。おっかなびつくり、蛇口周りをスポンジでコシコシ、カビや水垢で汚れていた洗面台も綺麗になった。

トイレもしっかりと洗う。買ってきたゴム手袋を付けて、裏までゴシゴシ、洗剤も満遍なく使ってゴシゴシ。新しいスポンジを取り出して、便座もゴシゴシ。

作業を終えてリビングに戻って時間を確認すると、12時を過ぎていた。

随分と騒がしくしてしまった。もしかしたら起こしてしまったかもしれない。

不安に思った綾は、喜一の寝顔を確認。そして安心すると同時に呆れた。喜一はいまだ夢の中だった。

多分こいつは大地震に襲われても一人眠りこけているに違いない。綾は確信を持って断言できた。

ぐう、と綾のお腹が食べ物催促した。掃除に集中していたおかげで空腹感を忘れることはできたが、それが終わると途端にこれだ。何を作るのか？ 台所へ向かう。

「お腹減った……何か食べよう」

冷蔵庫を開けて中身を確認。昨日は特に中身を見てなかったせいで気づかなかったが、意外と色々あった。

「ベーコンに……卵……卵食べられるのかな？ それとワインナーが二袋か……飲み物は、昨日私が飲んだアクエリアスと、お酒と、コーラ」

よし、気合を入れて、綾は冷蔵庫から卵を取り出した。お椀に割りいれると、みごとにヘドロと化した卵らしきものが出現した。

綾は迅速に流しに捨て、大量に水を流すことでなかったことにした。

お椀も洗剤でよく洗って布巾で水気を拭き取る。リビングに戻って喜一の様子を確認してみた。

「うう……うう……あ……や……」

のそり、のそりと、喜一は自分の手を、綾の使っていた布団に潜り込ませていた。

布団の中を、喜一の手が這い回る。なんだかおかしくて可愛い、その言葉が浮かんだ綾は、慌てて首を振って忘れることにした。

「あ………や？ あや……綾！」

喜一は突如布団を跳ね飛ばして飛び起きると、綾が寝ていた布団を引っぱがした。

「綾！ 綾！ どこに行った！ もしかして透明人間になったのか、だったらお兄ちゃんに一言伝えておいてくれ！」

布団をばたばたと叩きながら、掛け布団に向かって叫んだ。

綾は落ち着いて、今しがた使っていた布巾を喜一に丸めて投げた。
「うお！ なんだ、これ……おおお、綾！ お兄ちゃん心配したじゃないか！」

「心配も何も、透明人間なんかになれるわけじゃないでしょう！ 後、

人の使っていた布団に手を突っ込ませるな！ 気色悪いでしょうが！」

ちつつち、喜一は舌を鳴らして指を振った。

「綾、俺のことはお兄ちゃんと呼びなさい。喜一と呼ばれるのも捨てがたいが、やっぱりお兄ちゃんには負ける」

「なんで私があんたのことをそう呼ばないといけないのよ」

綾は喜一を睨んだ。喜一は胸を張って自信満々に答えた。

「そんなの、お前が綾だからに決まっているじゃないか」

「理由になってないわよ」

「ええい、理由も理屈もない！ 俺のことはお兄ちゃんと呼べ！」

朝からテンションの高い奴だ。綾は率直に思った。

「喜一って呼ばせてもらうわ……ところで、このお金ありがとう。おかげで助かったわ」

喜一は床に両手をつけて落ち込んだ。

「なんて寂しいことを……あ、そのお金は綾にプレゼントしたものであ……おい、なんか綺麗になってないかい、マイキッチン」

すぐさま、床からバネのように立ち上がってキッチンを指差した。

「ああ、それはお礼にと思って掃除しておいたのよ。それじゃあ起きたことだし、私はこれで……」

深々と一礼し、綾は玄関に向かった。

それを見た喜一は綾よりも早く、玄関に立ちふさがった。

「待てーい、なぜに出て行く。まだ一日も経っていないじゃないか」

「なぜって、もともと一泊のつもりだし……」

「行くところないんだろ、だったらもう一泊していけよ」

「申し出は嬉しいけれど……やっぱり帰るわ。あんまり長居すると迷惑かけそうだし、私お金持ってないし」

その言葉に目を輝かせる喜一、嫌な予感を感じた綾は一步距離を取ろうとした。

それよりも早く喜一は綾に近き、綾の身体を一気に抱え上げた。

「きゃ！ な、なにするのよ、降ろしなさいよ！」

「ふはははは、降ろしてほしければ、もう一泊していくと言え！
でなければ、このままメリーゴーランドだ！」

綾の身体を抱えたまま、喜一はぐるぐるとその場で回り始めた。

「バカなこと言っでないで、降ろせ〜！」

じたばた、じたばた、綾は四肢をばたつかせて抵抗したが、効果はなかった。

「もう遅い、綾に残されている言葉は、お兄ちゃんと泊めてくださ
いの二つだけだ！ 綾は軽いからどんどん回るぜ！」

「あんた、どれだけ私にお兄ちゃんって言っでほしいのよ！」

「なんとでも言え！ 罵っても俺が気持ちよくなるだけだ！」

「バカ！ アホ！ 変態！ 喜一のバカタレ！」

「もつとだ……もつと俺を罵るがいい……それが俺の力となり血
肉となるのだ」

「ちよ、はや、早くなってる！ 早くなってる〜！」

結局、綾が泊めてほしいと答えるまで、喜一のメリーゴーランド
は続けられた。その日、喜一は一日中ご機嫌に過ごし、綾はそんな
喜一の様子を見て、まあ今日一日くらいは……と、自分を納得させ
ることにした。

翌日、喜一が再びメリーゴーランドを駆使して綾を引きとめ、綾
はなんだかんだ文句を言っで、最後に苦笑して承諾する。それから
毎日行われることになるとは夢にも思わなかった。

しかし、その顔は繰り返し返される内に、いつしか喜一と同じくらい
……それ以上に笑顔を見せて承諾するようになっていった。

喜一の家に泊まるようになって14日目。

いつも喜一は日が暮れるとどこかに出かけて行き、明け方に帰っ
てきた。出かける際には必ず、知らない人には出るな、変な人が来
たら、すぐに警察に電話しろと、何度も綾に念を押した。

きつと、ホストか何かだろう。綾は黒いスーツを着て、笑顔で接

客する喜一を想像した。

人気なさそうだけど。すぐに考えるのを止めた。

綾は喜一の仕事のことは、深くは聞かなかった。喜一が聞いてほしくなさそうな顔をしていたからだ。

泊めてもらったお礼にと、綾は家事をするようになった。

喜一はしなくていい言ったが、綾はそれを聞き入れなかった。掃除自体は好きではなかったけれども、喜一の部屋を掃除するのは楽しかったから。

それを繰り返しているうちに、いつのまにか綾が家事をするようになり、この日もいつも通り、綾が部屋の掃除をしていた。

台所の椅子に座って掃除を眺めていた喜一は、てきぱきと掃除をする綾を見て、感心したため息をこぼした。

「綾は真面目だね〜、俺だったら一週間に一回くらいしかないぞ」

「喜一だったら、一週間どころか一ヶ月はしないんじゃない？」

綾は掃除機をかけている床に視線を向けたまま返事を返した。

「ははは、違う………ところでいつになったら俺のことをお兄ちゃんと呼んでくれるんだ？俺は待ち遠しくて仕方ないが」

「一生呼ばないから、その願いはゴミに出しなさい」

掃除機をかけたまま喜一を睨む。喜一は口笛を吹きながらそっぽを向いた。

「ん…………あら、服を吸い込んだわ」

綾は掃除機の電源を切つて、喜一の衣服を取り外した。

喜一のポケットから小袋が落ちた。綾は小袋を拾い上げた。

「風邪薬かしら…………」

「それに触るな！」

突然、喜一が大声を出した。綾は驚いて小袋を落としてしまったが、喜一がすぐさま小袋を拾って自分のポケットにねじ込んだ。

その様子に、綾は驚いた眼差しを喜一に向けた。喜一は居心地が悪そうに綾から視線をそらした。

喜一の普段とは違う行動に、綾はその小袋の中身が何なのかを理解した。

「喜一……………それって……………」

喜一は黙ったまま、綾の質問に答えなかった。

ふう、綾はため息を吐き、掃除機のプラグを抜いて掃除機を片付けた。

「いきなり大声出さないでよ、びっくりするじゃない。その風邪薬が大事だったら、ポケットとかに入れずに、肌身離さず持っておきなさいよ」

喜一の横を通り抜けて、綾はキッチンに向かった。喜一は綾の後姿を見つめた。

「もうお昼だし、チャーハンでも作るけど、喜一はそれでいい？」

「俺は綾の作るものなら何でも食べるけど……………聞かないのか、これのこと」

喜一はポケットから小袋を取り出して、ぽつりと聞いた。重く、静かな空気が室内を漂う。

綾は冷蔵庫から材料を出しながらも、喜一の方を向こうとはしなかった。

「聞いてほしいの？」

「……………どっちかっていうと、聞かないでほしいけど、綾は嫌じゃない？俺が……………その……………薬売っているの」

「ただの風邪薬でしょ、変わった職業だと思うけど、気にする程のものじゃないわ。それに、喜一だって私のことを聞かないじゃない」
重苦しい雰囲気の中、綾は規則正しく材料を細かく切っていく。

「それは……………まあ、人には色々聞いてほしくない話があると思って……………」

喜一の脳裏に、一週間前の出来事がよみがえってきた。

いつも通り、綾を引き止めることに成功した喜一は、なんとなく、

置物となっているテレビを見ようと思った。喜一は特にテレビを見る方ではなかったし、綾は年頃にしてはまったくテレビを見ようとはしなかったからだ。

きつと遠慮しているのかもしれない。

綾は変なところで遠慮するからなく、と緩んだ頭でテレビの電源を入れた。

その横で綾が顔を赤くしてそっぽを向いていたのも、喜一をご機嫌にさせた。

だから気づかなかった。朝のニュース番組に映し出された事件の報道に、そっぽを向いていた綾の顔色が悪くなっていたのを。

「私、他の見たいわ、ニュースはつまらないもの」

震える声で、綾が喜一の横をすり抜けて電源を切ろうとしたのを見て、ようやく喜一は綾の様子がおかしいことに気づいた。

しかし、綾が電源ボタンに手を伸ばすよりも早く、画面には綾の顔写真が映された。

綾も、喜一も、凍りついたようにテレビの画面を見つめた。綾の顔写真の他に、数名の少年少女の写真が映し出され、ニュースキャスターが報道を続けていた。

『……の事件にて、行方不明になっている、女子中学生、高田綾さん当時15歳。高田綾さんは警察の捜査もむなしく、まだ発見されていないようです。また、犯人からの電話等の身代金の要求もないことから警察は、高田綾さんは既に殺害されている可能性が高いとして、捜査を続ける方針です。また、かぞ』

最後まで言わせることなく、喜一はテレビの電源を切った。

綾は血の気が引いた青白い顔で、喜一を見つめていた。身体は震えていた。

綾が何かを話すよりも早く、喜一は綾を抱きしめた。

抵抗はなかった。そのことに喜一は不安を覚えた。

喜一はさらに強く綾を抱きしめた。綾の腕がゆっくりと喜一の袖をつまんだ。

「俺は聞かないぞ」

綾の身体が大きく震えた。

「迷惑をかけるとか、そんな俺は平気だぞ。お前が何をしたのか、何から逃げているのか知らんが、そんなことで出て行こうとかするなよ。本当にこの家から出て行きたくなったら出て行ってもいいけど、それ以外のことで出て行くとか許さないからな」

綾が身じろぎして離れようとするが、喜一は綾を抱きしめた手を組み合わせて離れないようにした。

「一人で食べるご飯は美味しくないんだぞ…… 兎は寂しいと死んじやうんだぞ」

「……………」

返事はなかった。そのかわり、袖を摘んでいた綾の手が喜一の背中にゆっくりと回された。そして、喜一の胸に押し付けられる体温がすかに嗚咽が聞こえてくる中で、小さな、本当に小さな声で、バカ喜一、そう呼んでくれたような気がした。

「いやいや、気にしていてもしかたない」

頭を振ってそのときの出来事を頭から追い出した。幸いにも、綾は材料を炒めるのに忙しく、喜一の方を見てなかったので、変な目で見られることはなかった。

「あのときはびっくりしたが、それからはやかったな。妙におとなしくなった綾は可愛かったし、ペタペタ甘えてきたのはグツときた」

「喜一、お皿取って」

「気づくと俺の背中にくっついてくる姿はまさに現代の癒し！ この殺伐とした時代に現れた天使！」

「喜一、お皿、焦げる前に早く」

「だが、それも三日も経つと甘えなくなってしまったのは辛い。ちくしょう、あのときお兄ちゃんと呼んでもらえるチャンスだったの

に」

ようやく、喜一の様子に気づいた綾は、無言で皿を取り出し、二人分盛り付けした。目ざとく喜一は正気に戻ると、綾の向かいに座って、食べ始める。

綾も手早く後片付けを終え、椅子に座ってチャーハンを見つめる。食べたい気持ちはまるでないが、意を決し、チャーハンを一口パクリ。

綾はトイレへ走った。

喜一は心配そうに綾の後姿を見送った。手元のチャーハンをもう一口、ほんのりと香る香ばしい匂い。薄味だが、とても美味しかった。

喜一の家泊まるようになってから20日目。

喜一の住んでいるアパートの近くにある銭湯の帰り道、喜一と綾は並んで帰路についていた。

季節も秋から冬に変わり、もう完全に過ごしやすい季節ではなくなっていた。

喜一はジャンパーの下に2枚服を重ね着して。綾はジャージという、ラフな格好のままだった。

傍目にはとても寒そうなのだが、綾が平気な顔をしているので、喜一は特に口出しなかった。

「そういえば……話してなかったな」

お互いに話すこともなく、穏やかな静寂の中、喜一が綾に話を切り出した。

「俺さ、薬を売るのは、止めようと思っているんだ」

綾は何も言わず、喜一を見つめた。

「この前、薬を売っていたら、怖そうなオッサンが来て、こんなもの売らんじゃない！ って、怒鳴られたんだ。けど、そうしなきゃ生きていけないんだよって言い返したら、そのおっさんが仕事を紹

介してやるって」

綾も、喜一も、立ち止まっていた。

「俺……半信半疑だった。けど、昨日本当に仕事を持ってきてくれたんだ。とりあえず昨日は顔合わせして、明日から働くことになっているんだ」

ぼそぼそと、いつもの喜一とは見えないくらい弱気になっていた。

「高校行つてないし、親もいないし、特技があるわけでもないけどさ……その人達、皆優しくて……」

「やればいいじゃない」

喜一は顔を上げた。綾はにつこりと笑った。

「私は反対しないわ、あなたがそうしようと思ったのなら、そうすればいいと思う。私のことは気にしなくていい、邪魔になっただけで行くし、今の仕事を続けたいなら断ればいいじゃない」

「邪魔なんかじゃない！」

喜一は声を張り上げて否定した。先ほどまでの弱気な様子とは違い、今度の言葉は力強かった。

綾は照れくさくなって、そっぽを向いた。赤くなった綾を見て、

喜一は一瞬、笑顔を見せたが、すぐに心配そうな顔に変わった。

「それはそうと、今日も食べてなかったな」

赤くなった頬もそのままに、綾は申し訳なさそうにうつむいた。

「本当に大丈夫か？ 俺、綾が家に来てから一回もご飯食べているのを見たことがないぞ。どんどん痩せていつているし、いつか倒れるぞ」

「大丈夫よ……お腹は空いているけど、意外と平気よ」

嘘だった。本当は体中の脱力感が強く、最近は一度座ると立ち上がるのが辛いと感じるくらいになってしまった。

「……まあ、いいさ。綾が食べられるモノは分かっているし、いざとなったら……」

「何？ なにか言った？ それに、その指痛くないの？」

綾は喜一の手を指差した。指差された喜一の左手の指先、小指と

薬指が根元からなくなっていて、包帯が巻かれていた。

「別に痛くないよ。ちよつと仕事辞めるのに必要って言つたる……気になる？」

「でも、四日前には小指でしょ、そんで二日前には薬指、顔色も悪くなっているわよ」

綾は喜一に左手を取って、包帯の上から擦った。

綾自身は気づかなかったが、このときの綾の瞳は壮絶な色を帯びていた。まるで、大好物を目の前にした獰猛な獣のような……。

そんな綾の変わりようを、喜一は黙って見つめた。

「よし、実は一昨日けつこう売れたんだ。いつもより給料大目に貰ったから、夕食はレバニラにしようぜ！」

途端、綾の瞳に理性が戻る。

「またレバニラ？ 喜一って本当にレバニラが好きなんだね」

「血が、血が足りないんだ」。顔色悪いと言われては、レバニラ食べて血を増やすしかない」

「はい、はい……いっぱい作ってあげるわよ」

再び、二人は歩き出した。自分たちが帰る家へと。包帯の巻かれた喜一の左手と、綾の右手が重なるのはもう少し経ってからだった。

喜一の家に泊まるようになって28日目

朝から続いた雨は、夜になっても振り続けた。

綾と喜一、二人で一本の傘を使って、身を寄せ合い濡れないようにしていた。

綾はいつも通り、上下のジャージ。喜一は出会ったときに着ていたジャンパーを身に付けていた。

「迎えに来てくれるとは思わなかったよ。スーパーに行くときでも帽子被って顔を隠していたのに」

「暗かったし、傘で見えないようにしたから。喜一も頑張っているじゃない」

喜一は包帯に包まれた左手で器用に傘を持って、綾を濡らさないようにさりげなく傘を傾けた。

「まあね、やっぱり可愛い女の子が家にいると、仕事に対する気合が比べ物にならないくらい違うな」

「褒めたって何もでないわよ」

「事実だから大丈夫だ……ところで今日のレバナラ多めにしてくれよ」

綾は赤くなつた顔をスーパーの袋を抱え上げて隠した。

「喜一って本当にレバナラ好きだね……そういえば、顔色も悪いままだし、どこか病気なんじゃないの？」

綾はじつと喜一の右手を見つめた。視線の先、喜一の右手は包帯に包まれていた。

「病気ではない、ただ俺の熱い想いがカロリーを燃烧させてしまっているだけだ。後、そんなに見つめるな、ちよつと恥ずかしいぞ」

喜一は綾から見えないように右手を隠した。綾は喜一を見上げて、問い詰めた。

「でも、今度は右手も……本当に大丈夫？」

「大丈夫、前の仕事は縁を切ったから、もう心配することないよ……これは俺の不注意が原因」

だから泣くな。そう言つて喜一は右手で綾の流れた涙を拭つた。包帯にしみこむ綾の涙はとても熱く、右手に添えられた綾の左手はとても優しくつた。

その涙を見て、喜一の脳裏に名案が浮かんだ。

「そうだ綾、服を買いに行こう」

喜一は綾の身体を見下ろした。出会つたときから着ているジャージは、洗剤で洗われているにもかかわらず、少し汚れて見えた。

「今まで平気そうにしていたから気づかなかつたけど、よく考えたらジャージ一枚しか着るものがないのは女の子としては致命的だ。俺のお下がりばかり着ていては……いや、それもいいか？」

「え……でも、いいよ。喜一の服があるから」

喜一の右手を頬に当てたまま、拒否した。一言話すたびに伝わる振動がくすぐったい。

「駄目だ、これはもう決定だ。明日は綾の服を買いにいこう。たまにはオシャレもしないといけないぞ。それに、一週間分の給料もらったからな」

喜一はジーンズの後ろのポケットを叩いた。綾も反対するのは無駄だと……内心とても嬉しく思い、喜一の笑顔を見上げた。

降り注ぐ雨の中、喜一と綾は二人見詰め合っていた。時々通る車も、他の通行人も、このときばかりは現れなかった。

……………一人を除いて。

ぞくりと、綾は嫌な臭いを感じた。とても、とても嫌な臭いだっ

た。
「見つけた、まさか足を洗っているとは思わなかったぜ」

いつの間にか、綾と喜一から少し離れた所に、一人の男が立っていた。

黒いロングコートに身を包み、サングラスで顔を隠した茶髪の男は小さく笑みをみせてコートの中に手を入れた。

男が懷から黒光りする銃を取り出すのと、喜一と綾が突然現れた男に視線を向けると、同じタイミングだった。

「悪いな……恨むなら、その男を恨みな」

その言葉と共に、銃口から放たれる弾丸。綾は反射的に喜一の前に躍り出て、かばうように両手を広げた。

弾丸は綾の着ているジャージを貫き、下着を貫き、皮膚を貫き、内蔵を貫いた。

綾の背中に抜けた弾丸が喜一のお腹に当たって地面に落ちた。喜一のジャンパーは綾の血で赤く染まった。

喜一は、呆然とした表情で、血で染まったジャンパーと、綾を交互に見つめた。

げふ、と水の詰まったような音が綾の喉から漏れた。

次の瞬間、綾の口から大量の血液が噴出した。

痛い、痛い、痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

頭の中が痛みで埋め尽くされる。それでも、綾は両手を下げることとはしなかった。

「あ……………あ、あ、あ……………あや……………」

喜一の手から傘が滑り落ちる。綾と喜一の身体を雨が濡らしていく。

銃声はまだ終わらなかった。二、三、四、五、六。銃声は6回繰り返された。銃声が一回響き渡ると、それに合わせて綾の身体が人形のようにカク、カク、と動いた。喜一は自分の胸に凄まじい激痛を覚えた。震える手で胸を押さえると、そこから赤い液体がジャンパーの内側から漏れ出した。

男が銃を懷にしまう。綾の身体がぐらりと揺れる。喜一は無意識に手を伸ばし、頭をぶつけないよう綾のジャージを自分へ引っ張った。

掴んだジャージの部分は血で湿っていた。

「おっと、これは持っていないかないな」

いつの間にか近づいていた男が、喜一の後ろポケットから給料の入った封筒を抜き取っていた。

お前は誰だ、なぜこんなことを、なぜ俺達を、男に浴びせたい罵声が喜一の頭をぐるぐると回ったが、こみ上げてくる血液が邪魔して口に出せなかった。

喜一が先に倒れ、その上に重なるように綾が倒れた。二人の身体に降り注ぐ雨水と一緒に血が一面に広がっていった。

「亮一、そっちは終わりましたか？ こっちは終わりましたよ」

「金になりそうな物はありませんでした、浪費家だったのかもしれない」

自分に向けられた言葉に、男、亮一は背後に振り返った。そこには同じ服、同じ靴、同じ髪型、同じ顔をした二人の少女が傘も使わずに立っていた。

「明日香、明日菜、頼むから能力を使っただま来ないでくれ。冗談

抜きで怖いから」

二人の少女、明日香と明日菜は互いを抱きしめて微笑んだ。

「あなたに言われたくないわ、ねえ、明日菜。それより早く帰りましょう」

「ええ、明日香。このままでは身体を悪くしてしまうわ、」

明日香と明日菜は雨に濡れるのを気にしていないのか、ゆっくりとした足取りで亮一の服を摘んだ。

亮一は抜き取った封筒をコートの中にしまった。

「誠のやつ、来ているか？」

「来ているわ、亮一。既にこの辺り一帯に結界を張ったって連絡が来ました」

「こちらから外に出ることはできても、中に入ることはできないとことです」

「万が一助けが来ることもない……か。それじゃあ、帰りますか」

亮一の言葉と同時に、三人の身体が淡く光り、一瞬強く光を放って、消えた。

光が消えたときには、そこに三人の姿はなかった。後には、喜一と綾だけが残された。

どれくらいそうしていたのか分からない。綾と喜一は地面に横たわったままじっとしていた。おびたしい量の血液が地面を伝っていく。

「……………あ……………き……………き……………ち」

喜一の上で、綾はうめいた。ごぼ、嫌な音を立てて綾は血反吐を吐いた。激痛に悲鳴を上げる身体を無理やり起こして、綾は喜一の頬を叩いた。

「おき……………お……………ろお……………きろ……………」

綾の口からこぼれ落ちた血液が、喜一の頬を伝って流れていく。その上から、綾の両目からこぼれ落ちた涙が、血液の跡を洗い流し

た。

「……よ……よお……綾……元気そうじゃ……ないか……」

喜一の瞼はゆっくりと開かれ、綾の視線と合わさった。さらに綾の涙が溢れた。

むせ返る血の臭いも気にせず、喜一の首もとに頬を擦りつける。

「き……き……いち……きい……ち……」

「喋るな……話を……聞け、最初で最後の、話だ」

次第にはつきりしていく意識とは裏腹に荒くなっていく喜一の呼吸。綾は僅かに首を振って嫌がった。

話が終われば、喜一が死んでしまう。ならば、話を聞かなければ喜一は死なない。そんなありもしない可能性に縋りたかったからだ。「いいから、話を、聞け、お前のことだ」

今度は首を振ることはなかったが、鼻や頬を擦り付けるのは止めなかった。

「お前、ずっと飯も食わず、水も飲まずに、いたけど、お前は生きている、何でだと思う、普通なら、とつくに、倒れている、はずだぜ」

綾は何も答えなかった。喜一はかまわず話を続けた。

「それはな、俺が、お前に、ご飯を食べ、さしていたからだ、簡単な、話だろ、最初は、左手小指、次は、薬指、次は、右手の指」

綾は黙ったまま、喜一の身体を抱きしめた。

「最初のときは、夜中寝ているとき、お前が、起きて、お腹がすいた、お腹がすいた、そういつて、外に出て、行ったのを、追いかけた、んだ、そしたら、公園で、野良猫を、捕まえて、猫を、生きたまま食べていた」

綾は顔を上げて、喜一の頬と自分の頬を擦り合わせる。

「でも、すぐに吐き出した。これじゃない、ってさ、泣くんだ、辛そうに、泣くんだ、だからさ、俺、自分の、小指、切って、綾に、食べるって、言ったんだ、そしたらさ」

綾の目から涙が次々に流れ出し、喜一の頬を濡らしていく。

「美味しいって、嬉しそうに、幸せそうに、食べたんだ、そしたらさ、これで、我慢できる、そうって、寝ちゃったんだ、俺、コン口で、傷口焼いて、包帯まいて、寝たんだ、痛くて、寝られなかったけど、お前、覚えてなくて、ちよつと、安心、したんだ」

鳴咽を漏らして、喜一の頬に口づけする。喜一はくすぐったそうに片目を閉じた。

「薬指、切ったときも、同じように、食べさした、すぐに焼かずに、血も飲ました、綾、美味しそうに、飲んでいた、俺、痛かったけど、すげー、嬉し、かった」

「も……しゃえ……ちゃ……めえ」

途切れ途切れの声を、喜一は無視した。

「綾、俺を、食べる」

身体を震わせ、何度も口づけをして、涙を流し続ける綾の頭を撫でる。

ぐう、大きな腹の音が響いた。綾はあわてて自分のお腹を抓った。

「きつと、綾は、助かる……食べる……分かって……いるだろ」

嫌、嫌、綾は首もとに顔を埋めたまま答える。

「うつすらと……覚え……て……いる……だろ……頼む………食べて、くれ」

頭から手を下ろし、背中 hands を這わす。背中 of ジャージの穴に指を差し込んでみると、血で滑る暖かい肌が指先に触れた。

傷口は塞がっていた。

綾は胸の傷口に触れないように、馬乗りになった。

途切れ途切れになっていく喜一の呼吸。

「俺……幸せ……だ……た……ほんと……う………幸せ……だった

……綾に……あえて……しあ……」

ゆつくりと、身体を倒して喜一の身体に体重を預ける。

止まらない涙、薄く開かれた綾の唇の隙間には、鋭く尖った歯が見えた。

死を迎えようとしている喜一の耳に、唇を寄せて。

「私も幸せだったよ……お兄ちゃん」

僅かに、本当に僅かに、いつも笑っていた笑顔とは違う、夜の公園で出会ったときに見せてくれた、ちよつと間抜けに見える笑顔を見せて、喜一は静かに息を引き取った。

それらを全て見届けた綾は、まだ温もりが残っている頬に口付けして、むき出しの首に齒を突き立てた。

第七話：決意（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカニバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださるようお願いします。

ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています

第七話：決意

綾が家に帰ったとき、部屋は悲惨な状態だった。引き出しは全て無造作に開けられ、食器棚の皿もいくつかが割られて中を荒らされていた。

キッチン、洗面所、トイレ、押入れ、無事な場所はひとつもなかった。渡されていたお金を保管していたテレビ後ろの隙間を見ると、そこには何もなかった。

果然と部屋の惨状を確認していると、無造作に捨てられていたノートを見つけた。あんな物あったっけ？ そう思って拾い上げた。ノートの表紙には、汚い字で、喜一の日記と書かれているのを目にした途端、綾はその場でページを開いた。

そこには綾と出会った日から、昨日までの日々が書かれていた。そして、中には綾にそっくりで、綾よりも年若い少女の写真が挟んであった。

『 月×日 天気は晴れ。

今日はいい日だ。なんてったって綾が帰ってきたんだ。ずっと会いたかった綾が帰ってきたんだ。こんな嬉しいことはないぜ。しかも、俺が寝ているうちに、部屋の掃除をしてくれたんだ。よくできた妹だ。

あのときは守ってやれなかったけど、今の俺は違う。あいつを守る為ならなんでもする。今日から頑張ろう』

ページをめくる。

『 x月×日 天気はくもり。

時間を戻せるとしたら、俺は過去に戻って絶対テレビをぶっ壊すだろう。

なんてこった、綾があんなに怯えている。

でも大丈夫だ、綾！ 今度は俺が守ってやる、もう、親父に怯えていた頃の俺じゃない。お前を笑顔にするなら何でもしてやる……

後、喜一じゃなくて、お兄ちゃんってあの頃のように呼んでくれな
いかな？ そりゃ、俺のことを恨んでいると思うけど、やっぱりお
兄ちゃんって呼ばれたいな』

ページをめくる

『x月 日 天気は晴れ。

綾に俺に仕事がばれちまった、今思い出しても胸が痛い。

でも、そんな俺を綾は許してくれた……やっぱり綾は可愛い！

けど、いつまでもこの仕事を続けるわけにはいかないし、別の仕事
探さないと。

でなきゃ、綾に心配かけちゃう。綾には、死んでいった綾のよう
になってほしくないんだ、だから綾、無理はするなよ』

ページをめくる

『x月x日 天気は晴れ。

最近、俺は凄く幸せだ。無事に薬の仕事を辞めることができたし、
仕事もすぐに見付かった。

なにより、綾が応援してくれたのが嬉しかった。

妹の分も、幸せにしてやりたい。だから応援してくれ、俺ががんば
っちゃうから』

ノートの上に涙が零れ落ち、文字が滲んだ。かまわずページをめ
くる。

『x月 日 天気は少し雨。

明日は給料日だ。前の仕事のお金がまだ残っているから、当分は
大丈夫だし、給料をもらったら、綾の服を買いに行こう。俺のお下
がりとジャージしか着るものがないのは女の子として可愛そうだ。

明日になったら、綾の服の好みを聞いて買いに行こう……そうだ、

綾と一緒に買えばいいんだ。雨は明後日まで雨が降るらしいから、

綾と相合傘だ』

ページをめくる。そこから先は白紙だった。

綾は涙を拭って、写真を戻して、ノートを閉じた。コンロに向か
い、ノブを捻る。淡い青色の炎に、ノートの端を近づける。

すぐにノートにも炎が燃え移り、舐めるように炎がノートを侵食し、中に入った写真も、綾の手をも燃やしていくが、気にせず炎に手を突っ込ませる。

ノートは一片の破片も残さずに灰に消えるのを確認して、綾はコン口の元栓を締めた。燃やされた手には、火傷の痕ひとつなかった。「喜……………私、本当の化け物になっちゃったね。というか、もっと前から化け物だったんだろうね」

泥だらけになったジャージの上から自分のお腹を撫でる、久しぶりに感じる満腹感。ぼろぼろと、湿った土が床に落ちた。

部屋の端に落ちていた時計に目をやると、夜中の1時を過ぎていた。

落ちている物に気をつけて洗面所に行き、鏡の前に立つと、そこには血で汚れた穴だらけのジャージを着ている綾が映っていた。

「……………目の色変わっている……………おまけに目つき鋭くなっているような」

少し高い鼻、桃色の唇、そこは変わっていないが、それ以外、瞳の色が赤色に変わり、目つきが鋭くなっていた。

ジャージ上下を脱ぎ捨て、改めて鏡に肢体を晒す。

「身体洗わないといけないかな、通報されるかもしれないわ」

鏡に映ったささやかな乳房、青白く見える一步手前の魅惑的な白い肌、そして身体を包むように広がった血痕。

胸をつついてみるが、わずかな弾力の向こうには、筋肉の堅さしかなかった。

「結局、これは大きくならなかったな……………あのときは胸なんてすぐに大きくなるって言ったけど、そんなに早く大きくなるわけがないのね」

軽く胸を揉んでみる、手のひらにぴったりなのが、ちょっと悲しかった。

リビングに戻って、ジャージをゴミ袋に入れる。ふと、窓の向こうに目をやると、いくつもの雨水が窓にぶつかって流れていった。

ん、少しの間考えて、綾はショーツも脱いで袋に入れる。それを背中に担ぎ、玄関に向かった。

「これを捨てた後は服を探さないと……今までの私は捨てよう。ここを出たら、もう私は……」

最後に、綾は振り返って部屋を見渡す。

喜一のご飯を作ったキッチン、並んで歯を磨いた洗面所、二人で笑いあって過ごしたリビング。

そのどれもが心を明るく照らし、孤独を癒し、素晴らしい思い出となって綾の脳裏を流れていく。

「バイバイ、喜一。あんたは最高のお兄ちゃんだったよ。服は全て置いていくわ、どうせ血で全て汚れると思うし、あんたの服は汚したくないからね」

玄関を少し開け、誰もいないのを確認してから、急いで出る。廊下の手すりの上に裸足のまま飛び乗り、そのまま屋根の上にジャンプ。

一気に数メートル近く飛び上がり、簡単にアパートの天井に飛び乗れた。

そのまま屋根伝いに飛ぶ、数十メートルの距離がある屋根に飛び移り、十数メートルの高さのビルを飛び越える。体中から力が湧き上がってくるのを実感でき、今なら何でもできそうな気がした。

ゴミ捨て場に、担いでいた袋を投げ入れ、誰にも見られないように屋根の上を飛び乗っていく。

「亮一、明日香、明日菜、誠……臭いだ、あの臭いを探せば」

降りそそぐ雨をもとめず、夜の街を駆け抜けていく。

「あいつらは……必ず私の手で！」

爛々と輝く赤い瞳が夜の闇に光る。四肢に力を込め、一気に飛び上がった。白い影が雨を突き抜けて進み、綾を空へと運んだ。

「脱出した」

「……………は？」

大きい円卓が鎮座されている白い部屋、二人の男の会話が静寂を破った。

「脱出したと言っているのだ、亮一……………殺し損ねたな」

「誠……………せめて主語を入れろ、さっぱり分からん」

誠の言葉に、亮一はうんざりしたように頭に手を当てた。

亮一と呼ばれた男は、ぼさぼさの茶髪にきりりとした目、高い鼻、皮肉げにゆるんだ口元、一見すると優男に見えてしまいそうな顔立ちだったが、瞳の奥にある何かが、彼をそう見せなかった。

誠と呼ばれた学生服を着た男は、きつちりと整えられた黒髪に、一直線に閉じられた唇、眉間にシワを寄せた姿は、亮一とは反対に厳格な仕事人に見せた

「お前が3時間前に殺した男と少女のことだ。どうやら、少女の方は生きているみたいだな、ピンピンした様子だったぞ」

一瞬、何を言われたのか分からず、ぽかんと誠を見ていた亮一は、すぐに我に返って問いただした。

「新手の冗談か？ 俺は確かに鉛の弾丸を二人に打ち込んだんだぜ、特に女の子の方は五発も撃った。男だって胸の辺りに一発当たった、どちらかというと、逃げることは出来るのは男の方なんじゃないのか？」

「冗談なんかじゃない、……………確かに少女は大怪我を負っていた。そこは俺の能力で分かっている。だが、たった今少女が何かを担いでどこかに向かったのは確かだ」

誠は大きいため息を吐いて、頭を振った。

「少女が脱出する前に、男の側で何かを行っていたみたいだが、何をしていたのか、それは分からん。おそらく、男の方は絶命したと思うといいだろう」

「恐らく、って、お前の能力じゃ、中の様子とかは正確には分からないのか？ どこに向かったとか、何をしていたとか」

じろりと、横にいる亮一を睨む。

「前にも言ったが、僕の能力はそこまで便利じゃない。年老いているか若いかわ、男か女か、大きい小さいか、どんな顔か……分かるのはそれくらいだ。少女だと分かったのも、小さい方が動いたからだ」

睨まれた亮一は、誠の視線から逃れるように首をすくめた。すぐに、真剣な表情になった。誠も、それに合わせる。

「ということは、何らかの能力者である可能性があるということか」「可能性というより、確実に能力者だ。自己修復に特化した能力か、それに近い何かというのがアリス様の意見だ。既に、『正義』が処理に向かっている」

『正義』の単語に、亮一は目を見開いた。

「よりにもよって、あいつに任せたのか！ あの男を向かわせて、あの女の子がどうなるか分かっているのか！」

「殺されるだろうな。『正義』なら、そうするだろう。それに普通には殺してやらないと思う。ジワジワと痛めつけてから殺すだろうな」

「どうしてだ！ 能力者なら仲間にするばいいじゃないか！」

亮一は誠の胸倉を掴んで引き寄せたが、誠は無表情に話を続ける。「あのときは君が能力者だとは知らず、とんだご迷惑を、とても言うて仲間に出来ると思うか？ 普通なら敵対してくるのが当然だ。それに、あの少女には自己修復能力がある、ではどうやって殺す？ お前も、私も、直接ダメージを与える能力ではないのは分かっているはずだ」

「だったら明美に行かせれば……」

「今動けるのは『正義』だけだ……私だって心苦しいが、組織に敵対する可能性のある存在は全て排除しなければならぬ、それも分かっているはずだろう？ それと、少女の顔写真を撮るために、頭

の中を念写されたから気分が悪い、手を話してくれると助かる」

亮一は学生服から手を放して、自分のポケットに手をつ込む。納得いかないと顔に出ているのを、誠は見ないことにした。

「あの子の念写は、いつ受けても気分が悪いな。一时间ジェットコースターに乗り続けたような気分だよ……あまり気にするな、仕方ないことなんだ」

「……分かってるよ、俺も……」

誠はそう言い残して、部屋を出て行った。部屋にはうつむいて拳を握り締めている亮一だけが残された。

降りそそぐ雨に身体に付着していた血の跡も全て洗われ、全身が水浸しになっていた綾は急いで大型のデパートの屋上に着地した。そこから忍び込もうとしたが、中に入るためのドアには鍵がかかっていたので、力ずくで開けた。

普段従業員しか使われていないであろう通路を通り、階段を下りると、鍵のかかった鉄製の扉があったので力ずくに開ける。かなり大きな音をたててしまったけど、警備員が来るよりも早く中に侵入した。

中は真っ暗だったが、綾には関係なく店内を識別できた。自分にとって、それは出来て当たり前のことから。気にせず中に進み、ネットで覆うように囲われた商品等を見回す。

テレビ、掃除機、照明器具、パソコン……どうやらこの階は電化製品を売っているみたいだ。

エレベーターを探して歩くと、意外とすぐ見付かった。横に案内掲示板が張られていたので、今の自分の位置が5階だということが分かった。衣服を販売している階は3階……2つ下だ。

エレベーターを押してみるが、ボタンのランプが点かなかった。

各階に通じるエレベーターは停止しているようだった。近くにあった、止まっているエスカレーターから階を下りた。

途中、戸棚にタオルが置かれていたので、値札を引きちぎって身体を拭いた。雨に濡れていても身体はまったく辛くなかったが、いつまでも濡れねずみでいるのはよくないと思ったからだ。

幸運にも、エスカレーターを出て正面に下着売り場はあった。ここもネットで下着売り場全体を囲っていたが、ただ囲っているだけなので下から潜り抜けて中に入った。

中には可愛いキヤラクターがプリントされたものから、細やかな刺繍が施されたものまであった。中には女性用のトランクスもあった。

とりあえず上下セットの下の方、高そうな黒いやつを選んでみる。値札を見ると、ゲームソフトが５つ買えそうな値段だった。履き心地も良いし、上の方もちょうど良かったのでこれにした。

次に衣服だ。

裸から下着姿にバージョンプを果たせたが、これで外を歩くには心許ない。せめて一着は着ておきたい。

下着姿のまま、ペタペタと綾の足音が誰もいない廊下を進む。と、一瞬、遠くのほうから明かりが見えた。

警備員かもしれない！

急いで横のネットに入ろうとして、手を止めた。おそらく警備員が探すとしたら、商品が置いてあるネットの中を重点的に探すと思えたからだ。

「だったら……上！」

判断は早かった。素早く天井までジャンプして、両手の五本指だけを突き刺した。指を曲げて落ちないようにしてから体勢を変え、天井に張り付くように両足をつけた。なんというかどこかのクモ男みたいだ。

カツ、カツ、カツ、と革靴の規則的な反響音。ゆっくりと足音が近づいてくると共に、足元を照らす明かりも強くなってきた。

あとちよつと、もう少し、すぐ目の前、そして綾の真下に来て、止まった。

天井からだったから顔は見えなかったが、身体の高さと青色の服から、彼が警備員であることが分かった。彼は何度かしゃがんで、綾がさつきまでいた下着売り場のマネキンを照らしたり、ネットの下の中を照らしたり、商品を照らしたりしていたが、綾の方には気づかずに通り過ぎていった。

……………もう大丈夫かな？

音をたてないように気をつけて、床に着地する。裸足のおかげか、ほとんど無音で着地できた。

振り返って警備員が戻ってこないのを確認してから、服探しを再開した。

左右にネットで囲われたスペースが奥の方まで並んでいた。中を覗こうとしてもネットが邪魔して見えない。いちいちネットを持ち上げてみるしかないようだ。とりあえず左の方のネットを持ち上げて覗いてみると、スーツを着たマネキンがいくつか立っていた。

少し中に入ってみる。就職活動用のリクルートスーツ、ホストが着そうな黒のスーツ、カッターシャツ、色々あった。

ここは見る必要はないか……それにしても、下着売り場の横を、スーツの販売売り場にするのは駄目なんじゃないだろうか？　なんだか気まずいことになりそうな気がする。

綾は少し、この店の販売方法に疑問を覚えた。だが、覚えたところで意味はないので、すぐにその考えを忘れることにした。

気を取り直してスーツ売り場の向かいのネットを持ち上げて中を確認する。中には男性用の下着などが多数、置かれていた。

ネットを戻してさらに奥に進む。

ふと、自分が行っていることは、立派な窃盗であることを思い出した。

「そついえば、これって犯罪なんだよね……まあ、いまさら考えても意味ないか」

けれども、こうするしか方法がないので、気にしないことにした。しばらく捜し歩いて、ようやく若者向けの衣類を見つけた。また警備員が回ってきたが、さっきと同じように天井に張り付いてやり過ごす。

さっそく中に入る。

ワゴンに入った服は鍵がかけられていたので、鍵を握りつぶして中を漁る。

その中で、黒いワンピースを手を取った。古臭いようにも、新しいようにも見えるそれを、一目で気に入った綾はそれに決めた。

外に出て、初めて雨が上がっていることを知った。綾は、黒いワンピースを風になびかせて走り出す……そして空に飛び立ち、一気に数十メートルもジャンプする。

高度の上昇が収まると、重力が綾の身体を地面に縛り付けようとする。数十メートルの高さから緩やかにスピードが加速されていき、重いものを叩きつけたような音を立てて駐車場に着地した。

「い……………痛い……………痛い」

その結果、綾の両足は粉碎した。

「……………お……………おう……………おう」

今度からはもうちょっと低いところから下りよう、綾はそう思った。

地面に着地した瞬間足が折れてしまった。急いで両手で踏ん張ったおかげで上半身は無傷で済んだが、少し手を擦りむいてしまった。けれども、すぐに痛みは収まった。手の皮は新しく変わり、両足も凄まじいスピードで傷が塞がっていくのを実感する。

綾は自分の身体のデタラメさに呆れた。

「どれくらいで立てるようになるかな……………んん？」

どこからか、騒がしい喧騒が聞こえてきた。しかも自分に近づいて来ているのが分かった。酔っ払いだろっか？

「おい……やばいんじゃない？ これって自殺だろ、自殺」

「でも、どこから飛び降りて来たんだ」

「そんなのどうでもいい、やっべ、マジやっべ」

「うわ、足がやべーことになってる」

うつ伏せになっているせいで人数は分からなかったが、脚の数を見ると、数人の男女が私の周りをぐるぐると回っているのが分かった。中には勝手に写真を撮って、ゲラゲラ笑っている人もいた。

「やっべー、写真撮っちまった」

「やべーって、マジ呪われるぞ」

「いいから、記念だよ、記念」

仕舞いには記念撮影までしだした。

綾はとりあえず、傷が完全に塞がっているのを確かめるために立ち上がった。

「うわ！ 起き上がった！ やべー！」

驚いている人達を尻目に、綾は自分の足を確認した。既に傷も塞がり、足は元通りに治っていた。手に入れた服は濡れてしまったが、不幸中の幸いにも血は付いていなかった。

ああ、そういえば、靴を取ってくるのを忘れたわ。裸足を見て、綾はそんなことを考えた。

改めて集まっている人達に視線を向ける。茶髪、金髪、赤色の髪、白色の髪、髪を様々な色に染めた4人の若者がいた。男も女も、この民族と言いたくなる化粧をして、一人、小さな人形のストラップがついている携帯を、こちらに向けている金髪の男がいた。

一步、金髪の男に近づくと、その分、若者達が一步下がった。かまわずさらに歩み寄る。

「な……なんだよ……近づく」

黙って金髪の男の横を通り過ぎた。

何か言ったような気がしたが、問答するつもりはなかった。

いちいち相手をしていてもしょうがないし、いつまでもここにいるわけにもいかない。さっさと駐車場を出ようと綾は考えた。

「ちょ……おい、待てよ。こんな時間にどうしたの、なんか事件？」

綾の後ろに金髪の男がついてきた。それにつられるように、他の若者達も一緒に後ろをついてくる。質問に答えずに足を速めるが、それでもついてくる。

「待てよ、ちょっとくらい話聞けって！」

「こんな時間にウロウロしているんだから暇でしょ。さっき上から落ちてるように見えたけど、なんかのロケ？」

「ちょっとお金貸してくれない？ 私達困っているんだ。病院に連れて行ってあげる代わりに、お駄賃頂戴。」

「後で返すからさ」、ちょっと向こうで話そうよ。エスコートしてあげるからさ」

口々に話しかけてくるけど、綾は全て無視した。

それって恐喝だし、せめて統一して喋れ！

一言怒鳴り返したかったが、綾自身は身長も低いし、なにより女だ。おそらく怒鳴ったところで意味はないし、逆上させるだけだと思ったので、あえて無視することにした。

執拗に迫ってくるお金の催促を無視していると、目の前には高い網のフェンスが立ちはだかった。立ち止まってフェンスを見上げる。目測の高さからして、綾の身長 of 2 倍近くあった。こんなに高いフェンス、なんの意味があるのか、綾には皆目検討もつかなかったが、きつと防犯のためだろう。

「そんなに急ぐなって……悪いようにはしないからさ」

金髪の男が綾にそう言って近づいてくる。綾は振り向かず一息でフェンスを飛び越えた。フェンスに触れずにジャンプしたために落ちるときに綾のワンピースがまくれた。白い太もどころか黒い下着も見え隠れしたが気にせず着地した。

立ち上がってフェンスの向こうに振り返る。

全員がぼかんと綾を見ていた。金髪の男は何度も、綾とフェンスの間を視線が行き来していた。

そして、もう振り返ることはせず、デパートを後にした。

見つけた……あいつが能力者か。

彼は双眼鏡を片手に、今しがた観察した獲物の力を推測する。

「ふん、クズならクズらしくゴミに埋もれてれば良かったものを」
彼の姿は誰もが嫌悪感を覚えた。

皮脂でぬめった鼻に、にきびが大量に出来た頬。腫れているように見える唇に、ニヤニヤと笑みを形作る目。異様な男だった。

肌寒い夜、白のランニングシャツにハーフパンツをはいた姿は異様だった。それだけでなく、やせ細った身体は、煮干の魚のようなイメージを与えた。

枯れ枝のような腕で、もう一度双眼鏡を覗き込み、獲物を確認する。

「再生能力と、ちょっとした身体能力強化か、ゴキブリのようにしぶといかもしれん」

双眼鏡を持つ腕が一気に膨れ上がった。それは腕にとどまらず、全身に広がった。

「さて……どうやって殺そうか、殴って？ 握って？ 押しつぶして？ 千切って？ どちらにしろ、ゴミはゴミ箱に捨てるのが一番だ」

枯れ枝のように痩せていた腕は、瞬く間に丸太のように太く、鋼のように強靱になった。胸板も分厚くなり、両足もはっきり分かるくらい発達した筋肉がうかがえた。元は160センチくらいだった身長も、180センチ近くまで大きくなった。

彼はアスファルトを踏みしめて、綾の後を追った。

誰かが自分の後を付けて来ている。

それに気づいた綾は、振り返ることはせずに、不自然にならない程度に人通りの少ない道を選ぶ。

その行き先は山。自分の命を自分で捨てた場所。そして生まれ変わった場所であり、始まりの場所。

森から漂ってくる不思議な香りの中に感じる、微かな臭い。それが後方から風に乗って漂ってくるのを、綾は感じた。

「忘れない……この臭い。腐ったような、濁ったような、おぞましい臭い。こんなに早く会えるなんて思わなかったわ、まさか一日も立たない内に向こうからやって来るなんて……」

風に混ざる臭いが強くなってきている。思い出すのも嫌な、あの者達の臭いに、綾は奥歯をかみ締めた。

「必ず……あいつらを殺す。喜一と同じように胸に風穴を開けてやる」

雨に濡れたアスファルト、水溜りに映った映像を裸足で壊す。

だが、本当に殺していいのだろうか？

綾の心に、僅かな迷いが生まれた。

仮に今追いかけてくる奴を殺せば、喜一の無念を少しでも晴らせるだろう。

だが、それだけでは駄目だ。

「どうにかして、後ろの奴から情報を聞きださなければ駄目ね」

亮一と名乗っていた男。そいつの情報を手に入れなければならない。そうするためには、どうすればいいか。

街並みも変わり、閑静な住宅街を抜け、一ヶ月前に綾が通った林道を進む。

「一ヶ月前は半日かかったけど、実際はこんなに近いのね」

もしかすると、山の中を彷徨った時間が長いだけで、道路に出からは短かったのだろうか？

考えても意味がない、綾は早々に切り捨てた。

少しずつ、生い茂る木々が濃密になるにしたがって、道路の角度がきつくなってきた。

かまわず、綾はどんどん上っていった。後を付いてくる何者かも、一定の距離で近づいてきているのが分かった。

そうして上っていくと、大きな広場にたどり着いた。大きな時計塔と公衆トイレと自動販売機、それと、いくつかのベンチが置かれた、文字通りの休憩所だった。

ここがいい、ここなら邪魔も入らない、誰にも見られない。

時計は、深夜の2時30分を回っていた。

広場の真ん中で立ち止まり、今上ってきた道路を振り返った。

そこには男が立っていた。鋼のような胸板、丸太のような腕、発達した太もも、どう見ても普通の男ではなかった。

「先に言っておくが、なにか遺言はないか？」

男は首を鳴らして、ゆっくりと綾に歩み寄る。綾は不敵な笑みで答えた。

「私の勘違いなら謝る、なぜ私の後を付けたのかしら？」

「理由は単純、お前を殺せと命令が出たからだ。目撃者は消せというのが俺達の鉄則なんだ」

「どうして喜一を殺したの？」

「喜一ってというのが、誰かは知らんが、お前と一緒にいた男のことか？ そいつなら、麻薬の売人だったから殺したただけ。生きていても意味がない男だと組織で決まったからな。俺達はこれでも正義の組織なんだよ」

「生きるために薬を売るしかなかったとしても？」

「知ったことではない。薬を売っているだけで悪だ。クズを生かしていても、クズ以外になることはない。私達に殺されただけ、感謝してほしいくらいだ」

綾は拳を握り締めた。体中に怒りと力が湧き上がってくる。

「最後に質問。あんたたちは何者？」

「私達は弱き人達のために戦う、正義のための組織だ。ゴミはゴミ箱に捨てる、それが私達の仕事だよ。さて、それではお別れだ」

綾の前に立った男は、大きく腕を掲げ、振り下ろした。

綾は避けようとしなかった。

丸太のような腕から、風を切って振り下ろされた筋肉の弾丸。

ぐちゃ、ベキリ、肉をすり潰すような音を立てて、綾の身体はボールのようにアスファルトを転がった。

痛い……痛いなあ……さつき足を折ったときよりも痛い……。

痛む頬を押さえようと思ったけど、その腕も折れていることに気づいた綾は、内心苦笑した。

顎を粉々に碎かれ、人形のようにアスファルトに横たわって、綾は夜空を見上げた。

そういえば、喜一と会ったときもこんな夜だったっけ。喜一の間抜けな笑顔が胸の奥に広がった。

男は倒れた綾に近づき、綾の頭を掴んで持ち上げた。

首が痛いわ、女の子の頭を掴まないでよ。綾は男を睨み付けた。

男と綾の視線が重なり合う。しかし、男はまったく躊躇せず、綾の身体をアスファルトに叩き捨てた。

首の骨が砕け、肋骨が折れ、内臓を傷つける。

叩きつける音は、濡れたタオルを叩きつけるような音に似ていた。アスファルトに横たわっている綾を、ゴミか何かのように蹴りつけ、踏みつける。その顔は愉悦に歪んでいた。

「ははは！ バカが！ ゴミが！」

バカ、ゴミ、さつきからそればかりね。もう少し、悪口の引き出しを持っていないの？ 漫画の三下みたいよ。

それに、気づいていないのかしら？

私がこっそりと重要な器官を瞬時に再生させていることに……気づいていないでしょうね。

ぐちゃり、ぐちゃり、繰り出される足が、綾を痛めつける。

「ゴミはゴミらしくドブに転がってればいいんだよ！」

それじゃあ、女の子を蹴っているあんたは？

言っても無駄か……こいつ、なんか相手を殺すこと自体、とても楽しんでるみたいだし。というか、いつまでも蹴るんじゃないわよ。喋ることはできないけど、しっかり痛みは感じているのよ。分かっている？

広がっていく血の海、それが男の靴を汚していく。

「私達は正義だ！ お前らみたいなクズを正義の名の下に殺すのだ！」

面白い考え……その正義は誰が決めているの？

まさか自分達で決めているのなら、お腹抱えて笑ってあげるわ。自分で決めた正義を誰かに押し付けるなんて、どこのヒーローよ。正義ってバカみたいに繰り返すけど、どこからみても、悪の手先に見えないわよ。

男は蹴るのを止め、軽蔑の眼差しを綾に向けた。

「こんな女が私達の仲間になる？ 麻薬を売ることを容認した女を？」

綾の周りをぐるぐる回る。一歩足を踏み出すたびに、ぴちゃり、ぴちゃり、ぴちゃりと血が飛び散る。

そうしなくても生きていけるあなたは恵まれているのでしょうか。それに、たとえ仲間に誘われてもあなた達とは仲良くやっていけるとは思えないわ。

「私達、誉ある選ばれた正義が、このような女と同列？ ふざけるな！ 生まれ落ちたとき、既に私達は選ばれたのだ！」

選ばれた選ばれた、うるさいな。あんたがどれくらい偉いか知らないけど、それで誰かを殺していい理由にならないと思うけど。

「アリス様も、こんなやつらに情けをかけるなど、甘いことを……」
「アリス様……か。様ってことは、この人達は何かの組織に属しているかもしれない……この人はいつまで演説を続けるつもりかしら？」

どうせなら、他の人達の情報とか漏らしなさいよ。こっちは痛いのを我慢しているんだから。

「……まあいい………そういえば、この女は自己修復能力があると聞いていたが……いつまで経っても回復する素振りをみせないな……。もしかしたら、こいつは自分の力を使いこなせていないのか？」

綾は思わず身体を震わせた。けれども、肉体が受けたダメージが酷すぎて、身体はピクリとも動かなかった。不幸中の幸いだ。

見られていた？ でも、この口振りからすると、傷を治すところを見ていたのは別の人みたいね。だったら、今すぐ傷を治してしまつたら疑われてしまつかもしれないわ。

できる限り弱そうに、できる限り普通の女の子のように……下手に応援を呼ばれたら、後々厄介なことになる。

そう考え、傷の再生スピードを弱めようとしたとき。

「遅かったか」

自分を痛めつけた男とは別の、綾にとって聞き覚えのある声が割り込んだ。

一際強く、心臓が鼓動したのが分かった。

この声……忘れない、こいつは喜一を！

「なんだ、亮一か。邪魔するなよ……正義を執行しているところだ」

「正義……ね、俺には難しいことなんて分らないけどさ、さっさと楽にしてやれ」

「それが聞いてくれよ、この女、まともに能力が使えないみたいだ。どうやら、こいつが自己修復能力を持っているというより、あの男がなんらかの治癒能力を持っていたみたいだ」

血溜まりの中、綾はうつ伏せになったまま黙って会話を聞いた。会話からすると、こいつら、普通の人間じゃないみたいね。もしかすると、私と同じものなのかもしれない。そうだったら、1対2は厳しいわ。

服を力モフラージユにして、少しずつ胴体を再生していく。体外

に排出された血液等はどうしようもないので、体内で生成する。

「そうか……どうりで。今さっき、テレビのニュースがあつてなあの男の事件が報道されていたんだ」

「それがどうした。人通りが少ないとはいえ、死体が一つ転がっていたら事件にもなる。マスコミが嗅ぎつけてもおかしくないだろ」

気づかれないように目を瞑り、目に入った血も全て吸収して体内に戻す。

あら？　そういえば私、全然呼吸していないけど、大丈夫かしら

……大丈夫みたいね。つくづくいいかげんな身体。

「そのニュースだと、男の死体は胴体がすっかり消失していると報道された。お前の話からすると、女の子に能力があるわけではなく男の方だったみたいだな。たぶん、自分を代償にして、他者を治癒する能力者だ」

「今となつては関係ない話だ……どっちにしろ、この女がああ男の罪を容認していたのも事実だ。目撃者は消す、悪を滅ぼす、それだけだ」

「……いいさ。俺は確かに伝えた、後、もうそいつは死んでいと思うぞ」

「分かつている。最後にもう一度やるだけだ。こんなやつが人間と同じ顔をしているだけで虫唾が走る」

「……いい趣味しているよ、あんた」

亮一の身体が淡く発光し、そして音もなく姿を消した。

「ふん、うるさいやつだ」

男は頭をガシガシと掻き毟り、綾の元へ近づいていった。先ほどのような歪んだ笑みではなく、面倒くさそうな顔をして。

「……よく考えたら、亮一に待ってもらえばよかったか」

待ってもらえばよかった？　ということは、亮一って男は、もうここにはいないわけね。

決断は早かった。瞬時に見た目には分からない程度に、むき出しの四肢を再生していく。

しかし、内心、綾は焦っていた。

度重なる出血と再生を繰り返したことによって、強い倦怠感、空腹感が肉体を蝕んでいたからだ。

予想以上にダメージが大きい……今の私では、あいつらと正面から戦っても、勝ち目は薄い。それに、あいつらは私をどうやって見つけたの？ 仮にこの男をここで倒したとしても、またすぐに追っ手を差し向けるかもしれない。

それでは駄目。

あいつらからの追手を失くすためには、どうにかして、自分が死んだということをアピールしないといけない。

だけど、どうやって？

今まで我慢した分、3倍にしてお返ししてやらねば、腹の虫が治まらない。

けれど、今それを行ったら、後々面倒になる。

綾の葛藤をよそに、男は綾の横に立った。

綾の頭を掴んで持ち上げ、最初のように、大きく腕を掲げ、弾丸のように振り下ろした。

男の拳が綾の顔を打ち抜き、綾の身体はアスファルトを滑るように転がった。

「さて……帰るか」

男は小さく欠伸をして、道路を下りていった。後姿が暗い道路に小さくなっていき、ついに見えなくなった。

誰もいなくなった広場で、頭がなくなった綾の身体が静かに動き出した。

首から肉が盛り上がった。頭があった部分に大きな肉の塊ができ、次第に小さく、形付けられていく。数秒もすると、そこに綾の顔が再生された。

「……………どうやら行ったみたいね。これからどうしようかな」

男の姿が見えなくなり、臭いも感じなくなってから、綾は身体の再生を始めた。首元から順に治していき、ものの数秒で全ての怪我

を傷一つ残さずに治し終えた。

途端、はつきりと自覚してしまう飢餓感と倦怠感。

「疲れた……本当に疲れた……」

重い身体を動かして、気合でベンチまで身体を持つていく。

崩れ落ちるようにベンチに腰を下ろし、そのまま横に倒れた。す

ーっと意識が黒く、染まっていた。

いつからだろう、私が嫌われるようになったのは。

いつからだろう、私が姉と比べられるようになったのは。

いつからだろう、両親が私に見向きもしなくなったのは。

いつからだろう、誰も私に見向きしなくなったのは。

どうして自分はこうなってしまったのだろうか、そんなことを考えた。

綾の眼前に浮かんでは消えていく思い出。辛かったり、楽しかったり、悲しかったり、その形は様々。

そして次々に湧いてくる恨み、怒り、悲しみ、絶望。過去を思い返せば思い返すほど、それらは強くなっていた。

目を瞑っているのに、鮮明に映し出される悪夢。綾は視線を逸らそうと思ったが、どうしてか出来なかった。

ふと、一つの映像が綾の前に止まった。

それは綾が、まだ小さいときの映像。親戚同士で集まったときの思い出。

思い出の中の叔父が言う。

『本当、お姉ちゃんは賢い子だ』

うるさい。

思い出の中の叔母が言う。

『まだ小学生なのに、もう中学生の勉強をしているのね』
うるさい。

思い出の中の父が言う。

『綾とは違って美人になるぞ』
うるさい。

思い出の中の母が言う。

『どうしてあなたはこんなに出来が悪いのかしら』
うるさい。

思い出の中の先生が言う。

『姉とは違って、こんなことも出来ないんだな』
うるさい。

思い出の中のクラスメイト達が言う。

『もしかして、血が繋がっていないんじゃないの?』
うるさい。

思い出の中の初恋の人が言う。

『お前じゃなくて、姉に用があるんだ』
うるさい。

思い出の中の皆が言う。

『お前なんて生まれて来なければ良かった』
うるさい!

目の前の映像から逃げたい。そう思った綾は、映像に拳を叩き込んだ。

ビシリと映像にヒビが入り、あっけなく碎け散った。

そして、また数え切れないくらいの思い出が浮かんでは消え、浮かんでは消えていく。

じわっと、目尻が熱くなり、涙が視界をばやけさせていく。

あわてて涙を拭う。けれども、後から後から出てくるため、いくら拭いても拭いきれない。

「ぐっ、えぐ、えう」

嗚咽が漏れる。綾は涙を堪えられなかった。

「えぐ、えぐ、ふええ、ふえええ〜ん」

ついには、幼子のように声を張り上げて泣くことしか出来なくな

った。

誰も居ない場所で、綾は一人涙を流し続けた。眼前に広がる映像には、綾の姿は無い。あれも、これも、どれも、全て姉に対する賛美と、綾に対する侮蔑しかない。

いつからだろう、私が嫌われるようになったのは。

いつからだろう、私が姉と比べられるようになったのは。

いつからだろう、両親が私に見向きもなくなったのは。

いつからだろう、誰も私に見向きしなくなったのは。

もしかしたら、自分はこうやって泣き続けるために生まれてきたのかもしれない。

一人寂しく、誰にも知られることなく、誰にも見向きもされず、泣き続けるために、生まれてきたのかもしれない。

その考えに思い至った瞬間、綾の眼前には映像ではなく、一つの光が現れた。

その光はとても温かく、綾の心を優しく照らした。

「喜一」

綾は手を伸ばし、その光を抱きしめた。

「喜一、喜一、喜一」

名前を呼ぶたびに、光は答えるように鼓動した。

綾は嬉しくなって、何度も名前を呼んだ。もう、涙は止まっていた。

「喜一、喜一、喜一、喜一」

その度に、光は答えてくれた。嬉しかった。

こんな自分でも愛してくれている人がいることを。

こんな自分でも命がけで守ってくれる人がいることを。

こんな自分でも、まだ他人をこんなに愛せることを。

それらが嬉しくて、綾は兄の名前を呼び続けた。

誰かに呼ばれたような気がした綾は目を開けた。

「ここって……どこ？」

何時の間にか光は消え、綾は立ち尽くしていた。

真っ黒な暗闇が四方を埋め尽くし、一寸先すら見通すことが出来ないくらいの暗黒。音もなく、静かに綾の言葉が広がり、消えていった。

「ここって前にも……て、というか私、また裸なのね」

呆れたように自分の裸身を見下ろし、ため息をついた。

むん、と腕を組んで、虚空を睨んだ。

「こそこそ隠れてないで出てきなさい。どうせどこかに居るんでしょう？ あんたに聞きたいことはいっぱいあるから、とりあえず出てきなさい」

綾の声が暗闇に広がる。

それが呼びかけになったのか、綾の眼前に白い光が突如出現して、それがどんどん勢いを増していく。

光は楕円形に広がり、そこから四本、細い光が伸びた。それが少しずつ形作られ、手足の輪郭が見えてくる。みるみる光は人間の形になり、指が生え、頭が生え、顔のパーツが盛り上がり、身体に凹凸が出来る。

そして綾にとって見慣れた姿になった。

「わ……私……？」

綾と同じ顔をした、彼女は微笑んだ。

「そうよ、私は綾。綾は私。けれども、私は私で、綾は綾よ」

彼女はそう言うと言を鳴らした。乾いた音が暗闇に広がっていった。

その瞬間、暗闇に変化が始まった。

泥が崩れ落ちるように暗闇が消え、消えていった場所から新しく景色が作られていく。

一分もしないうちに、世界の変化は終わりを告げた。

「……………どういうこと……………この光景って……………」

綾は辺りを見回した。とても見覚えのある風景だった。

辺りを覆う木々、一本の大きな木が自分を見下ろし、先ほどまで感じなかった土の感触を足裏に感じる。そして……………。

また……………見れたんだ。

はるか空を見上げれば、そこに月が浮かんでいた。自らを白銀に染め上げる月の光、全てを優しく包み込む母なる夜の闇が、例えばうもないくらい美しい。

「喜んでもらえて嬉しい」

綾は視線を下げ、自分と同じ顔をしたものに向けた。

彼女は、ニコリと笑みを浮かべた。

「とりあえず、立ち話もなんだから」

「……………そうね」

彼女は、大きな木の根元に背中を預けて座った。

ちよい、ちよい、手招きで綾を呼ぶ。断る理由もないので、その隣に座った。

「本当はもっと貴方と話したいけど、私はここに長く存在できないの。でも、ずっと綾の中にいるから、話し足りないことがあったらいつでも呼んでね」

彼女は頭を押さえて、心で呼んでくれればすぐに分かるからと言った。

彼女の言葉に、綾は眉間に皺を寄せて彼女を睨んだ。

「なんとなくそうじゃないかと思っていたわ。私が聞きたいのはそれじゃなくて、どうして私を呼んだかということよ」

しかし、彼女は綾の質問に答えなかった。

「綾はあの人達を探し出してどうするの？」

ポツリと溢した問いかけが、綾の表情を凍りつかせ、言葉の行き先を封じてしまった。かまわず彼女は話を続ける。

「今からでも遅くないわ。警察に行って、保護してもらえばあの人達もそう簡単には……………それに、綾に危険なことはしてほしくない！」

彼女は綾の正面に回り、両肩に手を掛けて哀願した。綾と彼女の視線が交差する。

「お願い……綾……」

「……………無理よ」

綾は小さくため息を付いた。視線を2〜3度、右に左に逸らしてから、彼女と再び視線を合わせる。

「今からでも遅くない？ 逆よ、今からでは遅すぎるの」

綾はその願いを即決で断った。

「あの事件は全国に報道されている……まだ一ヶ月程度しか経っていないから、今警察に行ったらあつという間に日本中に報道されてしまうわ。そうなったら、あいつらに私の存在を教えることになる」「でも……綾の家族に守ってもらえれば」「守ってくれると思う？ ずっと私の中にいたってことだから、それくらい検討が付くでしょうに」

「……………」

彼女は否定できなかった。

「……それにね」

両肩に寄せられた彼女の両手をそつと外し、彼女の手を包み込むように手を重ねる。触れた彼女の手は温かいものだった。

「修学旅行のあの日、学校に向かう途中で私に話しかけたのは……語りかけたのはあんたでしょう？」

「……………」

「あのとき、あんたはたしかこう言ったわ。あなたは孤独を味わうかもしれないってね。あんたのいうことは今更なのよ」

「……………」

「そして、あんたが行った結果が、今あんたの目の前にいる私なのよ」

彼女は俯いて何も言わなかった。それは無言の肯定の証だった。「私の身体は元々そうだったのかもしれない。けれど、切っ掛けを作ったのはあんた」

胸のうちから湧き出てくる言葉を、止めることはできなかった。
「私の身体を作り変えたのもあんた。ご飯が食べられなくなったのもあんたが原因。人間を辞めることになったのも、あんたが原因。そして何より……」

ギョツと手の平の中の、小さな手を握り締める。

「喜一を食べることになったのも、あんたが原因」

その瞬間、微かに、微かに、彼女の両手は震えた。

「……………恨んでいるの？」

数秒の沈黙の後、彼女は俯いたまま静かに綾に聞いた。その言葉にはどんな思いが込められているのか、それは綾には分からなかった。

だから、綾は正直に自分の思いを包み隠さず話すことにした、話さなければならぬと思った。

「恨んでいないわ」

その綾の答えに、彼女は驚いて顔を上げた。目じりに涙が溜まっていた。

綾は握った手から力を抜き、優しく握る。彼女も優しく握り返してきた。

「だって、そのおかげで私は喜一に出会えた」

彼女は呆然と綾を見つめた。自然と、綾は微笑みでお返しする。

「あんたがいたおかげで、私はかけがえのない人に出会えた。世界でたった一人の……最高の兄に出会えた。だから私は恨んでいない。寧ろあんたに感謝しているわ」

綾は思い出していた。一ヶ月という短い時間ながら、とても充実した日々を。

今にして思う。私があの日、喜一に警戒心を抱けなかったのは、私のことを本当に心配していたからだということ。

たとえそれが死んだ妹の身代わりとしての行動だったとしても、私は満足だった。

私を想ってくれたのだから。

何かある度に出来の良い姉と比べられ、家でも学校でも必要とされず、同年代から見下された私を、必要としてくれたから。

最後は私を助けるために自分の命すら投げ出してくれた。だから今度は私が兄の為に命を賭けるのだ。

「力を貸して。私にもっと力を。あいつらに負けない絶対な力を」
あのと私に誓ったのだ。

鉄臭い血液と私の涙が混じりあったあの夜。

喉を通る生臭い臓物に喜びを感じると同時に絶望を感じたあの夜、降りそそぐ雨粒の中で、私は誓ったのだ。

「あいつらを……あの男を……私は！」

綾は叫んだ。そこには全く躊躇がなく、本気の思いが詰まっていた。

彼女は無言で綾の想いを聞いていた。握られた彼女の両手は凍りついたように動かない。

……いくばくかの時間が流れた。数秒か、はたまた数時間か、重苦しい空気が綾と彼女の間を流れた。

そして、彼女は諦めたようにため息を吐き、了承した。

「……いいわ、協力する。綾がそう決めたのなら、私は最後まで付いていくわ」

「……ありがとう……」

綾は万感の思いを込めて、礼を言った。彼女はそれを微笑みで返した

「こちらこそ……綾に嫌われなくて良かった……っと、もう時間ね」
言葉が終わると同時に、少しずつ彼女の後ろの景色が鮮明になり、その分彼女が薄れていく。

綾はあわてて彼女の両手を握り締めるけど、すぐに彼女の両手は完全に透明になって消えてしまった。それだけに止まらず、どんどん透明の部分が彼女の体を侵食していく。

「……行くのね？」

「ええ行くわ……ところで、意識が戻った後はどうするの？　ここ

はあの日の事件現場からそう遠くないから、事件にならないわけないわ。綾の言った通りなら、綾の死体がなくて事件が取り扱われないと、逆に不振に思われるんじゃない？」

彼女の意見は正しかった。確かに、綾の死体が発見され、事件が報道されなければ、綾を殺そうとした人達に綾が生きていると知らせるのと同じことだからだ。

その人達の目を掻い潜るには、一度綾を死んだことにしなければならぬ。そうしなければ、再び綾を狙ってくるかもしれないのだ。「それくらい、わかってるわ」

綾は、全身が透明になり、ほとんど霧みたいになってしまった彼女に向かって不敵に笑みを浮かべた。

「私に考えがあるの。まあ、たださえエネルギーが底を尽いているのに、そこに追い討ちをかけるような作戦だけだね」

「……作…戦？」

ポツリと彼女の声が僅かに響く。ついには、彼女の姿は完全に消えてしまった。

そして、ふわりと綾の身体が浮かび上がる。大木よりも高く、ゆっくりと上昇していく。綾の身体は月に向かってスピードを上げていく。

加速していく綾の身体は光の粒子に分解され、あっという間に消えた。

世界には、どこまでも広がる森林と、母なる光だけが残された。

第八話：奔走（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカニバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださるようお願いします。

ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています

第八話：奔走

大きな時計塔と公衆トイレと自動販売機、それと、いくつかのベンチが置かれた粗末な休憩所。虫の声も野犬の声もしない静かな場所だった。

辺りにはおびただしい量の血液が散乱していて、血液の海の中に綾は立っていた。服を脱ぎ捨て、下着を脱ぎ捨て、生まれたままの姿で立っていた。

綾は内心、今日はぜひぶん裸になることが多いわねと、場違いなことを思った。

音もなく通り過ぎていく夜風が、綾の頬をくすぐっていく。

「……いい風ね。早いうちに済ませちゃいましょうか」

綾は両目を閉じてダラリと身体の力を抜き、自然体になった。そして、大きく深呼吸をする。一回、二回、三回。

ゆっくりと閉じられた綾の目蓋が開かれ、中から赤い瞳が姿を現す。

「　　つぶ！」

綾は気合を込めて、右腕で左腕を引きちぎった。ブツブツと、嫌な音を立てて左腕はあっけなく身体から分離した。

途端、噴水のように噴出す血液。普通なら腕を失う激痛と失血で即死してもおかしくないものだが、綾には関係なかった。

左腕の激痛を堪え、意識を流れ出る血液に集中する。すると、身体から噴出した血液に変化が表れた。

地面にこぼれた血液に、白い点が浮かんた。すぐさまその白い点の数は増え続け、互いがくっ付き合い、一つの塊になっていく。

綾は意識を集中させ、体内の血液製造のスピードを加速させた。

塊はみるみる姿を変え、塊だと思った物は人間の少女の腹部だった。そこから伸びるように胸の部分が生え、四肢が生えていく。

ただし、首は生えなかった。なぜなら、本来なら綾の死体は顔面

を打ち抜かれ消失しているからだ。なので、肉体の数箇所をわざと穴を開けて再生させ、内臓もいくつか出血させた状態にした。

数分後、人間の少女と思いき死体が完成した。綾は脱ぎ捨てた自分の衣服を死体に着させた。全ての工程を終了させた綾は、大きく息をついて膝を付いた。

「はあ、はあ、はあ……どうにか形になった……お、おおお？」

作業を終了させた途端、とてつもない空腹が綾を襲った。今まで感じたことが無い程の、強い空腹感だった。

「こ、これは……空腹で死んでしまう。餓死してしまうわ……」

綾のお腹は恐竜の鳴き声を上げた。あまりの大音量に、綾はあわててお腹に両手を当てた。

「うっ……これは耐えられない」

綾は急いで頭の中にいる彼女に呼びかけた。彼女はすぐに返事を返した。

「一応、私の偽者を作った。前の自分の身体をイメージして作ったんだけど、これで警察を誤魔化せるかな？」

（大丈夫、ちゃんと誤魔化せるわ。作った偽者の身体は、以前の綾の遺伝子を偽造して作られているから、検査しても綾だと断定されるの）

綾は、ほっと息を吐いた。まず一つ目の不安要素が解消されたからだ。

「……そういえば、私っていきなりこんなもの作れたのだけど、なんでかな？　もしかして貴女が何かサポートしてくれたの？」

（人が呼吸の方法を意識せず覚えると同様、綾のその力も、初めから身体が覚えているのよ。だから私は何もサポートしていない、全ては綾自身の力よ。）

「へえ、ありがとう。とりあえず、話はこれで終わり。また気が向いたら話しましょう。今はお腹が空いて堪らない」

（食べなくても数週間は生きていられるけど、その分空腹が強くなるからね。できるなら、定期的に取り入れた方がいいわよ。それじ

「やあ、またね」

「それじゃあ、またね」

すつつ、と何かが頭の中から消えたような感覚を覚えた。きっと今のが、彼女なのだろう。

「適当な人を見つけて、早く食事を済ませないと……」

綾は山を降りることにした。ゆるやかに流れる夜風が綾の全身を撫でていく。

血溜りを抜け、アスファルトに血の足跡を残して傾斜を下る。足裏に触れていた血液がアスファルトに奪われていく感触。綾はそのとき、とても奇妙な感覚を覚えた。

ピタッと足を止めて、背後の偽者の死体へ振り返る。

「……………」

そこには、綾の衣服を身に着けた、物言わぬに肉の塊が転がっているだけだった。

ぐるぐる、ぐるぐる、ぐるぐる、綾の胸の中で、何かが渦巻いている。だが、綾にはそれが何か分からなかった。ただ、その何かは今まで大切だったもので、これからはいらないものである。それだけが理解できた。

数秒、綾は死体を見つめる。もちろん、死体は何の反応も示さなかった。

「……………はあ……………早く、誰か見つけないといけないわね。できるなら服も手に入るかな……………あまり注目を集めるわけにもいかないし、身体も洗わないと……………血でベトベト」

綾は踵を翻して歩を進めた。もう振り返ることはしなかった。

とりあえず、先に衣服から。そう考えた綾は、再び大型のショーツピングセンターを訪れた。最初に進入した屋上に着地したとき、既に空は僅かながら朝の兆しを見せ始めていた。

急がないと、店員が店を訪れてしまう。それまでに、必要な物は

全て手に入れなくてはいけない。

そう思った綾は、壊していた入り口から素早く中に進入し、これまた壊してある鉄製の入り口を通して中に進入する。

手早く下着売り場を目指す。途中、タオルを何枚か取って、身体に付着していた血痕を拭い取る。固まってボロボロになっていた血痕は、面白いくらいに簡単に拭い取れた。

でも、血ってなかなか汚れが取れないものではなかったか？　そう疑問を感じた綾だったが、気にしないことにした。気にしても意味がないことだったからだ。

運よく、同じ下着とワンピース、それに、かわいらしい靴を手に入れて、ショッピングセンターを後にしたとき、空はかなり明るくなっていた。

こんどは着地に気をつけ、何度か減速をかけて地面に着地した。そのために、何箇所か建物に傷が残ってしまう結果になった。

「こんなにでかいのだから、だれも気づかないでしょう」

綾は足早にショッピングセンターを後にした。

衣服を手に入れ、とりあえず注目を浴びることはなくなった。

そして空腹という、もっとも重要な課題をどうクリアするのに、綾は誰を狙うか決めていた。

「まさか、助かるなんて思っていないでしょうね。私を知っているあんた達を逃がすことはしない。待っていないさい！」

恐竜のうめき声が辺りに響いた。綾はそっと、お腹を押さえた。

ある刑事達の会話、二（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカニバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださるようお願いします。

ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています

ある刑事達の会話、二

『……にて、小学生達の元気な声が賑わい、会場は大盛況でした。

……次のニュースです。4日前、野木山近くの街道にて、女性の死体が発見された事件の続報が入りました。つい今しがた入りました情報によりますと、発見された死体は、一ヶ月ほど前に起きた、ホテル少年少女無差別殺人にて行方不明になっていた高田綾さん（当時15歳）のものと判明しました。』

テレビの中のニュースキャスターは、悲痛そうに原文を読み上げていた。その様子を、大原と前田は無表情に眺めた。

テーブルにはいくつかの写真付の書類が乱雑されていた。ソファに互いに座り大原と前田はテレビを見ながらそれらに目を通していた。

二人が居る部屋には他に人はいない。テレビから出る声と、アナログ時計の秒針の音が静かな空気に圧力をかけた。

妙に認知り顔で事件の悲痛さと異常性を話している犯罪心理学の権威とか名乗っている太った男を見て、思わず大原は愚痴を言いたくなった。

そこまで分かっているならさっさと犯人の場所を教えてくれ、と『本当に惨い事件ですね。ただ誘拐して殺害するだけでなく、わざわざ遺体の首を切断するなんて……未だ犯人が見付かっていないそうですね、本当に警察には頑張っしてほしいものです』

太った男は横目に視線を向けた。横に座っていた小綺麗な女性キャスターが、太った男の意見に同意した。

『本当です。私も被害にあった人も同じ女性なので、他人事とは思えません。幸いにも、被害にあって生きていた学生達は全員、無事に病院を退院なさったそうでなによりです』

『けれども、その学生達にもまだまだ心のケアは必要でしょう。何でも、退院した生徒の何人かは、ふらふらと行方をくまったりし

たらしいですからね』

『ええ！ それは大丈夫なのですか！？』

女性キャスターは、驚いたように太った男に顔を向けた。

大原はそれを白々しく思った。先に原文を読んだりしてリハーサルをしているはずなので、キャスターの行動が妙に嘘くさく思えたのだ。

太った男はよくぞ聞いてくれましたと腹を揺すって質問に答えた。『今、警察で行方を追っているらしいのですが、まだ見付かっていないそうです。おそらく、夢遊病に近い何かの心の病を患ってしまったのでしょう。行方をくらませた生徒達も、多分何でそんなことをしているのか分かっていないはずです。結局のところ、早く警察に見つけてもらわないと危険かもしれません。もしかしたら、自傷行為に走る可能性もあるのでは』

最後まで見るつもりはないので、大原はリモコンでテレビの電源を切った。それでも、何も映さなくなったテレビをジッと見つめた。同時に、テーブルを挟んで隣に座ってテレビを見ていた前田も、苦肉を噛み潰した表情で黒くなったテレビ画面を見つめていた。

一瞬、空気が無音になったが、先に沈黙を破ったのは前田だった。『まだマスコミには伝わっていないみたいですね』

ポツリと零した前田の言葉に、返事をしてやろうか迷った大原だったが、返事を返すことにした。

『もし伝わっていたらこんなものじゃないだろうな。少なくとも、殆どのニュース番組はこれを取り上げるだろ』

『確かにそうですね』

大原の率直な意見に、前田は苦笑した。

大原はチラリと視線をテーブルに戻し、書類を一枚手に取った。そこには行方不明リストの人名が記載されていた。

前田は大原の持っている書類に目をやると、肩をすくめて天井を仰いだ。

『行方が分からない生徒達の内、死体で帰ってきていない子供は後

一人だけ……か。まるで出来の悪いミステリー小説みたいですね」

口に出して同意はしなかったが、内心もつとめだと大原は思った。なので、大原も疑問に思っていることを前田に言った。

「しかも戻ってきた生徒達は全員肉体の大部分が破損、または欠損だ。おそらく犯人が持ち去ったであろう遺体の一部は、現在でも発見されていないと来ている。ミステリーにホラーにスプラッタ、怖いもの無しだな」

「笑えない話ですね……それはそうと、残った行方不明最後の一人は、まだ足取りは掴めていないのですか？」

前田の質問に、大原は疲れたようにため息を吐いた。

「残念ながらまだ何も。そっちの方はどうだ？ 娘の首無し死体が見付かって、ずいぶんと親御さんは取り乱しただろ？」

大原はテーブルに残っている残りの資料を手にとっていく。前田もそれを手伝った。

「それが……嬉しそうでしたよ」

ピタッと大原の手が止まった。

「……………どういことだ、前田？」

前田は大原に構わず、一枚一枚折り目がつかないよう慎重に、丁寧に資料を集めて纏めていく。

「どうもこうもありませんよ」

資料を全て集めた前田はソファから立ち上がると、大原に指で入り口ドアを指し示した。

「とりあえず残った行方不明者も捜さないといけません。詳しい話は車の中しましょう」

大原はその提案に同意し、ソファから重い腰を上げた。

車で市内、県外を散策すること数時間。既に太陽は地平線に半分姿を隠し、世界を赤く染め上げていた。大原は、それがまるで身体にまわりつくように感じた。

何十回目かの信号で止まったとき、道行く歩道路に視線を向けていた大原に、前田はポツリと話した。

「そつえば、あのときもこんな夕陽でしたね」

前田の突然の問いかけに、大原は振り向いた。前田は視線を前から外すことなく、そのまま話を続けた。

「ホテル事件のときですよ。あの時も、現場から林道を抜けるとき、こんな夕陽でしたねって話なんですけどね」

「そつえば、そんなこともあったな」

信号が青に変わり、二人を乗せた車は市街地を走りだす。その横を、何台も車が通っていった。歩道を進む人々は、寒そうに身体を縮こませていた。

「あの時よりも気温が下がって寒いですし、事態も悪化している……という点を除けば、前と一緒にですね」

「……たしかにそうだな。ところで、そろそろ話してもらいたいのだが」

大原の言葉に、前田は一瞬黙ったが、すぐに口を開いた。

「……ニュースになっていた、高田綾の自宅に行きました。大原さんが知っている通り、遺体解剖の許可を貰うためにです。それなりに覚悟していたんですよ。なんせ、娘さんの遺体を解剖するのですから」

「前置きはいいい。結局親御さんの反応はどうだったんだ？」

「はつきり言えば、好きにしてください、だそうです。遠まわしに言えば、事件解決のために協力します、とのことです。私的にはどうでもいいと聞こえましたけど」

それっきり、前田は口を閉ざした。車内には窓の向こうに流れる空気の音と、静かなエンジン音が響いた。

大原は思った。

こういう時、頭の回転が速い奴は何か上手いことを言って空気を和ましたり、気の利いたジョークでも言ったりするのだろう。しかし、大原にはそんな要領など持ち合わせてなく、無言でしか答えら

れなかった。

重苦しい空気の中、カチッと車内に音が鳴った。途端、車前方のライトが点灯して、前方を明るく照らした。

大原は顔を窓に寄せて、外を見た。

「……いつの間にか日が落ちていたみたいだな」

「ええ、私も今気づきました。これじゃあ、警察官失格ですね」

「それだったら、気づかなかった俺も……ん？」

大原は頬をガラスにくつつけて、薄暗い外をじっと見つめた。

「どうしたんです？」

「……いや、な。こんな季節に素肌が見える寒そうなワンピースを来た女の子が歩いていたのが見えたんだが……」

「この時期にワンピース？ 女の子が？ 大原さん……もしかして溜まっているんですか？」

可笑しそうに前田は笑った。大原も苦笑した。

「バカを言うな……ただの見間違いだ」

「だと思えますよ」

そして、再び車内に沈黙が訪れた。

大原は、振り返った。かなり後方に小さく見える後続車しか大原の目には映らず、歩道にも、道路にも、女の子は居なかった。

第九話：決着（前書き）

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

また、この話にはカニバリズム描写、表現（グロテスク描写、表現）があります。

血や、ホラーなどに強い嫌悪感がある方は、閲覧を遠慮くださるようお願いします。

ジャンルを変更しました。辛口の批評をお待ちしています

第九話：決着

目覚めたとき桜井は、そこが何処なのか検討が付かなかった。

なぜならば、目覚める前の彼女の記憶にあるものは、買い物から帰宅している途中だったのだ。見慣れた道を通って、見慣れた家々を通り、いつも通り家に帰るところだったのだ。

いつそこに来たのかも分からない。それどころか、どうしてここにいるのかすら、桜井には理解できなかった。ふっと気づいたとき、回りの景色が一変してしまうという事態に、桜井の頭はそれらの疑問を思考することを放棄してしまった。

鉛のように重く感じる身体を動かし、大きな木に背中を預ける。ここで初めて、自分が木に背中を預けていることに思い至った。

周りを取り囲む木々、目の前でうずくまっている肌の何か、その周りで転がっている丸い物。

上手く動かない頭を、ぼんやりとした意識で操縦して、目の前の景色を眺めた。

その間、ジルジル水をすすするような音と、硬い何かを噛み砕くような音が辺りに響く。どうしてか、その音を聞いていると、とても不安を感じた。

数秒後、肌の色のは何かは小柄な人間だと理解できる程度まで意識が回復した。

そして、周りに転がっている丸い物の正体も同時に理解できた。理解できてしまった。

「……………ひ……………いい……………ひ……………いいいいいい!？」

理解した瞬間、桜井の喉は声を出すことを放棄した。喉から掠れた声が絞り出され、蚊の鳴くような悲鳴だった。

立ち上がって逃げようと思えるよりも早く、下半身は主を裏切ってしまう。

桜井は恐怖のあまり腰を抜かしてしまったのだ。

必死に力の入らない両足に力を込めるが、全く言うことを聞かない。せめて手で這って逃げようとするも、桜井の両手は意味もなく地面を掻き毟るだけだった。

そして、幸運は訪れなかった。

「……あら、起きたの？」

気配に気づいて、小柄な人間……綾は、桜井へ振り返った。

綾はショーツ以外着ていなかった。少女らしく柔らかに伸びた手足とほんの僅かにくびれた腰周り、むき出しになった胸、ほとんど裸であるという点を除けば、どこにでもいる少女だった。

ただし、その身体が血まみれになっていなければ。

ただし、綾の左手に、首から下が無い人間の頭部が握られていなければ。

元は女性だったのだろう。綾は長い髪を無造作に掴み、だらりと垂れ下げていた。無くなった首から、血が流れ落ち、地面に吸い込まれていった。

首だけになった遺体を見て、桜井は声にならない悲鳴を上げた。

「つ、あ……あああ！！」

「あ、これ？ 驚いた？ あんた達仲良かったもんね……友達がこんな姿になって悲しい？ それとも嬉しい？」

それは、首だけになった宮北の姿だった。

目は恐怖で見開かれ、開いた口から舌が垂れ下がり、見るものに恐怖を与えるオブジェに変わり果てていた。

親友の変わり果てた姿を見て、桜井は恐怖のあまり綾から視線を外した。

それがさらに桜井に恐怖を与える結果になった。

「……………みんな……………」

綾の回りに転がっている死体。一人一人、全て見覚えのある顔だった。かつてあのホテルで、あの部屋で、一緒に居た人達なのだから。

皆が皆、出来の悪い人形になっていた。

あるものは腰が正反対を向いて、腹部が消失している者。

あるものは手足が引きちぎられ、胴体が無造作に捨てられている者。

共通していることは、全員が殺された死体であること。それら全て、綾が行ったということ、それらの死体には、一人残らず首から上が無くなっているということ。

「やっぱり食事って大切だね。よく動いて、よく食べる。当たり前のことだけど、とっても素晴らしいことなんだよね」

綾は持っていた宮北の首を放り捨て、一步、また一步、桜井に近寄る。

桜井はその様子を黙って見つめた。逃げようと思っても、桜井の身体は凍りついたみたいに指一本動かさなかった。

「知ってる？ 人間って牛とか豚とかと一緒に、場所によって全然味が違うんだ。筋肉も、内臓も、血液も、人それぞれで全部違う」

まるで明日の天気話をしているかのように、気さくに綾の話は続く。

桜井は体中の震えをとめることができなかった。顎は壊れたように規則的に歯と歯を打ち鳴らし、体内から漏れ出た尿が辺りに異臭を放った。

綾が一步近づいてくる。その分、自分に死が近づいてきていると、桜井は麻痺した頭で考えていた。

きっと、おそらく、絶対、確実に彼女に殺される。

四肢を引きちぎられて死ぬのだろうか。

それとも、首をもがれて死ぬのだろうか。

それとも、あの男子のように、頭を吹き飛ばされて死ぬのだろうか。

「でも、やっぱり一番美味しかったのは喜一だわ。きっと……うん、これからも、喜一以上の者に出会えることはないでしょうね」

どちらにしろ、桜井は心のどこかで理解していた。

もう、好物のお菓子も、好きなアイドルの歌も、お気に入りのリ

ツプも、使えなくなるのだということ。

そして、桜井の前に綾は立った。不思議と、綾の身体からは血の臭いも死臭も、臭わなかった。

綾は右手を振りかぶって……止めた。

「最後に言っておくことない？ 遺言くらいなら聞いてあげないわけでもないわ」

「……た、た……たす……け……けて」

「そう、それが遺言ね。それじゃ、さようなら」

綾は振りかぶった右手を桜井の頬に張った。

ブチッと嫌な音を立てて、桜井の頭部が地面を転がった。

次いで、むき出しになった桜井の首から、噴水のように血が噴出した。噴出した血がどんどん桜井を汚していく。

綾はそれには目もくれず、地面に落ちた桜井の髪と、先ほど放り捨てた宮北の髪を掴んだ。

そして、桜井の背後にそびえ立つ大木に、視線を向けた。

「……………さよなら」

全てを見届けた大木に別れを告げ、綾は一人山を降りた。

首を適当な路地裏に捨てた綾は、一人歩いていた。

宮北を連れ去ってから3日、桜井の場合は半日。おそらく宮北の方は親が搜索願をだしているだろう。

なんとか彼らが自分のことを話す前に、始末できてよかった。綾は安心した。

おそらく、たとえ彼らの内の誰かが話したとしても、誰も信じなかっただろう。それに、話してしまったら確実に世間の視線は、彼らの首を絞める結果になる。

だが、万が一にも彼らが綾のことを話し、一人でも彼らの話を信じる者が表れた場合、それがどういふ事態を招くか綾には分らなかった。

だから、どんなに空腹が身体を蝕んでも、綾は真っ先に彼らの口を封じることを選んだ。陽炎のように頼りない可能性でも、摘み取っておきたかったからだ。

このとき、運命は綾に味方した。

一人目、二人目、一人ずつ、確実に始末していくことが出来たのだ。

一度でも見付かってしまえば終わり。綱渡りのような状況の中、綾は目的を達成していくことが出来た。

結果、首尾よくホテルの事件に遭遇した生徒達全員の口を塞ぐことができた綾は、ふう、と肩の力を抜いた。

「これでやっと自由に動くことができるようになったわ。下手にある事件のことを話されてしまったら、後々面倒なことになりそうなものね」

しかし、それでも綾のこれからの課題はまだまだ残っていた。

まず普通なら、住む所と、服と、食料と、当面の資金の確保が必要になる。

まず住む所はいらない。

綾の肉体は、食事さえしっかり取っていれば、睡眠を必要としない。綾はそのことを、ここ数日の内に知ることができた。

身体の汚れであり、人間が必ず出す体内の廃棄物である垢も、出なくなった。

どういう理屈でそうなっているかは知らない。綾の肌は常にお風呂上りみたいに滑らかで、乳液を塗っているみたいにしっとり潤い、うっすらと甘い匂いを放っていた。

おまけに身体に付着した血等の汚れも、皮膚表面から吸収されて跡形もなくなってしまう。氷点下の寒空の中でも全く辛く感じない綾にとって、住居を構えるということは、行動に制限を与えるだけだった。

次に、服。これは何かと必要になる。

食事の際、どう気をつけていても服や下着が血で汚れてしまうことがある。服を脱いで、パンツ一枚で食事を取っても、そうなることがある。

綾の身体自体はいくら血で汚れても数秒から数分で吸収されてしまったため、気にしなくていい。

だが、服には血の跡が残ってしまう。血は一度付いてしまうと、なかなか汚れと臭いが落ちない。

綾自身、喜一を食べたあの日から、羞恥心を感じることが無くなってしまうので、汚れてしまえば後は裸、でも構わなかった。もし、裸で街中を散歩する事態に陥っても、綾は恥ずかしいとは感じなかっただろう。

綾にとつて、他人とは全て餌でしかない。鳥や犬に裸を見られて羞恥心を覚える人がいないと同様、綾にとつてもはや人間とはその程度の認識だった。

だが、それでも綾は人間の脅威を重視していた。単体ではなく、群体で行動する彼らの底力の前では、たとえ綾でも勝ち目はないだろうと分かっていたからだ。

そのために、人間に注目されない程度に見た目を彼らと近づけなくてはいけない。

結果、服はどうしても必要になってしまったのだ。

次に食料だが、これはどうしようもない。

何人が殺して保管しておけば、綾は一度そう考えたが、すぐに諦めた。

なぜなら、死体の腐食の速さは予想以上に早いからだ。

当然だが、主が死んでしまうと体内の免疫細胞である白血球も死滅する。雑菌を殺す役目を担っていた白血球が機能しなくなると、人間の肉体は雑菌にとって最高の苗床に変わってしまう。結果、数日で人間の肉体は雑菌の塊になってしまうのだ。

いくら綾でも、腐臭を放ち始める人間を食べたいとは思えない。

そのとき、そのとき、臨機応変で行くしか方法は無くなっていた。最後に、当面の資金。これはどうにかして手に入れたい。

喜一を殺した人達を探すためには、どうしても金が必要になるからだ。

だが、現在綾は死人ということになっているので、バイト等をして金銭を稼ぐことはできない。それ以前に、連帯保証人になる相手がないので、仕事をする事ができない。

ならば、適当な人から金品を巻き上げて資金を稼ぐか、と聞かれれば綾は、はつきりと、否定しただろう。

綾が人を襲って捕食するのは、生きるため。それだけでなく、綾にとつての愛しの兄である喜一は、決して誰かを脅して金を取らなかったのも理由の一つだ。

といつても、綾が見ていないところで恐喝等もしていたかもしれない。

しかし綾の知る限りでは、非合法で許されない商売をしていたが、決して誰かを脅して金を稼ぐとはしなかったのだ。

もし綾が力づくで金を手に入れたとき、喜一がいたら頬を張り飛ばしてでも止めたかもしれない。そう思うと、綾は行動に移せなかった。

だから、金を手に入れるのなら、正当な報酬として手に入れたいと綾は思っている。けれども、それは不可能に近い。

ならば、捕食した人間から金品を奪うしかない。その考えに思い至ったとき、綾の心にどうしても納得できないものが残った。

綾は国道へ続く道をひたすら進んでいく。

横を何台も車が通り過ぎていき、その度に綾の身体をライトが照らす。

既に陽は落ち、辺りは薄暗く、静かになっていた。たまにすれ違う通行人も、今は全く見かけなくなつた。

綾の頭は、新しい街に行った後の見の振り方をどうするかということ、いっぱいになっていた。

「とりあえず食事と、服には目を瞑るとして、問題は資金だわ。あいつらの情報を集めるにしても、どうしても資金が必要になる。どうにかしてお金を稼ぐ方法を見つけないといけないわ」

恐喝等の行いで金を稼ぎたくない綾にとって、それ以外の方法を選びたいが、皮肉にも、恐喝という方法が資金を調達しやすい。

もしくは捕食した人間相手から奪うという手だが、これも資金を調達しやすい。どちらにせよ、無理やり奪うしか方法がないのが現状だ。

ならばどうする？

綾は一人自問した。

考えても、考えても、綾の頭には良い考えが思いつきそうになかった。

「……………はあ、どうしようかな……………ん、あの人って」

ふと顔を上げて、前方を走る車に視線を向ける。

一瞬、車の助手席に座っていた男と目が合った。どこかで見覚えがあったような気がしたけど、思い出せない。

結局、すぐにその男のことは忘れることにした。

「……………ああ、もう、本当にどうしようかな。あ、そうだ……………」

あんたも何か良い案を考えなさいよ」

綾の頭の中に彼女がいることを思い出した綾は、さっそく意識を集中させた。

途端、頭の中心部に何かが動き回っているような違和感を覚えた。そして、頭の中から声が聞こえてきた。

（ごめんなさい……………綾。私にも良い考えが思い浮かばないの）

残念なことに、声もどうしたらいいか検討も付かなかった。

『……………とりあえず、一緒に考えましょう。国道を通って、高速道路を通って、適当な都市に着く頃には何か良い考えが浮かぶわ』

（そうね、二人で考えれば、きっと何か思いつくかもしれないわね）

『……ええ、きっと、たぶん、もしかしたら思いつくかもしれないわね』

綾と彼女、二人は揃って後ろ向きだった。

(……どうしよう)

『……どうしようか……』

空高く月は上り、星達がイルミネーションを描き始めても、二人に妙案が浮かぶことはなかった。

第九話：決着（後書き）

これにて『綾』の話は終了です。

テーマは伏せておきますが、少しでもなにか感じることもあるなら、幸いです。

しつこいくらいに注意書きを書きましたが、グロテスク描写は精神に強い負担をかけてしまうので、そういった意味で行っています。

最後に、もう一度注意書きをしておきます。

この話に登場する人物、施設、その他諸々の地名や名前は、全て架空の人物であり、フィクションです。

この話を読んだあと、如何様のトラブルが起きても、私に一切の責任義務はなく、全て読者の自己責任とします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9840f/>

綾

2011年3月6日16時40分発行